

---

# Unforgettable ~忘れられないあなた~

リッチー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Unforgettable ～忘れられないあなた～

### 【Nコード】

N1292G

### 【作者名】

リッチー

### 【あらすじ】

アメリカのオレゴン州で、駐在員の妻として日々を暮らすしおりは、コーヒーショップで働く一人の日本人男性と知り合う事になる。姉と弟の様なやりとりを重ねる内に、次第に惹かれていく二人だったが……

第一章：出会い 第二章：一つの事件

U n f o r g e t t a b l e

く忘れられないあなたく

リッチー

一章 出会い p 3

二章 一つの事件 p 4 3

三章 部屋 p 6 5

四章 忘れられないと言う事 p 1 0 2

五章 確かなる繋がり p 1 3 0

六章 星の向こうに p 1 7 1

七章 エピローグ p 3 7 0

## 第一章：出合い

「行ってきまーす！」

「行ってらっしやい！」

平日のしおりの朝は、五歳になる娘優花を送り出す事から始まる。“色とりどり”の子供達に混じって、大きめのピンク色のジャケットを着た愛娘が、黄色のスクールバスに乗り込む所を見ていると、いつも目頭が熱くなる。

キンダーガーテン、日本で言う幼稚園に行き始めたばかりの頃は、行くのが嫌だと毎晩泣き喚いたものだった。

日本人の子供の中でも小柄な方に入る優花は、アメリカ人の子供の中に混じると、ひと際小さく見える。その小さな子が、いきなり大きな子供達の、しかも英語の世界に飛び込まされて、不安で泣き喚きたくなるのは致し方ないことだろう。

あまりにも泣き止む事が出来ず、不憫に思った先生から電話で呼び出された事も数回あった。

学校に行つてみると、職員室で小さくなって下を向いているのだが、しおりの姿を見ると、また堰を切った様に泣き始めるのだった。

「大丈夫、大丈夫。頑張ったね。」

そう言つて抱きしめながら、背中をさすつてあげると泣き声はピクに達し、しばらくすると落ち着きを取り戻し始める。

ある日、迎えに行つた帰りに車の中で、

「どうだった？先生は優しくしてくれたの？」

と、聞くと、

「ヤッチョツケイ、ヤッチョツケイって言つてくれた」

優花はしゃくりあげながらそう答えたのだが、意味が分からず、学校へ出向いた時に担任の先生に聞いてみると、

「ああ、それは“ザツツ オツケー”って言つたのよ。」

そう言いながら笑つて答えてくれた。

その時は、なるほど耳で覚える英語とはこういう事かと妙に感心したものだ。

そんなこともあったなあ、と感慨にふけりながら、スクールバスが見えなくなるまで手を振っていると、ふと今日が水曜日である事を思い出した。

大手電子メーカーに勤める夫の憲二に付いて、オレゴン州最大の都市ポートランドの南西に位置する、ここビーバートンという市に来て三年余り。

いわゆる「駐妻」である。

その「駐妻」であるしおりが、単調な毎日の中に、何か変化を求めて始めた事があった。

それは毎週水曜日に、ノース・ウエスト地区にあるオレゴン最大級の本屋「パウエル・ブックスストア」でまず本を買い、そのままポートランドの“ノブヒル地区”と呼ばれるエリアを横切る23番通り、通称”トウエンティースード”にあるイタリアンコーヒッシュ「ヨップ・トレパツォーン」へと入る。そしてラテを飲みながら、買ってきた本をゆっくり読む事だった。

本は新書の時もあれば、日本の古本だったりもする。

「パウエル・ブックスストア」には、膨大な数の新書の他に、数カ国の古本まで置いてあるのだ。

水曜日と言う日に特別な意味は無い。

始めの頃は曜日に関係なく来ていたのだが、周りに止めやすい駐車場がなく、路上駐車を余儀なくされるこの“ノブヒル地区”で、何故か決まって水曜日には容易く駐車スペースが見つかる事から、いつのまにかしおりにとって水曜日がゲンのいい日となっていたのだ。

そして今日も、店の近くにうまく駐車スペースを見つける事が出

来たしおりは、買ったばかりの本を片手に店のドアを開けた。

イタリアンコーヒーハウスとうたっているこの店は、トウエントイーサードとラヴジョイと言う通りの角にある。その角に面して入り口が作られてあり、両通りに面した壁はガラス張りになっている為、店内はとても明るい。その店内のあちこちに小さな棚が設置されており、その上には大小様々なコーヒーカップが飾られてある。

これがイタリア風なのか、内装は明るい木目と黄色を主体に統一されており、所々に原色の緑色を使ってあるのが特徴的だ。

更に、窓際のカウンター以外のテーブルには、全てふかふかのソファーを置いてあるのも魅力的だった。

「ハーン！元氣！？」

毎週決まった曜日に来てみると、さすがに顔を覚えられているらしい。

毎回声をかけてくれるのは有り難いのだが、しおりの英語力では「元氣です」と答える位しか出来ないのがもどかかった。

しかし、それはそれで店員も分かった上で、それ以上無理には話しかけてはこないのも有難い。今では、しおりが来ると何も言わなくても“ラテ”が大きめのカップに見た目も美しく出てくる。

この店に最初に来たのは、オレゴンに来てすぐの頃だった。

在留届を出す為に、ダウンタウンにある日本総領事館へ、憲二と優花と三人で出向いた事があった。

初めて来たダウンタウンで、せっかくだから少し観光でもと思い立ったしおり達三人は、在留届を出し終わると、ガイドブックを開いた。

ナイキタウン、パイオニアプレイス・ショッピングセンター、市庁舎・・・

正直、これと言ってどうしても今見ておかなければ、と思える所がない。

中都市のダウンタウンである。無理も無い。

元々、観光で栄えている都市ではなく、主な産業は農業や林業であり、観光スポットは限られてくる。

どうしようかと悩んでいると憲二が、

「そう言えば、現地採用の日本人の人が、ノース・ウェスト地区の23番通りとか言う所に、いつか行ってみると良いですよって言ってたなあ。ポートルランドで一番おしゃれな所だつて。」

それを聞いたしおりは、是非行ってみましようと思二を誘った。

ガイドブックを見ると、地図の上ではそれほど離れている訳でもなさそうだ。

そこで少し良い所を見せようと憲二が安請け合いましたのが間違いだった。

ポートルランド周辺の都市は、バーンサイドと言う大通りを挟んで南北に、そしてウイラメットリバーと言う、南北に縦断している川を挟んで東西に分けられている。

ダウンタウンやしおり達の住むビーバートン市などを含むサウス・ウェスト地区、オシャレな通りや画廊などが多く、山の手をイメージさせるノース・ウェスト地区、古くからの住人が多く、アジア系のレストランなどが充実しているサウス・イースト地区、そしてポートルランド国際空港のあるノース・イースト地区と、大きくこの四地区に分かれている。

そして各地区を繋ぐフリーウェイやハイウェイも充実しており、車での移動も不自由を感じさせない。

ダウンタウンから23番通りへ行くには、ポートルランド市を南北に分けている、バーンサイドと言う、大通りを行くのが分かりやすい。しかし大通りとは名ばかりで、片側二車線とは言え、実際は交通量の多い狭い道を行かされる事になる。

ドキドキしながらとりあえず山の方に向かっていくと、次第に15

番通り16番通りと、交差した通りの頭に付いている数字が増えてきた。という事はこのまま行けばその内23番通りにぶつかるはずである。

しかし交差している通りは交互に一方通行にもなっている。

緊張している憲二としおりは、バーンサイド通りから見て、23番通りが右に曲がるのか左に曲がるのか確認していなかった。どちらに曲がるのかが予め分かっていたら、前もって走る車線の決め方も違ってくる。

この頃の憲二は、狭く交通量の多いこの通りですぐに車線を変えられる事が出来るほど、まだ運転に自信が無かった。

「おい、おい、今の通り何番だった!? 左に一方通行だったよな? って事は、23番は5本後だから。あ、しまった! 車線変えとかないと!」

急にハンドルを切った憲二に、驚いた後続の車がクラクションを鳴らす。

同乗者がいる時に、慌てて運転を誤ってしまい、クラクションを鳴らされる事ほど、自尊心を傷つけられる事はない。

真つ赤な顔でハンドルを切る憲二を、はらはらしながら眺めていたしおり達だったが、無事に23番通りに入った時は、自分が運転していたのかと思える位に疲れ果てていた。

しかしここからが問題だった。

駐車場が無いのだ。

通りの両端に、洒落た店舗が並び始めたのは良かったが、どこにも駐車場らしき所が無い。諦めて路上駐車をしようにも、どこもかしこもびっしりと車が止まっている。やっとタイミングよく車が出たと思えば、すぐ後に後続の車が来ており、バックでの縦列駐車も出来ない有様だ。

それならば、交差する通りはどうだろうとハンドルを切ると、住宅地に入ったり急に一方通行だったり。

憲二はイライラのピークに達していた。

「もう帰るぞ！」

車の中は、憲二の吐き出す不機嫌な空気が充満していて、これから楽しくシヨツピングなどという雰囲気ではなくなっていた。

しかし、その時偶然右端に駐車していた車が、憲二達の車の前に割り込んだ。

慌ててブレーキを踏みかけた憲二だったが、よく見るとその車が出た所は、路上駐車の出来る箇所の一前で、バックからではなくても縦列駐車が出来る格好の場所だったのだ。

帰るつもりだった憲二が思わずつられる様に駐車すると、全員がほぐつとため息をついた。体中が固まっているのが分かる。

三人が外に出て深呼吸をすると、たまらなく香ばしいコーヒーの香りが漂ってきた。

そこにトレパツオンの入り口があったのだ。

ふらふらと入って、ふかふかのソファで飲んだラテは、今でも忘れられない記憶として、しおりの頭の中に残っている。

それから、しおりは一人で運転する様になり、ダウンタウンを通らなくとも、ノース・ウエスト地区へと行ける事が分かると、毎週一人で通うようになった。

初めは英語力の無いしおりにとって、一番発音し易かったのが“ラテ”であった為に、毎回それを頼んでいたのだが、実はそれだけが理由ではなかった。

この店では、お持ち帰りではない客には、オリジナルのコーヒーカップで出してくれる。

それ自体は大して珍しいサービスではないのだが、この店のコーヒーカップ、これがなんとも言えずしおりの手にフィットするのだった。

細かく言えば、しおりの指の長さ、手の厚さ、唇の大きさや厚さ等、様々な点で相性が良いのである。

しおりは出来上がった自分のラテを片手に、空いているテーブルを探した。

窓際が一番好きなテーブルが空いている。

小さくて丸い、白木にニスを塗っただけの木目のテーブルと、それに不釣り合いなクッションの効いた大きめの一人用ソファ。しおりはこのソファがとても気に入っていたのだ。

座ろうかと思ったが、先客の置いていったカップと、食べかけのマフィンが置いてある。

どうしようかと躊躇っていると、ふいに横から、

「今片付けますね。」

と、日本語の男の声がした。

「え？」

ビククリしているしおりに、

「たまに日本語の本を読んでらっしゃるから、多分日本の方だと思っ  
つて。」

二十代後半かと思われるその男性は、黒のポロシャツと黒のズボンという、他の店員と同じ服装で、しおりに向かって笑いかけている。

「え、ええ、私は日本人ですけど、あなたは・・・？」

戸惑っているしおりに、その男性はにっこりと微笑むと

「僕、思いつきり日本人ですよ。」

と、答えた。

「え？そうなんですか？たまにここでお見かけしてましたけど、て  
つきり日系人の方かと思ひ込んでいました。英語もお上手に見えま  
したし。」

確かに、この店に来る度に見かける顔であったが、日系かアジア  
系の店員だとばかり思ひ込んでいた。

「ははは！そんなに英語が上手に見えました？僕短いセンテンスな  
らなんとかしゃべれるんですけど、長い話なんて喋らせたら全然だ

めですよ。」

そう言って笑った。

「はい、どうぞ」

テーブルの上を片付け終えた彼は、しおりのお気に入りのソファ  
ーを勧めた。

その時に、少しだけソファを引いてくれた仕草があまりにも自  
然で、ちらりとネームタグを見ると“GEORGE”と書いてある。  
「あら？お名前ジョージさんっておっしゃるんですか？」

「ああ、僕の名前、譲二つて言うんです。だから英語でもジョージ。  
そのまんまでしょ？」

目尻にシワを寄せながら微笑むと、カウンターの中间に戻って行っ  
た。

しおりはソファに腰を下ろし、買ってきた本を開いた。しかし、  
どうにもいつもの様に頭に入っていない。知らず知らずの内に、ジ  
ョージを目で追っている。

やはり、日本人と言うよりは日系人に見える。

日本人と日系人、何が違うと言うのだろうか。

同じ日本人を祖先に持ちながら、アメリカで生まれ育ったのと、  
日本で育ったのでは、何かが違うと感じた事は、これまでも  
何度もあった。生まれ育った環境による服装のセンスなのか、髪型  
なのか、女性であればお化粧であるとか、それともそれらを全てひ  
つくるめた上で、かもし出す雰囲気なのか。

しおりはジョージを見ながら、そんな事を考えていた。

たまに聞こえてくる彼の英語は確かにネイティブとは言い難い。  
上手いとは思うのだが、その鼻にかかった低い声の中には、やはり  
日本人独特のアクセントが残っている。

背丈も160センチのしおりより少し高いくらいだろうか、大柄  
な方ではない。そして短めの髪と、黒の上下という服装のせい  
か、一層細身に見える。

では、何が彼をアメリカ育ちと思わせるのかと考えたしおりは、ふと、“目”だと思った。

アジア人と言うと想像されがちな、一重で切れ長の目ではなく、どちらかと言うと、くりくりとした二重で大きな目なのだが、よく見ていると、会話をしているジョージの目には、相手をアメリカ人だと意識している“揺らぎ”がない。

例えば、日本人同士で会話をしている時に、相手を日本人だと意識する事はない。

しかし、アメリカに来て間がない人達や、アメリカ人に対して何かしらのコンプレックスを感じている人などは、どうしても会話の時に相手が“外国人”だと意識してしまっている。

その気持ちの揺れが“目”に表れるのであるうか。

ふと気付くと、ジョージがしおりの方を見ていた。と言うより、しおりが見ているので見返した。と言う方が正しいのかも知れない。「何か？」

と、言いたげな表情で、片眉を上げてジョージは微笑んでいる。しおりは慌てて手を横に振ると、持っていた本に視線を戻したが、自分でも分かるほどに顔が火照っているのが分かった。

慌てて視線のやりどころを探して、時計を見ると一時半をとうに回っている。

優花が、幼稚園を終えてスクールバスから降りてくるのが、二時半。だから、常に余裕を持って一時には店を出る様にしていたのだ。「帰らなきゃ！」

しおりは慌てて立ち上がると、ジョージに少しだけ頭を下げた店を出た。

次の水曜日の朝、しおりはいつもの様に優花を送り出し、家中に掃除機をかけると、トウエンティーサードへ向かった。

四月に入っただばかりの今年のオレゴンは、そろそろ雨季も終わっ

ていいはずだというのに、いつまでも空がしぶっている。

しおりは、歩道にせり出ししている大きな松の木の横に駐車スペースを見つけると、車を止めた。

「あ、いらっしやいませ！」

カウンターの前にジョージがいた。

アメリカのコーヒーショップで、日本語で迎えられるのもおかしいなものだ。

「ラテでいいですか？」

ジョージはニコニコしながら聞いてくる。

「はい」

と、答えたものの、なんとなく周りの視線が気に掛かってしまう。

「いいじゃないですか。同じ日本人なもの。日本語でいきましようよ。」

笑うと目じりに数本のシワが出来、太目の眉毛と合わせて、人柄の良さを感じさせてくれる。

礼を言って、出来上がったラテを受け取った。しかし、しおりの好きなテーブルには一冊の本が置いてある。誰か既に座っているのではしょうがない、と他のテーブルを探そうとすると、

「ちょっと待っていて下さい。」

と、言いながら、そこにあった本をどけてくれた。

「あら、いいんですか？」

「はい。そろそろいらっしやる頃だと思って、取っておいたんです。」

と、悪びれることなく言ってくる。

「え、それは・・・」

「いいんです、いいんです。さ、座ってください。」

ジョージはそう言って、ソファアの上をパタパタと叩くと、

「さあ、どうぞ。」

と笑いながらカウンターの中间に戻って行った。

何となくこそばゆかったが、ありがたく座らせてもらう事にした。座ってみると、やはりこのソファが一番くつろげる。

しおりは改めてそう思いながら、今日買ったばかりの本を開いた。三十分程経った頃だろうか、一息いれようと本を閉じると、それを見計らった様にジョージが声を掛けてきた。

「あの、新しいラテ作りましょうか？」

手元のカップの中身は、温かさをとうの昔に失っていた。

このカップは蓋が付いている訳ではないので、保温性は低い。いつもはそういうものだと思って、ぬるくなった物を最後まで飲んでいたのだが、新しく入れましょうかと言われると、とても心が動いた。

「じゃあ、お願いしようかな。」

しおりがお金を払いにカウンターに行こうとすると、

「ああ、大丈夫です、これは。」

「え？でもお替りってタダでしたっけ？」

「いいんです、いいんです。」

と、言ってジョージはカウンターの中に入っていった。

程なくして、新しいラテを持って来ると、しおりの前に置いた。

「はい、どうぞ。」

「有難う・・・？」

ジョージはカップを置いて立ち去る訳でもなく、そこに真面目な顔をして立ち尽くしている。

「あの・・・何か？」

「いつもこのくらいの時間に来られていますけど、ランチって食べないんですか？」

と、おずおずと聞いてきた。

確かに、しおりが来るのは十一時過ぎ。そして帰るのが一時前だから、一般的にはランチの時間だ。

しおりはいきなりの質問に面食らいながらも、

「普段は軽く食べるんですけど、水曜日はなんとなくコーヒーでお

なかが膨れちゃうっていうか、食べる事を忘れちゃうって言うのか・  
・」

それが聞こえたのかどうか、ジョージは唐突に聞いてきた。

「あ、あの、クレープ好きですか？」

「クレープですか・・・？」

しおりは戸惑った。

クレープは嫌いではないが、取り立てて好きと言う訳でもない。

日本に居た頃は、娘の優花が欲しがった時などに買ってあげた物を、一口もらった程度だった。

しおりがジョージの真意を測りかねていると

「あの、一度、その、食べてみませんか？」

「私が、ですか・・・？」

怪訝そうに聞き返すしおりに、

「あれ？何か聞き間違えちゃったかなあ・・・」

とボリボリと頭を搔きながら、

「あの、要するに一度ランチを、あのクレープと一緒に食べてもらえないかなあと思って。」

紅くなつた顔で真剣に聞いてきた。

何故クレープなのだろうとしおりは一瞬考えたが、それよりも自分が誘われていると言う重大な事実が気が付いた。

まだ、まともに話した事さえないのだ。

「あの、困ります・・・」

断ろうと口を開きかけたしおりに、

「きつと気に入ってもらえると思うんです。」

と、ジョージが懇願する様に言ってきた。

しおりは、一度レストランでクレープを食べた事があるのを思い出した。

あれはいつだったか、特に日曜の朝に混み合っている、ファミリー

ーレストラン風のパンケーキハウスに、家族で朝食を食べに行った事があった。

周りを見てみると、お皿に山盛りのパンケーキと、更にオムレツやイタリアンソーセージがこれでもかとはかりに、積み上げられている。しおりは、見たただけでお腹が一杯になりそうだったが、ふとメニューに目を通すと、クレープと書いてあった。クレープだったら薄いし、さほどポリュームも無いだろうと思ったのが大きな間違이었다。

運ばれてきた大きなお皿の上には、数枚の大きなクレープが、たつぷりのジャムやフルーツ、ホイップクリームと共に乗せられていた。

一口目はそこそこ美味しくも感じたのだが、三口目にはもう飽きてしまった。どうにもこうにも、ジャムの味と粉臭いクレープの味がべたべたと口に残って仕方が無い。しおりは残りをあきらめると、改めてコーヒーを頼んだ。そして、その薄いコーヒーで口の中にべたべたと残る甘さを洗い流したのだった。

それ以来、クレープを食べていない。

しかもランチにあの甘くてポリュームのあるクレープを考えただけで、げんなりする。

いやいやそれよりも、やはり誘われている事自体がもっと問題だ。

やはりここは断るべきだと思った。

「あの、お誘いは嬉しいんですけど、夫に聞いてみないとご返事できません。」

しおりがそう言うと、

「そうかぁ・・・そうだよなあ・・・当然結婚してますよねえ・・・こんなに美人なんだもの・・・」

誰に言うでもなく、一人ぶつぶつとつぶやいている。

「すみません。不躰に変な事を言ったりして・・・でも一度聞いてみてもらえませんか、ご主人に。」

あきらめるかと思いきや、鳶色の瞳ですがる様に聞いてきた。

しおりは、そうまでして自分にクレープを食べさせたい真意は分からなかったが、なんともその必死さが可笑しくなって、思わず

「ええ。」

と、答えていた。

帰りの車の中で、しおりは先程のやりとりを思い起こしていた。

アメリカ人の中に混じると、こちらで生まれ育ったかの様に溶け込んで見えるジョージの顔が、しおりをランチに誘った時には、日本人の子供の様に見えた。

その時の顔を思い出すと、つい笑みがこぼれてしまう。

「こんなに美人なんだもん・・・」

ジョージの呟きがふと甦ってきた。

美人だなんて、成人式の日、

「きれいになったわね。」

と、母に言われた時以来だ。

夫の憲二とは、高校の時以来の付き合いだったが、美人などと言われた記憶などない。

三十代になってからは、今更褒め合う事もなく、子育てと慣れない海外生活に追われている内に、化粧っ気さえなくなっていた。

しおりはバックミラーで、自分の顔を見つめ直してみた。

肩まで伸びた黒髪。これはそう悪くはないだろう。艶はいい方だ。肌の白さにも自信がある。ただすぐ顔が紅くなってしまっただけが気になる所だ。

後は、うりざね顔の真ん中にある決して高いとは言えないが、形だけはいい鼻。その下にある、情熱的と言えるほどに厚い訳でもなく、知的なクールさを思わせる程に薄い訳でもない、何の変哲もない唇・・・

しかし、顔の中で目だけは気に入っていた。母親似の目は、両目

ともに均一にバランスの取れた二重が切れ長に走っている。  
とは言え、客観的に見て美人と言えるかと言うと・・・

どこが美人なのよ・・・

きつとからかわれたのだ、大体いきなりランチに誘うなんて、どうかしている。

そう思いつつも、しおりは心に暖かいものが流れ込むのを感じていた。

そして、ジョージに自分には夫がいる事実を告げてしまった事を、心の片隅で少しだけ後悔している自分に驚いてもいたのだった。

「ねえねえ、知ってる？高橋さんとこ帰国だつて。」

律子が右手をちよつとちよつと前後にはためかせながら口を開いた。

「え〜！、子供さん中学校に入ったばかりじゃないの。」

答えたのは、佐和子だ。

律子と佐和子は、同じく電子機器関連の会社に勤める夫を持つ“駐妻”だ。

ビーバートン市の西側に隣接しているヒルズボロー市には、大手のコンピュータ会社があり、そこに関連した大小さまざまな会社が軒を連ねている。

そして、日本からの駐在員の家族も、その周辺を含めたサウス・ウエスト地区に数多く住んでいた。

律子と佐和子とは、プレイグループと呼ばれる、小さな子供達を持つ母親達の集まりで知り合った。

このプレイグループというものは、ポートランド近郊のそれぞれのエリアに存在しており、主に学校に上がる前の子供達を連れ、日本人の母親達で構成されている。時に井戸端会議の場になること

もあるが、違州から越して来たばかりの時や、日本から来て間もない人にとっては、貴重な情報収集の場ともなり得るのだ。

細身で背の高い佐和子と、対照的に背が低く、少しぼつちやりした律子とは、何となくウマが合ったのか、子供達が学校へ行くようになり、プレイググループに参加しなくなった後も、何かしらと口実を作っては会う様になっていた。

律子と佐和子、それにしおりを含めた三人は、ビーバートン市を横切る、キャニオンロードと言う大通りを、一本裏手に入った所にあるコーヒーショップでたまに“お茶”をする。

厳密に言くとコーヒーやエスプレッソ系のドリンクばかりなので、“お茶”ではないのだが、三人で集まる時には、

「久しぶりに、お茶でもしない？」

と誘い合わせて、ここに集合するのだ。

この店は、かなり店内が広く、いつでも席を確保出来るのと、何より日本人をあまり見かけないのがいい。

不思議な事に、日本人である自分達が日本人のあまり来ない所をわざわざ探しては、同じ日本人の噂話に興じている。

「そうなのよ。だから大変らしいのよ。子供さん、やっとこっこの学校に慣れてきた所だつて、言つてた矢先だつたじゃない。」

律子はそう言つと、しおりの方を見た。

「たもつ君も可愛そうに・・・。」

しおりは呟いて眉を曇らせた。

確か小学校の五年生の時に、こちらに来たものの学校に馴染めず不登校が続き、ついには軽い引きこもりになったと聞いた。

しかし、週に一度の日本人学校や、インターナショナルスクールに通わせたりして、やっと現地の学校に通える様になったはずだった。

「そう、そう、そのたもつ君の事もあつたじゃない。だから高橋さ

んの奥さん怒り出しちゃって、会社は家族の事を考えてくれないの  
かって、大分旦那さんと揉めたらしいわ。それで、今度帰国したら、  
もうどこにも行きませんから、って宣言したらしいのよ。」

佐和子が言うと、

「え、でもまた海外赴任の辞令が降りたりしたらどうするのかしら  
？」

律子が、人事でもないといった顔で聞いてきた。

「そりゃあ、旦那さん単身赴任って事になるわね。」

他人事の様には話してはいるものの、実際問題、しおり達駐妻達に  
とっては人事ではないのだ。

海外に営業所を置く会社は、一度帰国しても、又違う都市や、違  
う国に出される事など珍しくない。帰国して数年後に、同じ所に再  
赴任なんて事もざらだ。会社にはそれなりの理由もあるのだろうが、  
連れまわされる家族はたまった物ではない。

特に子供の教育問題は深刻だ。

物心付く前の子供ならまだしも、思春期に於いて、親よりも友達  
を一番必要としている時期に、転校、しかも言葉も通じない外国に  
連れて行かれると言う不安は、計り知れないものがあるだろう。

しおりは娘の優花も同じ様な事があっただけに、高橋さんの奥さ  
んの気持ちはよく分かった。優花の場合、幼かっただけに順応する  
のも早くて助かったのだが・・・

「うちだっていつ帰って来い、って言われるか分かったもんじゃな  
いわ。」

佐和子が不安げにため息をついた。

「ねえ、高橋さんとこ帰国ですって？」

その夜遅くに帰宅した憲二に聞いてみた。

高橋さんのご主人と憲二は、ゴルフ仲間のはずだ。

「ああ、急に辞令が降りたらしいな。」

と、人事のように言う。

「でも、奥さんと揉めているって話を聞いたわ。」

「サラリーマンってのは、辞令に逆らう事はなかなか出来ないからなあ。」

憲二が自嘲気味に答えた。

「でも、永住権を取って残る人達もいるじゃない。ここは永住するにもいい環境だと思うけど。」

「今は、永住権を取るのも昔ほど簡単じゃないんだぞ。大体、永住権を取って、そのままのポジションで居られたら良いけれど、その後その営業所が撤退になったりして、その会社から離れる事になったらどうする？また一から現地採用してくれる所を探す事になるんだぞ。」

「でも、あちこち行かされる不安も少ないわ。」

その分、子供の負担も少ないし。」

そう言うしおりに怪訝な顔をしながら、

「まさか、お前はこんな所に残りたいのか？」

と、言うのと、しおりの答えも待たずに続けて言った。

「俺はごめんだね。確かにここは住みやすい

よ。辺鄙すぎる訳ではないし、都会すぎる訳でもない。ある意味、理想的だよ、子供の教育の事を考えてもな。でも、なんだか、ぬるま湯に浸かっているみたいなんだよ、俺には。そりゃ日本の本社に帰れば、仕事以外の付き合いもあるし、今みたいに家族サービスも出来ないかもしれないけど、働いたっていう実感を、じかに感じられるのはやはり本社に居てこそだろう。」

そう言うのと、コップのビールを飲み干し、

「先に風呂に入るぞ。」

と言って、二階に上がっていった。

いつからだろう・・・

しおりは思った。

元々、憲二は出世欲の強い方ではなかった。

「何で、仕事が終わってんのに、課長と飲みに行かなきゃいけないんだよ。こっちには、大事な娘にお休みなさいを言う、更に大事な仕事が残ってるっていうのに。」

などと言いながら、帰って来るなり一歳になったばかりの優花にほおずりをしていたものだった。

それが、四年ほど前から急に仕事に打ち込む様になった。

きっかけは憲二が中学の時の同窓会に出てからだった様に思う。

中学生の時の同級生が軒並み出世していたと言って、暗い顔をして帰って来た。

それからというものの、上司から飲みに誘われれば必ず付き合い、休みの日でもゴルフ、マージャンなど、家には寝に帰って来る様なものだった。仕事に打ち込む事は、家族としては喜ぶべきなのだろうが、あまりの変貌ぶりに、しおりは次第に憲二との“ずれ”を感じ始めていた。そんな矢先に、このオレゴン駐在の話が舞い込んできたのだった。

しおりはこの話何かしら、家族にとって良い方向に向かうきっかけになるのではないかと期待していた。

しかし憲二は、こちらに来た事によって尚更、仕事に打ち込むようになっていった。

日本とオレゴンでは、時差が夏場で十六時間ある。そうすると、日本のリアルタイムに合わせようとすれば、時には夜中までの仕事となる。となれば、いくら次の日が休みであっても、どこかにかける気力など残っているはずも無く、結局はなんとなく休日を終わる事となる。それが、ゴルフだ。

それがしおりには不満だった。

さつき憲二が家族サーブिसと言っていたが、実際は家族で出掛ける事など、月に一度あるかどうかだ。もちろん、憲二が一生懸命働いているお陰で、しおりも優花も生活が出来ている事は事実であるし、その事に於いては感謝しているのだが、しおりは家族との事や自分の趣味を優先させる、欲の無い憲二が好きだったのだ。

元々、人と人というものはジッパーを閉じた時の様に、ぴったりと合さる物ではない、としおりは思っている。

最初は何もかもがぴったりと合っていたのが、ずれていくのではなく、最初からずれているのだ。ただそれを、愛情、尊敬等といった感情や、子供、家族等といった環境の変化など、様々な接着剤で繋ぎ合わせているにすぎない。しかし、その接着剤も時と共に風化していき、少しずつ剥がれ落ちていく。そして剥がれ落ちた箇所が増えていくにしたがって、その本来ずれている断面を見せ始めてしまう。見え始めたズレは、悪い方へ悪い方へとさらに連鎖反応を引き起こす。これまでは気にならなかった仕草にイラついたり、二人で居る事に息詰まりを感じたりする様になってくるのだ。

しおりは数年前から見え始めたそのズレを、改めて繋ぎ止める為の接着剤が、見つけれられずにいた。

次の日、しおりは“トレパツオン”に出かけた。

ドアを開けるといつものエスプレッソの香りが、鼻腔をすり抜けていく。

しおりはその香りの中にジョージを探した。

姿が見えない事に、微かな落胆を感じながら、いつものテーブルを見ると本が置いてある。

あきらめて、他のテーブルに向かおうとすると、

「そのテーブルいいのよ。ジョージがあなたに取っておいてって、電話してきたわ。」

カウンターの中の女性がそう言いながら軽く睨んだ。

しおりは、

「サンキュー……」

と言いながらテーブルについたが、なんとも落ち着かない。

ゆつくりラテを飲みながら落ち着いて本を読みたいのに、これじゃ、みんなに見られているみたいで余計に落ち着かないじゃない・

そんな時、カランと音を立ててドアが開いた。

反射的に目を向けたしおりに、目じりを下げて嬉しそうに立っている、ジョージの姿が見えた。

「よかった、その席ちゃんと取つといてくれたんだ、彼女。」  
と、自分の事のように喜んでいいる。

しおりはその目じりのシワを見た瞬間、うかつにもかすかなときめきを感じていた。恥かしさで下を向いたが、慌てて顔を上げて、

「あ、あの・・・」

しおりが、テーブルを取っておいてくれた事の礼を言い掛けた時、「お、やばい！タイムカード押さなきゃ！」

と、ジョージはカウンターの奥に駆け込んで行った。それから三十分ほど客が途切れず、カウンター内の従業員達は、ばたばたと忙しそうに動き回っている。

そんな中、ジョージもきびきびとエスプレッソを作っていた。

他の従業員と会話をしながら仕事をしている姿は、やはり日本人と言つよりも日系人に見えてしまう。それほど自然に、このアメリカ人達の中に溶け込んでいる。

一体彼は幾つなんだろう・・・

ふとしおりは思った。

ああやってアメリカ人の中になると、三十歳のしおりよりも年上に見える。しかし、しおりと話している時の笑顔を見ると五つぐらい若くも見える。

しおりは本を開いたまま、又知らず知らずの内に目でジョージを追っていた。男性として意識して見ている訳ではなかった。なんとなく目が行ってしまうのだ。すると、ふとジョージがしおりの方を見て微笑んだ。

しおりは、ジョージを見ていた事に気付かれたと思い、急にとてつもない恥かしさを覚えて、慌てて本を閉じて立ち上がった。

その時、「あれ？もう帰るんですか？」

とすぐ横で声がして、しおりは

「きゃ！」

とまたソファーに座り込んでしまった。

「あれれ？す、すみません。脅かしちゃったかな。」

ジョージが申し訳なさそうに横に立っている。

「いえ、急に声が近くでしたから・・・」

自分でもハッキリと分かるほど、顔が紅くなっている。その事実  
に気付かれない様、下を向いたまま答えると、

「あの、ご主人に聞いてもらえました？」

と、ジョージがおずおずと聞いてきた。

「え？」

「いや、その、出来たら一緒にクレープを食べに行ってもらえない  
かなって事なんですけど・・・」

「あつ、すっかり忘れてた・・・」

言いかげながら、でもたった二度話しただけの男性と、食事に行  
つていいかなんて聞ける訳が無いと思い直し、

「あ、いえ・・・」と答えてしまっていた。

ジョージは、

「そっかあ・・・ひよっとしたらと思つて、今日ケニーさんにちや  
んと店開けてくれつて、頼んどいたんだけどなあ・・・」

しおりを責める訳ではなく、一人ぼそぼそと呟いている。

「ケニーさんつて・・・？」

「あ、ああ、いや、すぐそこで小さなクレープ屋をやっている人な  
んです。日系人のおじいさんなんですけど、これがすつごく美味し  
いんです。」

しおりはジョージがあまりにも“すつごく”の所に力を込めて言  
うその熱意に、次第にそのクレープに興味がわいてきた。元々、し

おりは新しい事に出会う事が好きなのだ。

そのしおりの心の動きを悟ったのか、ジョージがしおりの顔を覗き込みながら、

「ね、行きませんか？」

と、目をくりくりとさせながら聞いてきた。

「でも、やつぱり・・・」

「あ、そうか。どこの誰かも分からない男と二人でいる所を誰かに見られたら、まずいんでしょう？じゃ、こうしましょう。別々に行くんです。そして別々にオーダーして、別々に食べる。それだったらいいでしょう？」

まあ、それならば誰に見られても詮索される事もないか、と思っ  
ていると、

「じゃ、決まりだ。やった！」

ジョージが小さくガッツポーズをした。

「ほんとにすぐそこなんです。店を出て左に2ブロック行った所で  
す。」

2ブロック？そんな所にレストランなんてあったかしら・・・と  
考えているしおりに、

「しおりさんは食べられない物ってありますか？」

と、ジョージが聞いてきた。

しおりは恥かしくなる位になんでも食べる。

他の動植物を食べる事によってしか生きられないくせに、この地球  
に何も生み出さない人間に、好き嫌いを言う資格などありはしない  
のだ、と言いつつしながら目の前に出された物はなんでも食べてき  
た。

「いえ、別に・・・」

「じゃあ、大丈夫だ。どうせ、あんまりメニューがないし。僕のお  
勧めは“ほうれん草とチーズ”なんです。絶対気に入ってもらえる  
と思うんだけどなあ。」

あまりハードルを高くしてしまうと、それをクリア出来なかった

時の落差は、特に大きく感じる。

それにクレープにほうれん草・・・チーズ・・・  
全く想像がつかずに、戸惑っていると、

「先に行つててください。僕は五分くらいしてから行きますから。

あ、店の名前は“クレープハウス”って言います。」

そう微笑むと、ばたばたと店の裏に入つていった。

しおりはどうかと考えたが、とりあえず行つてみる事にして店を出た。

ここトウエンティーサードでは、昔ながらの外観を残したままの建物に、様々なテナントが店を開いている。個人経営の小さな洋服屋から、老舗のレストランまで、一つ一つ表から覗いていくだけでも飽きが来ない。

水曜日の今日は、通りにあまり人影も無く、しおりはぶらぶらと様々な店を覗きながら2ブロック歩いてみた。しかしそれらしき店は見当たらない。どうしようかと迷ったが、もうちょっとだけ歩いてみる事にした。

そしてその店はふいにしおりの前に現れた、古めかしい建物と建物の間のほんの三メートルほどのすき間に、その店があった。

店と言うよりはスタンドだ。

とは言つても、後には開閉式の大きなキャビネットもあり、屋根代わりとなる赤ワイン色のオーニングもある。そしてそのオーニングの前の部分に“クレープハウス”と英語で書かれた、古い木の看板があった。

長い間、雨風にさらされてきたと思われるその木の看板は、元はクリーム色だった痕跡をかすかに残したまま、黒字のクレープハウスの文字だけが、くつきりと残されている。

スタンド前のレンガが敷き詰めてあるスペースには、小さいながらも二つの丸くて黒いスチール製のテーブルとイスが置いてあった。

そしてその店の中にあるカウンターの殆どを占めている、二面式のクレープ焼き機の後ろに、初老の男性が座っていた。

茶色い長袖のシャツを肘の上まで捲り上げ、大きい目のジーンズにこれまた茶色い頑丈そうな革靴を履いている。

白ではなく、黒いエプロンをしているのが逆にとても清潔感を感じさせてくれる。そしてきれいに禿げ上がった頭も顔もこんがり太陽に焼けていて、フサフサの白髪交じりのひげと銀縁眼鏡と言いついでたちを見る限り、大農場のオーナーと言った感じだ。

しおりがおずおずと店の前に立つと、にっこりと笑いながら、

「ハロー」

と、見事なバリトンを響かせて、英語で挨拶をしてきた。

「ハ、ハロー」

しおりが答えると、すぐ

「うん？オオ、日本人でしたか。」

と、すぐさま少しアクセントのある日本語が返ってきた。しおりの発音ですぐ日本人と分かった様だ。

「何にしますか？メニューはそこにあるだけですよ。」

と、横にかかっているボードを指差した。品数は少ない。

ハム&チーズ、ジョージの勧めてくれた、ほうれん草とチーズ、後はカスタードとイチゴやチョコバナナなど五品目程しかない。

収納スペースが限られている為、あまり品数も増やせないのだろう。

「あの、ほうれん草とチーズのクレープを下さい。」

しおりはジョージの言っていた物をオーダーしてみた。

「ほお。日本人にしては珍しいですね。」と、少し驚いている。

「あの、ちょっと人に勧められて・・・」

「オーケー、分かりました。今すぐ作りましょう。」

そう言つて、下に置いてあるクーラーボックスから、クレープの生地が入っている容器を取り出した。

レードルで手早く混ぜると、目の前の二面あるグリルの左の面に生地を乗せた。それを、竹とんぼの羽を丸くした様なスティックで、

くるくると器用に回しながら薄く丸く延ばしていく。

一瞬、間を置くと、木のスパチュラでその薄く広げられたクレープを持ち上げ、右のグリルに生地を裏返しながら乗せた。きれいな焼き目がとても食欲をそそる。

そしてすぐ又裏返すと、その四分の一くらいのスペースに、小さめにちぎった、生のほうれん草を乗せた。そしてモツアレチーズを半分だけほうれん草に掛かるように乗せていく。残り半分は生地の上に。次に薄く切ったトマトを三切れほど載せると、今度は白いパラパラしたチーズを乗せていった。

しおりが不思議そうに見ていると、

「フェタチーズって言うんですよ。これがいいんだな。」  
と笑いながら、

「何か、塩コショウとか、マヨネーズとか入れますか？」

と聞いてきた。

「お任せします。」  
「じゃ、シンプルにコショウだけにしましょう。」

そう言いながら、手早くクレープ上の具の上に振ると、すぐさま半分に畳んだ。

そして上の方から手前にパタパタと折りたたんでいくと、日本でよく見る三角形のクレープが出来上がった。

それをトングで摘み上げると、紙袋に入れた。

「はい、どうぞ。」

「あ、有難う御座います。」

一連の動作に見とれていたしおりは、それを受け取り、お金を払おうとすると、

「いいよ、今日は。久しぶりにきれいな日本人の女性を見たから、なんだかとても気分がいい。はっはっはっ」

と言って、その男性は豪快に笑った。

しおりは恐縮して頭を下げたが、手の中のクレープが気になって仕方が無い。その紙袋から立ち上る香りは、日本のクレープのそれ

とは明らかに違う。

しおりは紙袋を少しだけ破いて、食べようとすると、

「最初の一口目がとても大事なんだよ。

もつと、大きく出して食べてみて。」

そう言いながら、ニコニコとしおりの事を見ている。

とは言つものの、まじまじと見られている前で、大口を開けて食べるのは、さすがにはばかられる。

しかしそんな女性心理を無視した、

「もつと、もつと！」

と言つ言葉に乗せられた形で、ビリビリと大きく紙袋を破いたしおりは、恥かしさをこらえながら、思い切つてかぶりついた。

「美味しい！！」

しおりはあまりの美味しさに、自分のかぶりついたその食べ口を覗き込んだ。

そこには、ちょうどどうまい具合に熱の通ったほうれん草と、焼き上がりから口に入るまでの時間を計算されたかの様に、とろりと溶けたモツアレチーズ。そこに色目もキレイに挟まったトマト、そして白いフェタチーズが美しく積み込まれている。

色合いもさることながら、一つ一つの分量、火の通し加減、乗せる順番などが、甘さを殆ど感じさせない生地の中で、どう演技をするべきか緻密に計算されているのだろう。

感動しながら二口目を口に入れた時、

「ひょっとして、ユー（YOU）はボーイの友達かな？」

と、眼鏡の奥にある、大きな丸い目を嬉しそうに細めながら、カウンターの内の男性がふいに聞いてきた。

「ボーイって・・・？」

「そのコーヒー屋の、日本人の男だよ。」

「ああ、え・・・でも、まだ二回いや、三回しか話した事がないん

です、ですから友達という訳では・・・」

しおりが言いかけた時、急に

「はっはっはっ！そうか、ユーか！」

と大きな声で笑い出した。

何の事だか分からず、三口目を口に入れたまま、ぽかんとしているしおりに、

「オーごめんなさい。いやね、ボーイが、とても美味しそうな食べ方をする、素敵な日本人の女性を見つけたから、今度は是非連れくるって言っていたんだよ。そうかあ、ユーの事だったのか。」

そう言いながら、また、

「はっはっはっ」

と笑っている。

「確かに、ユーは実に美味しそうに食べてくれる。作った僕も嬉しいよ。」

と言いながら、更に大きな声で笑った。

そこに、

「やっと抜けた！全く、こんな時に限ってお客って続くもんだよなあ。もう。」

と言いながら、ジョージが肩で息をしながら走ってきた。

「ケニーさん！僕、カスタードイチゴ！」

「へい、ボーイ。お前もこの人みたいに上手に食べてくれたら、カスタードを倍にしてやるんだがな。」

「あ、また、僕の事ボーイって言ってるよ。全く、いつになったらちゃんと名前を呼んでくれるのかねえ。」

ジョージは、そう言いながらしおりの方を見て、ため息をついた。

「あの、私、そんなにいやしそうに見えていたのかしら。」

しおりはジョージを軽く睨んだ。

「へ？」

ジョージは何の事なのか分からず、ケニーを見るといたはずら小僧

の様な顔で、器用に口笛を吹きながらクレープを作っている。

「あ！ケニーさん、何か彼女に言った？」

「わしは何も言っていないよ。」

とそ知らぬ顔で答えながら、

「ほれ、出来たぞ。」

とジョージにクレープを渡した。

悪さをした後の子供の様な顔のケニーと、まだ軽く睨んでいる、しおりの顔とを交互に見ながら、ジョージはクレープにかぶりついた。

「うん！美味しい！」

尻尾を下げながら、一口ごとに空を見上げては口を動かしている。美味しそうに食べるそのジョージの仕草を見ている内に、いつの間にかしおりはその口元に目が吸い寄せられていた。

「はい、デザート。もう一個位食べられるだろう？」

ケニーは、苦笑しながらカスタードとイチゴのクレープを、しおりに差し出した。

「え、いや、私は別に、その・・・あの、すいません・・・有難う御座います・・・」

ずっとジョージの食べる姿に惹きつけられていたしおりは、そんなに食べたそうに見えていたかと思うと、恥ずかしさで顔から火が出そうだったが、そんな微かな羞恥心は、一口目を食べた途端どこかに吹き飛んだ。

「美味しい！！」

しおりは目を丸くしてクレープを覗き込んだ。

今まで食べてきたクレープとどこが違うのだろうか？

カスタードが美味しいのはもちろんだが、それだけではないような気がする。

一瞬の間をおいて、

「ああ、そうか生地か！」

としおりは思った。

ほうれん草とチーズの時も、このカスタードのクレープも、この生地が上手に全てをまとめている。かといって、生地がでしゃばる訳でもない。口の中のを飲み込んだ瞬間に、かすかにプンとその生地の香りを鼻の奥に残していく。

「はっはっはっ！ユー達は実に面白いな。」

ボーイは上を向いたまま、こちらのレディは下を向いたまま食べとる。まあ、わしはどっちを向こうが、美味しそうな顔をして食べてくれとるからうれしいけどな。はっはっはっ！」

そう言つて、腕組をしたままケニーは笑った。

「美味しそうな顔・・・」

と笑いながら、ケニーの方を見ていたジョージは、急にはっとした表情でケニーに聞いた。

「ま、まさか彼女に・・・？」

そう言つて、おそろおそろしおりの方を見た。

あきらかに睨んでいる。

「いや、いや、違うんです！ちょっと前に、うちの店のマフィンを美味しそうに食べてらっしゃったのがすごく印象深くて、でもいい意味で言っているんですよ。ホントに、ホントに、いや、ホントに！」

慌てて弁解しているジョージと、片方のまなじりを上げたままのしおりを見ながら、ケニーが又、

「はっはっはっ！」

と大きな声で笑った。

「今度娘も連れてきます。」

しおりが帰り際にそう言つと、

「娘！？」

と、二人は驚いた表情でしおりを見た。

「え、ええ・・・何か？私、娘が一人いるんです、けど・・・？」

「いや、そうですね。旦那さんがいるんだもの。子供さんがいてもおかしくはないですよ。可愛いんでしょうね、娘さん。」  
ジョージが目を細めると、

「何！？ユーは結婚しているのか？」

しおりとジョージの顔を見ながら、ケニーはずれ落ちそうになった銀縁の眼鏡を抑えた。

「え、ええ……？」

「そうか……」

と呟きながら、ケニーはジョージの方に少しだけ視線を走らせた。「いや、何でも無いんだよ。ただ、見た目がお若いから、びっくりしただけさ。娘さんはお幾つなのかな？」

「五才になります。」

「五才……か……」

先程まで笑顔を見せていたジョージは、ぽつりと呟くと、しおりに気付かれないように下を向いた。

「そ、そうか！五才か！今度は是非連れておいで。美味しいのをご馳走してあげるよ！」

ケニーが取り繕うように言った。

しおりはどことなく不自然さを感じないではなかったが、

「分かりました。今度連れてきます。」

と、ケニーに答えると、

「それでは今日は帰ります。本当に美味しかった。感動しました、ケニーさん。ジョージさん、教えてくれて有難う。」

そう言っ二人に頭を下げた。

そして、そのまま手を振りながら帰っていった。

二人は立ち上がったまま、その後ろ姿をいつまでも見送っていた。

「ボーイ、お前、知ってたのか？」

「旦那さんがいる事だけは聞いていたんですけど……」

「どうするんだ？それで？」

「いや、別に・・・」  
そう言いながら、寂しそうに空を見上げるジョージを、ケニーは複雑な思いで見つめていた。

帰りの車の中で、しおりは改めてクレープの味を思い出していた。香ばしい生地、バランスの取れた具材、絶妙なタイミング。その美味しさに感動すら覚えた。

今度の日曜日に、早速優花を連れて来よう。優花はきっと、あのカスタードとイチゴのクレープが気に入るだろう。

そこまで考えた時に、ふと、それを食べていたジョージの顔が脳裏に浮かんできた。

空を見上げて大きく口を動かしながら、目尻を下げて、目を細めて・・・本当に美味しそうだった・・・そしてそれを嬉しそうに見ていた、ケニーさん。

しおりは二人のやり取りを思い出しながら、一人微笑んでいた。

「ねえ、あなた。今度の日曜日はお仕事？」

しおりは、その夜帰宅した夫の憲二に聞いてみた。

「いや、仕事じゃないけど商工会のコンペがあるって言ってたろう。」

「そう答えた後、」

「何かあるのか？」

と聞き返してきた。

「ううん、久しぶりに優花を連れて、皆でノース・ウェスト地区のトウエンティースードでも行きたいなあ、と思って。」

何故だろうか、憲二が行けないと分かった瞬間、少しほっとしていた。

「ええ！？トウエンティースード？あんな駐車場の無い所、しかも日曜日に？勘弁してくれ。」

嫌な記憶を思い出したのか、大げさに手を振ると、

「久しぶりのゴルフなんだ、商工会主催って言っても、気を使わなきゃいけないじいさん達は今回不参加だから、結構楽しみなんだよな。」

頭はすでにゴルフの事で一杯になっている。

「じゃあさ、今度の日曜日ママと二人でシヨッピングに行こうか？」

しおりは優花を誘った。

もちろん、優花に異存のあるうはずも無く、

「やった〜シヨッピング、シヨッピング！」

と一人騒いでいた。

そして日曜日、しおりは優花を連れてトウエンティースードに来ていた。

十一時を少し回った頃だったが、やはり車を止める場所を探すのに三十分ほどかかり、へとへとになった頃、やっとスペースを見つけた。

「ふうう、やっと見つけた。ごめんね優花、待たせちゃったね。お腹空いたでしょう。でもね、優花に食べさせたい物があるんだ〜。」

しおりがそう言いながら、お腹をくすぐると、

「イエ〜イ！なに、なに、なに！？」

と、小さい鼻を膨らませながら、期待に満ちた顔でしおりに抱きついてくる。

「それは行ってからの楽しみ！」

「よ〜し！行くぞ〜！」

優花はスキップをしながら、しおりに付いて行った。

「こんにちは！」

クレープを焼くグリルの後ろで、座って本を読んでいたケニーに、しおりは声をかけた。

「オウ、しおりさんか！」

ケニーは顔をほころばせると、本を傍らに置いて立ち上がった。

そして、しおりの側でもじもじしている優花に気付いた。

「オウ、こちらのちっこいレディーは誰かな？」

「ゆうか」

優花が小さく答えると、

「娘です」

としおりが付け加えた。

「そうか！このほつぺたぽっこりちゃんが娘さんか！可愛いな！」

ケニーはカウンターの中から出てくると、優花のほつぺたを突付いた。そして恥ずかしがってしおりの後ろに隠れようとする優花に、「今日は何を食べますか？こちらのレディーは初めましてだから、ご馳走しますよ。」

と、言って笑った。

「ねえ、ママ、何があるの？」

「あのねえ、ここはとっても美味しいクレープ屋さんなのよ。このおじさんがくるくるくるって作ってくれるのよ。」

「クレープ！？食べたい！！優花カスタード！」

「はっはっはっ！優花ちゃんはカスタードが好きなのか。ようし、美味しいのを今作ってあげるから待っているんだよ。」

ケニーはそう言うと、いつもの様に生地をグリルに置いて焼き始めた。

「ねえねえ、ママ！おじいちゃん上手だね！」

と優花がはしゃいでいる。

「こら！おじいちゃんは失礼でしょう。」

「はっはっはっ！いいよ、おじいちゃんで。」そう言いながら、ケニーがカスタードの上にスライスしたイチゴを乗せると、

「あ、イチゴだ！」

優花は嬉しそうに目を丸くした。

「ほら、出来たよ！」

とケニーが手渡すと、優花はあちあちと言いながら鼻を広げてかぶりついた。

一瞬目を丸くして、自分の食べた跡を覗き込むと、

「美味っし〜い!〜!」  
と叫んだ。

「ママとそっくりじゃないか。はっはっはっ!」  
ケニーは笑いながら、しおりに

「しおりさんは、今日は何を食べますか?」と聞いてきた。

しおりは最初から、ほうれんそうとチーズのクレープと決めていたので、それを頼んだ。

「ママ、ほうれん草食べるの?」

「これが美味しいんだから!」

「じゃあ、ひと口ちょうだい!」

「はっはっはっ! 食いしん坊はお母さんそっくりだな・・・」

ケニーが言いかけて、しおりの鋭い視線を感じると、

「あ、いや・・・オウ、そろそろ出来るぞ!」

と、言ってクレープを巻き始めた。

しおりは苦笑しながら、出来上がったクレープを受け取るとおもむろに一口食べた。

「美味しい!〜!」

「優花も、優花も!」

ねだる優花に一口食べさせると、又同じ様に食べ口をひと目見て、

「美味しい!〜!」

と叫ぶ。

そして二人で顔を見合わせながら笑っていると、ふいに後から、

「あ、ずるい! 自分達だけ!」

と言う声がした。

後を見ると、ジョージがいつもの黒いポロシャツで、腕組みをしながら立っていた。

「ああ、それは僕のカスタードイチゴじゃないか!」

と、優花の手に僅かに残っているクレープを見た。

「これは優花の!」

優花が手を引っ込めると、

「く〜！その日の一番カスタードは、僕のつて決めていたんだぞ〜！」  
と優花を睨んだ。

「しょうがない、ケニーさん、二番目のでいいや。カスタードイチゴ下さい。」

ジョージがそう言うと、ケニーは肩をすくめて、

「ユーは、全くどうしようもない奴だな。」  
と言いながら作り始めた。

そして、

「ほれ、今日六枚目のカスタードだ。」  
と言って手渡した。

「ろ、六枚目・・・」

「ぶぶぶ！二番目でもないじゃん！」

優花が笑った。

「こら、優花！」

しおりがたしなめようとすると、

「にゃ、にゃにお〜！！！」

と叫びながら、ジョージが優花を追い掛け回し始めた。

「全くあいつは、いつまでたってもボーイだなあ・・・」

ケニーは首を振った。

しおりは、そんなケニーの言葉が全く聞こえていないかのように、二人の姿を追っていた。

優花は、アメリカに来て以来、少なからず人見知り気味になっていた。言葉の壁がそうさせているのか、身体の大きなアメリカ人にプレッシャーを感じているのかは分からないが、どうしても優花は人と打ち解けるのに時間がかかるようになっていた。

それがどうだろう。

ジョージとは殆ど会話をしていないと言うのに、すっかり打ち解けているではないか。

しおりはジョージがどんな魔法を使ったのかと思っていると、横か

らケニーが、

「あいつは不思議な奴なんだよ。子供とフレンドになるのに時間が  
いらななんだな。まあ、だからいつまで経っても、わしの中ではボ  
ーイなんだけどな。」

と、ウインクをしてみせた。

そこにジョージが、優花を肩に乗せて戻ってきた。

「きゃははは！ママ、見て！優花みんなより一番おつきいよ！」

「あんまりバタバタしないの！」

「いいんですよ。僕、優花ちゃんみたいな子、大好きなんです。」

そう言って笑うジョージに、

「知らないでしょ。ママ怒るとすごーい怖い顔で睨むんだよ！」

肩の上の優花がそう言うと、

「知ってる。」

とケニーとジョージがうつかり声を揃えて答えた。

思わず顔を見合わせた二人が、恐る恐るしおりの方を見ると、や  
はり睨んでいる。

「ほらね。」

優花の一声に、とうとう三人ともこらえ切れずに、嘔き出してし  
まっていた。

その日、家に帰ると、憲二が不機嫌そうにテレビを見ていた。

「あら？もう帰っていたの？」

しおりは、良くない波長が家中に充満している事を感じると、

わざとさりげなく声をかけた。

「帰ってたのじゃないよ。何時だと思っっているんだ？」

案の定、そう言いながら憲二はしおりに冷たい視線を投げてきた。

「まだ三時じゃない。どうしたの？」

努めて柔らかく言っては見たものの、一向に苛立ちを隠そうとも  
しない。

しおりはゴルフで何かあったのだと思った。

憲二はゴルフでもなんでも、自分の調子が良くないと、すぐに苛々とし始め、そしてそれを隠そうともしない。

周りはその苛立ちを感じているのだが、当の本人である憲二はそれに全く気付いていない。しおりも数回、一緒にゴルフに行った事がある。しかし憲二のショットが思い通りにいかなかった後に、初心者であるしおりが空振りをする時、

「チツ」

と、舌打ちをする音が後ろから聞こえて来ることが度々あった。それ以来、すっかり行く気を失ってしまった。

「まったく、今日は散々だったな。三本商事の木本さん知ってるだろう？そりゃ、俺よりは一回り以上年も上だし、ゴルフも上手いのは分かるけどさ、いちいち俺に手ほどきするんだ。まったく、やれグリップがどうだ、スタンスがどうだ、ここはこのクラブの方がいいんじゃないかって。お陰で苛々しっぱなしだったよ。」

木本さんなら一度、食事を一緒にした事があった。

あれは去年、合同ガレージセールを、たまたま木本家と、佐和子と律子の家族を含めて四家族で行った時だった。

盛況のうちにガレージセールも終わり、せっかくだからこのまま打ち上げを兼ねて食事に行こう、という事になったのだった。

そして、近所のチャイニーズレストランに出かけたのだが、木本さんはアメリカなんだから、ウエイトレスが中国人ばかりとは限らないはずだ、と言い放ち、拳句の果ては、長い黒髪で切れ長の目のウエイトレスが通りかかると、

「ニイハオマー」

と声を掛け、ちよつと韓国人を思わせる風貌であれば、

「アンニョンハセヨ！」

と叫ぶ。

もちろん顔の造りで判断するなど、失礼極まりなく、言われた相

手はムっとしているのだが、当の本人は気付いてもいない。

同席しているしおり達が、穴があつたら入りたいほどだった。

空気の読めない人と言うのは正にこの事だと、その時、しおりは痛感したのだった。

その木本さんと18ホールをフルに回ったのであれば、そうとうのストレスであつたらう。かと言って、狭い日本社会では、今後の事を考えるとあからさまに嫌な顔も出来ない。

「それは大変だったわね・・・」

しおりが憲二に声をかけようとした時、優花が割って入った。

「パパ！あのね、今日美味しいクレープ食べたんだよ！」

しおりは常に、誰かと誰かが話している時には、割り込んではいけないという事を、口を酸っぱくして言ってきた。

それを出来るだけ守ろうとしている優花は、自分の言いたい事を我慢しながら、他の誰もがい終わるのを待っている為、時に空気の流れを無視した話題を振ってくる。

とにかく自分の感じた全てを、皆に知って欲しいだけなのだ。

しかし突然振られた憲二は、

「クレープ？」

と怪訝な顔で答えた後、

「つたく、お前達はのんきでいいな。こっちは、せつかくのゴルフを台無しにされたつてのに。」

と鼻で笑った。

「あなた！」

しおりは小さくたしなめた。

もっと色々と話したかった優花は、憲二の返してきた言葉に、自分の楽しかった記憶を再現する場を失った事に気付くと、寂しそうにテレビを付けて、デイズ二チャンネルを見始めた。まだ優花位の子供は、自分の事でいっぱい、大人達の事情や、その場の空気などを全く読めていない言動をする事が多々ある。それでいて、自分に対する空気だけは機敏に感じ取るのだ。

しおりは、幼児から子供へと脱皮し始め、その青い羽も乾ききれ  
ていない優花が、ストレスの波にさらされてきたのをずっと近くで  
見てきた。だから、しおりは優花が家に帰って口にする一言一言を  
大事に扱ってきた。

過保護に育てるのではなく、言いたい事を吐き出させ、中に残さ  
せない。

それが楽しい事であろうと、嫌であった事であろうと、子供にと  
っては身体の中に留めておいてはいけない物だと、しおりは常に思  
っている。

さすがに、嫌な空気を感じ取った憲二は、

「ああ！せっかくの休みだったのにもう！」と苛立たしげに呟くと、  
裏庭のバルコニーに出てイスに座り、ビールを片手にタバコを吸い  
始めた。

しおりは横に座ると、口を開いた。

「あなた、ちよつといい？」

「ああ。」

面倒くさそうに答える憲二に、しおりは言った。

「あの、たまにでいいの。優花の言う事を、ゆっくり最後まで聞い  
てあげて欲しいの。」

「聞いているじゃないか。」

「ううん。いつも優花は話半分で諦めてるわ。」

さっきだって、もつとあなたに言おうとした事があつたはずなの。

でも、あなたがろくに聞いていない事くらい、優花だって気付いて  
いるわ。昔は、ちゃんと聞いてあげてたじゃない。」

「俺だって聞いてあげたいさ。でも、疲れて苛々してる時に呑気な  
事を聞かされて、俺にどう答えるって言うんだよ。それにな、俺は、  
昼間は現地従業員と、夕方からは日本サイドとやり取りして、どれ  
だけのストレスが溜まっていると思う？」

「でも今日は、仕事とは関係ないじゃないの。」

もちろん、木本さんの事は私も知っているし

、大変だったと思うわ。でも、優花からすればゴルフなんて・・・」  
「ゴルフなんて？」

憲二はしおりを睨みつけた。

「ゴルフなんてってなんだよ。そりゃあ、お前達からすれば、単なる遊びにしか見えないかもしれないよ。でもな、この狭い日本人コミュニティの中で、会社の名前を背中に担いでプレーする事が、果たして遊びと言えるか？しかも、自分にとっては大切な休日を、本当は思いっきり自分のゴルフをしたいんだよ。でも、それを抑えて周りの空気を読みながらプレーを続けるんだ。それがどれだけのストレスだと思う。」

「でもだからと言って、私達が毎日をのんきに過ごしているみたいな言い方をされるのは、心外だわ。優花だってストレスをたくさん抱えているのよ。慣れない環境で一生懸命頑張っているわ。英語も話せなくてあんなに泣いていたのに・・・。だから、家に居る時は何でも聞いてあげたいの。しゃべりたいだけしゃべらせてあげたいの。」

「分かったよ。」

ビールの酔いが少し回ってきた憲二は、うるさそうに続けた。

「分かったから、少しゆっくりさせてくれないか。」

そう言うと、新しいタバコに火をつけた。

しおりはため息をつくとき、家に入り優花をお風呂に誘った・・・

## 第二章：一つの事件

しおりと優花がケニーの所でクレープを食べた二日後、事件が起きた。

その日、しおりはいつもの三人で、サウス・イースト地区にある有名なチャイニーズレストランでヤムチャを食べる事になった。

ポートランドを東西に分ける、ウィラメットリバーを越えた向こ

う側にある、サウス・イースト地区までは少し距離があると言う事で、一台の車で行くかと佐和子が提案したが、しおりは、お昼少し前の便でテキサスに出張に行く憲二をポートランド空港まで送っていかなければならず、その帰りに合流すると言う事になった。

そして、いつもの他愛も無い話題で盛り上がり、美味しいヤムチャを堪能して帰る時間になった。

「どっちの道から帰る？」

佐和子が聞いてきた。

サウス・イースト地区から、しおり達が住む、サウス・ウエスト地区へと帰るには、北回りと、南回りの二通りの帰り方がある。

しおりの家はどちらかと言うと南回りの方が近い場所にあるので、そう言うこと、

「じゃあ、私達は26番で帰るから、途中で分かれましょうか。」

26番とは、北回りする為に使うフリーウェイだ。

「ねえ、今度はインド料理でもどう？」

「それもいいわね。」

口々に言いながらそれぞれの車に乗った。

しおり達は別々の車で、82番通りからパウエル・ブルバードを右に折れた。十五分ほど走って、ロスアイランド・ブリッジを越えると、フリーウェイの5番に乗る道と26番へと向かう道へと分かれる。

そこで佐和子と律子の乗った車は、26番のフリーウェイに乗る方向へと真っ直ぐ走って行った。

しおりは窓を開けて手を振ると、佐和子達とは別の、5番に乗る方へと進んだ。

するとフリーウェイに入ってすぐ、数台のパトカーが物凄いスピードでしおりの車を追い抜いて行った。

何事かと思いながら五分ほど走ると、先ほどのパトカーのライトが点滅しているのが目に入ってきた。しかも他の入り口からも合流

したのか、かなりの数のパトカーだ。

数台前の車が止められ、後続の車が次々に止まっていく。先頭の車の運転手らしき男性が、大手を振り回して警察官に怒鳴っている。しおりは車を止め、外に出て何が起こったのかを確認してみた。すると、なんと大型トレーラーが横転しているではないか。

危険物でも漏れる可能性があるのか、かなりの厳戒態勢で封鎖されている。

しおりは焦った。

後ろを見ると、次々に車が止まり始めている。先頭集団にいたしおりは、身動きが取れない。先にあつたフリーウェイの出口と次の出口のちょうど真ん中ほどであつた為、後戻りも出来ない有様だつた。

これはかなり時間が掛かりそうだ。

しおりは優花を迎えに行く時間が迫っている事が気がかりだつた。余裕を持って出て来たつもりだったが、さすがにこれでは間に合わないと思い、学校に電話しようとして、携帯がない事に気が付いた。

はつとしたしおりは、朝の出来事を思い出していた。

今朝出かけようとして、充電器から外してバッグに入れようとした時に、家の電話が鳴つたのだ。携帯の電源をオフにしていたらしく、約束の時間を確認しようと、しおりの携帯に掛けていた律子が、痺れを切らして家の方に電話してきたのだつた。

そしてそのまま、出てきちゃたんだ・・・

どうしようかとも思ったが、仮にスクールバスが着く時間に間に合わなくとも、キンダーの内は保護者の出迎え無しには、子供を降ろしてはくれない。

バスの運転手が、生徒の保護者を確認出来なければ、そのまま学校へと戻されてしまう。

小さな子供を標的にした誘拐を防ぐ為だ。

しおりは、

優花は私が出来なかった事で不安がるだろうなあ・・・  
と思いつながら、遅々として進まないトレーラーの除去作業を眺めていた。

その頃、優花はスクールバスの運転手ジムと笑いながら話をしていた。

運転席にどうやって収まったのだろうかと思えるほどでつぶりと太ったジムは子供達の人気者だ。

「あれ？ユウカ、今日は、シンディはいないのかい？」

シンディとは韓国系の女の子で、優花と仲がいい。クラスで優花の他にアジア系が彼女だけだからなのか、なんとなく気が合い常に一緒にいる。

「彼女風邪だった。」

「そうか、今、流行っているから気をつけな。家に帰ったらすぐうがいをするんだぞ。一日三回はちゃんと。」

「分かったよ。でもジムはちゃんとうがいしているの？」

「もちろんさ、寝る前にビールでな。はっはっはっ！」

優花がいつも降りる場所では、他に数人の児童が降りる。

しかし、今日は、そのバスが止まる辺りで舗装工事が行われており、二箇所前で降ろされる事になっていた。

いつもはバスから子供達が降りてくるのを、立ち話をしたりしながら数人の保護者が待っているのだが、今日はその工事のため普段より多目の母親達が、バスが止まるあたりに集まっている。

ジムはその中にアジア人の女性がいるのを遠めに確認した。

シンディの母親と、優花の母親であるしおりは顔つきがよく似ている。アメリカ人のジムには、たまに見分けがつかない時もあった。だが、しおりは髪が肩までしかないのに対して、シンディの母親は

背中の中ほどまである。しかも、シンディが今日は休んでいると言  
う事は、迎えに来ていてるあのアジア系の女性はしおりのはずだった。  
他の母親達と話し込んでるので、はっきりと顔は見えなかった  
が、その時優花が、

「あ、ママだ！」

と叫んだため、ジムも何の疑いも持たなかった。

バスを降りながら、優花がジムに、

「うがいはお水でするんだよ！」

と叫ぶと、

「はっはっはっ！分かってるよ！」

と言いながら、ウィンクをしてドアを閉めると走り去った。

ジムに軽く手を振った後、優花が走って近づきながら、

「ママ！」

と叫んだ時、その女性が振り向いた。

しかしそれはしおりではなく、髪を短く切ったシンディの母親だ  
ったのである。

「あら、ユウカ。元気？シンディみたいに風邪を引いちゃダメよ。」

そう言つと、先ほどまで立ち話をしていた他の女性に、

「じゃあね。」

と挨拶をして車で立ち去った。

それぞれの子供達が、次々に母親や父親達と帰っていくに従って、  
優花は何かの事情でしおりが来ていない事に気が付いた。

一人になった優花は、どうしようかと迷った。ここから自宅まで  
帰るのには、そう遠くはない。いつもより工事のせいで遠くなった  
といっても、歩いて五分ほどだ。

しかし、その途中に1ブロックほど、片側が高い木で出来た塀に  
なっている所があった。そして、道を挟んで反対側が公園の延長で、  
ちよつとした茂みになっている場所がある。

そこだけが心配だった。

もちろん歩道は塀の続く住宅側の方にあるのだが、今日の朝も、

しおりと歩きながら、なんとなく反対側のその茂みが気にかかり、「ねえ、ママ、あそこからなんか出てきそうだね。」と不安がった場所だった。

しかもその1ブロックだけは、人氣がなくなるのだ。

優花は迷ったが、ここに居てもしおりがいない限りどうしようもない。そう思った優花は一人で帰る事にした。

青々とした芝生が美しい住宅地を過ぎ、角を曲がると、例の場所に出た。

しおりと一緒にだと不安ながらも足が止まる事はないのだが、一人だと足がすくむ。

優花が一つ深呼吸をして、歩き始めようとしたその瞬間、茂みの方から何かが飛び出してきた。

驚いて棒立ちになった優花の前を、アライグマの親子が通り過ぎて行く。

子供を連れていてかなり警戒心が強くなっていたのか、大きな方のアライグマが優花の前を通り過ぎながら、威嚇するような唸り声を上げた。

優花は、直立したまま出来るだけ目を合わせないようにして、アライグマの親子が通り過ぎるのを待っていた。

やっと通り過ぎた頃には、半泣きになっていた優花だったが、勇気を振り絞ってまた歩き始めた。すると今度は、目の前の歩道脇にはねられて死んでいるリスの死骸が横たわっているのが目に入った。その死骸が目に入ってしまった途端、とうとう優花は泣き出しってしまった。

何が恐いのか分からなかった。

ただ、いつもの道がやけに不気味に感じるのだ。初めて一人で歩いてきたと言う不安な気持ちだが、何でもない道を、果てしなく続く禍々しい通りへと変貌させていた。

歩道に沿って続く、木の堀に残る節目模様でさえ、ケタケタと笑うお化けに見える。

そしてその人気のない道路は、まだ始まったばかりなのだ。

たった1ブロックのこの道が、優花には果てしない距離に感じていた。

しかし、優花は勇気を振り絞って泣きじゃくりながらも歩き始めた。

優花には、しゃくりあげる自分の声しか耳には入らない。その内、いつの間にか、行きかう車が途絶え、人氣が全くなっていた。風さえもいつのまにか止んでいる。

その時だった。

優花の後方から、ゆっくりと古ぼけた黒のトランザムが近づいてくると、驚いて立ちすくむ優花の横で止まった・・・

その頃、やっと一車線だけ通行止めが解除されて開放されたしおりは、優花の学校へと急いだ。もう、すでに優花が帰宅するはずの時間から一時間ほどが過ぎている。

学校の中に入ると職員室へと急いだ。

ドアを開けると、そこにちょうど優花の担任のシーズンがいた。

「ごめんなさい！交通事故があつて、優花の迎えに間に合わなくて優花はここですか？」

「ユウカ？いえ、ここには来ていないけど・・・？」

「え？でも誰も迎えに行っていないはずなので、ここに戻されるはずなんです・・・」

「ちよつと待つて。運転手のジムに連絡とってみますから。」  
と慌てて、シーズンが電話を手にした。

すぐにジムの携帯に繋がり、優花の事を聞くと、

「ああ、ユウカはお母さんが迎えに来ていたよ。」  
と答えが返ってきた。

「そのお母さんがここに居るのよ！本当にユウカのお母さんだった！？」

「えーいや、確実に確認した訳ではなかったけど……でも、ユウカがママって叫んで降りて行ったから……」

ジムもただならぬ状況を感じ始めた声で答えた。

成り行きを聞いていたしおりは、きつとシンディの母親と間違えたのだ、と思った。

彼女は確かに自分に似ていると、しおりは常々思っていた。彼女が帽子などを被って髪型がはっきり見えない時など、優花は何度かしおりと間違えた事がある。

そう考えたしおりは、

「あの、すみません。シンディのお母さんに連絡してもらえませんか？多分、私と、間違えたのだと思うんです。」

とスーザンに頼んだ。

「分かりました。すぐに連絡しましょう。」

スーザンは、そうしおりに言うと、ジムに

「あなた、急いでもう一度戻ってくれる？」

と告げて一旦電話を切り、すぐにシンディの母親に電話を掛けなおした。緊急の場合の電話番号が学校側には知らされているので、すぐに繋がった。

「私は担任のスーザンですが、ちょっと事情があつてユウカを探しているんですけど、今日スクールバスから降りてくるのを見ませんでしたか？」

と矢継ぎ早に聞いた。

シンディの母親は、電話で急に聞かれて戸惑っていたが、

「ああ、そうそう、ユウカが降りて来たのを見たわ。シンディは今日学校を休んだのだけど、私ちょっとケリーのお母さんにお話があつて、バスが止まる所にいたんです。でもユウカとはちょっとお話して、私は帰ったんだけど……」

と不安そうに答えた。ケリーはユウカのクラスメイトの子だ。

「何を話したんですか？そしてその後、ユウカはどっちに行ったのか見ました？」

「何を話したって・・・シンデイみたいに風邪を引いちゃだめよって、でもその後、私はすぐに車に乗ってしまったから、どっちに行っただかは見ていないんですよ・・・でもシオリは？」

と、段々と事態が飲み込めてきた様子で聞いてきた。

「彼女はフリーウェイの事故で迎えに行くのが遅れてしまったの。でもユウカは何かの間違って降りてしまったらしいんです。何か気が付きませんでした？」

「あ・・・ひよつとして・・・いやだ、じゃあ、あれは私を呼んだのかしら・・・」

何かに思い当たった様子でつぶやいた。

「何か思い出しました？」

「ええ、私今日髪を少し短く切ったんです。

ちよつと気分転換にと思つて。それでシオリと間違えたのかしら・・・誰かがママつて言ったような気がしたけど、まさか私の事だとは思わなかったから・・・」

と申し訳なさそうに言った。

「いいえ、あなたには何も責任はありませんから。じゃあ、誰か他の人にも聞いて見ます。」

スーザンはそう言つて電話を切った。

内容をしおりに説明すると、不安で立っただまま聞いていたしおりは、

「私、一度家に戻つてみます。ひよつとしたら歩いて帰つていられるかもしれないので。」

と、言いながらバッグを手に取った。

「分かりました。私の方も他の生徒さん達に連絡を取つてみます。」  
スーザンが急いで言うのを聞くと、しおりは職員室を飛び出し車まで走った。

破裂しそうなほど心臓が鳴っている。

しおりは注意深く周りを見渡しながら、車を走らせた。

家に着くと、鍵を開けて急いで玄関を開け

「優花！」

と叫んだ。

何の反応も無い。

しおりは、ひよっとしたら裏庭に回って待っているのかも知れないと思ひ、走って裏庭に続くガラス戸を開けると、

「優花！帰ってるの！？」

声の限りに叫んでみたが、返ってくる返事は無い。

しおりは不安で眩暈がしてきた。

二階を探しても誰もいない。

大体、優花は玄関の鍵を持っていないのだから、鍵が掛かっていた時点で、家の中にいる可能性は殆ど無い。しかししおりはそれでも家中を探した。

そしていないと分かると、朝忘れていった携帯を手にして家を飛び出した。

不安で駆け出したくなる気持ちを抑え、ゆっくりと、バスストップから家に帰る道を逆に辿ってみた。

今日は降ろされた場所がいつもと違っていているはずなので、朝と同じく迂回した道を通っているはずだ。

「優花！」

しおりは大声で叫びながら、注意深く探してみたがいない。音を立てて鳴り続ける心臓を押さえながら、歩いて五分位の距離を何度も往復してみた。

そしていないと分かると、今度は車に飛び乗り学校へと急いで戻った。

「優花、どこなの・・・？」

ハンドルを持つ手が不安でガタガタと震えている。

道路を歩いている子供を見かける度に、優花！と叫びそうになりながら運転している内に、次第に涙がこぼれてきた。

学校に着くと、職員室に駆け込んだ。

「家にも、どこにもいないんです！」

しおりが叫ぶのを聞くと、スーザンも唇を噛んで頭を両手で抱えた。

「私もあちこち電話してみたけれど、誰も優花がどっちに行ったのかを見ていないの。すぐに警察に電話しましょう!」

スーザンは、蒼白になって立ちすくんでいるしおりに、今日の優花の服装や髪型、履いていた靴などを確認すると、警察に電話をかけた。焦った口調で警察とやり取りをしていたが、電話を切ると、

「今すぐに警察が来ますから、落ち着いて。きつとすぐ見つかるわ。」

と自分に言い聞かせるように言った。

しおりは頭が真っ白になって、立っていられなくなった。

どこかで一人でもいるかもしれない優花の事を思うと、どんなに寂しがつている事だろうかと、また涙がこぼれてくる。

あの時携帯を忘れなければ・・・あの時あのフリーウェイを通らなければ・・・今日、ヤムチャなんかに行かなければ・・・

出来る事ならば、今日の朝からやり直したかった。身体が震え、涙が止まらない。

警察が来るまでの時間が永遠にも思えた頃、ドアがバンと開き、二人の大柄な警察官が入ってきた。二人とも厳しい顔をしている。

二人の内、アジア系の顔をした方が、

「お母さんですか?」

と、泣き崩れているしおりにたどたどしい日本語で訪ねた。

泣きながら、顔を上げてうなずくしおりに、

「私はビーバートン警察のロイ・タナカです。少し日本語も話せますから、安心して何でも話してください。」

と言った。

「今警察の車が、バスタップ周辺を捜しています。もしよかったら、歩いて帰ろうとしたと想定して、選ぶ道順を教えてください。」

しおりはさつき何度も探し回った道を教えた。ロイはすぐそれを

無線で伝えると、更に服装や、顔の特徴をもう一度確認し、スーザンの手渡した優花の顔写真を持って、一旦二人は出て行った。

その時、出る間際に入った無線に、ロイが小声で「誘拐の可能性も・・・」と言いつ返したのを、しおりは聞いてしまった。

二人が出て行くと、しおりは呆然としながら「誘拐・・・？優花が・・・？」と呟きながら、その場にしゃがみ込んだ。

三分ほどして、ロイがドアを蹴破る勢いで戻ってきた。

「このサンダルに見覚えは？」

見た瞬間しおりは、

「ああ、ゆ、優花の・・・」

と言うと、奪い取る様に抱き締めた。

見間違いようも無い。サンダルの裏の土踏まずの部分に、優花が自分で名前を書いたのだ。

「言い難いのですが、優花ちゃんらしき子供が、黒いトランザムに乗せられているのを、目撃した人がいるんです。誰かお知り合いに同じ様な車を持っている人はいませんか？」

「優花が誰かの車に・・・？」

しおりの周りにそんな車に乗っている知り合いは一人もいない。

殆どが日本車だ。

愕然としながら、手で顔を被うと首を振った。

「今、事故と・・・誘拐の両方の線で動いています。ご主人にもご連絡された方が・・・。」

それを聞いたしおりは、震える指で憲二の携帯の番号を押した。

「どうしたんだ？」

憲二は、殆ど呼び出し音が鳴らない内に出て、不機嫌そうに言った。

「今、会議中なんだ。」

と、憲二が言い終わる前に、

「優花が・・・優花が・・・！」

しおりは泣きながらしゃがみ込んだ。

「もしもし！もしもし！？」

かすかに憲二の叫び声が聞こえる携帯を、ロイは手に取った。

「もしもし、私はビーバートン警察のロイ・タナカと言います。今日、優花さんが学校帰りにいなくなってしまうって、警察が捜査しています。」

「え？どういふ事ですか？」

うるたえる憲二に、ロイが経緯を説明した。

「ま、まさか、優花が・・・」

憲二は絶句した後、

「わ、分かりました。今、テキサスにいますので出来るだけ早い便でそちらに向かいます。」

と言つて、携帯を切りかけたが、

「すみません、妻は？」

と、不安そうな声でロイに尋ねた。

「今、話せる状態ではなさそうです。」

「分かりました。出来るだけ早く戻ると伝えて下さい。」

憲二はそう言つと携帯を切った。

その時、

「先ほどのトランザムらしき車が、ブルマウンテンロード沿いで発見されました！」

と、別の警官が駆け込んできた。

思わず立ち上がりかけたしおりだったが、

「車の中に、もう片方のサンダルも見つかったそうです。しかし、子供の姿は見当たらなかった様です。」

と、無念そうにロイに伝えているのを聞くと、眩暈で崩れ落ちそうになった。

そのしおりを、がっちりとした両腕でロイは受け止めると、

「まだ誘拐されたと決まった訳ではありません。我々が必ず探し出して見せます。」

そう言つて励ました。

優花がいなくなつてから、まだ二時間弱しか経っていない。しおりがうなずきかけた瞬間だった。

「何!!!?」

ロイが無線に向かつて叫んだ。

しおりはその厳しい顔つきに、思わず両手で口元を被った。

しかし、そのロイの顔がすぐに綻んだ。

「優花ちゃん見つかりましたよ！無事だそうです。」

と、しおりに向かつてウィンクをした。

「え・・・？優花が見つかった!？」

しおりはそう呟くと、それまでの激しい緊張の糸が切れたかのようになり、がくんとしゃがみ込み、両手で顔を覆つて泣き出した。

職員室に居た全員が、安堵の表情を浮かべると、しゃがみ込んで泣いているしおりの肩に手をかけ、声をかけた。

涙を浮かべている者もいる。

「後、五分ほどで、こちらに着くとの事です。」

ロイがしおりの肩に手をかけて、

優しく頷いた。

そしてロイが、

「オウ、もう着いたか。早かったな。」 と無線に向かつて言いながら、ドアを開けた瞬間、

「ママ!」

と叫びながら優花が飛び込んできた。

「ゆ、優花！優花！ああ!」

しおりは叫びながら、その小さな身体を抱き締めると、

「ごめんね！ごめんね!」

と、泣きくずれた。

そして優花の頭を抱え込むと、思いきり優花の匂いを嗅いだ。石鹸の香り、優花の香り、何よりも愛しい香り・・・

ロイはその様子を安堵の思いで見つめていたが、急に、

「え・あいつが?・・・分かった。」

と無線に答えると、頭を捻りながら職員室を出て行った。

しおりは、優花を抱きしめたままひとしきり泣いた後、隣でその様子を見つめながら、涙を流していたスーザンに、

「本当に有難う御座いました。」

と言いながら、ハグを交わした。

スーザンは優花を抱き締めると、

「心臓が止まるかと思ったわ。」

と、言っただけ涙を流した。

その時ドアが開いて、ロイが一人の男を連れてきた。

しおりは男の顔を見ると、

「な、何?何故あなたがここに・・・?」

と思わず声を洩らした。

そこに立っていたのは、ジョージだった。

「おじちゃん!」

優花が嬉しそうに叫ぶ。

「いや、何だか僕のせいでごめんなさい。」

ジョージは、神妙な顔で頭を下げた。

「ど、どういうこと・・・かしら・・・?」しおりは、ロイとジョ

ージの顔を交互に見た。

「おじちゃんはね、優花をずっとおんぶしてくれたんだよ。だから

ね、ありがとうなの!」

優花が叫ぶのを、しおりは、

「うん、うん」

と聞き流しながら、ロイの顔を見ると、

ロイはこれまでの出来事を、最初から説明してくれた。

ジョージは今日、ビーバートン市にある、日系のマーケットに行こうとしていた。

しかし、あいにくと、そこへ行く為の大通りで大きな事故があり、住宅地の方に迂回をさせられるはめになった。

ジョージは、指示通りに車を進めていたのだが、自分の知らないエリアの住宅地が珍しく、少しだけ道を外れてドライブを楽しんでいた。そして丁度そこで、偶然道端で泣きじゃくっている優花を見つけたのだった。

車を止めて優花に近づくと、ジョージの顔を見た優花は、更に大声で泣き出した。

あまりにも泣いていて事情が分からない。

とりあえず、家への道を聞き出すと、車に乗せて家に送り届けたのだが、玄関に鍵が掛かっている。運悪く両隣も留守であった為、ジョージは迷った。

泣き止んではいるものの、いまだ不安を隠しきれない優花を落ち着かせる為に、近くのコンビニでアイスクリームでも買おうとジョージが思ったのが間違いだった。

最初に見つけたコンビニに行ってみると、あいにく冷凍庫が壊れていて、アイスクリームが買えない。そこで次のコンビニを探してみた。しかしいつもは、不必要なほどあると思えるコンビニが、こんな時に限って一つも見当たらなかったのだ。

そして最悪な事に、住宅地と住宅地の間の、これから造成が開始される空き地の様な場所の横で、乗っていた古いトランザムが止まってしまったのである。

ジョージは一瞬迷ったが、車を降りて歩く事にした。この近辺の地理には詳しくは無いが、優花の話を総合すると、目の前の森を迂回した所辺りに、優花の通う学校があるらしい。最悪の場合、途中のどこかの家で、電話を借りて連絡すればいいであろうと思い、優花を車から降ろそうとしたが、履いていたはずのサンダルが片方無い。

車に乗せる時に、泣きじゃくっている事ばかりに気を取られて、サンダルを落とした事に気が付かなかったのだ。

仕方なく、もう片方も車に残し、ジヨージは優花をおんぶする事にした。

「さ、行こうか。」

と声を掛けた時、優花が、

「おじちゃん。こっちからも行けるよ。」

と森の方を指差した。見ると公園の入り口になっている。

「前ね、フィールドトリップで来た事があるんだ！」

フィールドトリップとは、日本で言う遠足の事だ。

「そうか、じゃこっちから行くか！」

と、そっちを選択したのが、これまた間違いだった。

以前、優花がフィールドトリップで行ったのは、学校の裏手の公園で、こことは全く異なる場所だったのである。

標識の“パーク”という文字だけで、優花は同じ森だと思い込んでしまったのだ。

ポートランド近郊の町は、高台から見下ろしてみるとよく分かるのだが、森林の中に、住宅やビルが埋没して見えるほど、豊かな自然が残っている。そして、その森のあちらこちらに遊歩道が作られてあり、中には意外に森が深く、出るのに時間が掛かる所もあるのだ。

歩けど歩けど出口が見えない遊歩道に、次第に痺れを切らしたジヨージは、

「ねえ、優花ちゃん。よく考えてみよう！このトトロの森みたいにふか〜い森は、本当に優花ちゃんの学校に行くのかな？」

と、聞いてみた。

すると、

「優花、分かんなくなっちゃった！」

と、楽しそうに言うではないか。

ジヨージは仕方なく、

「でもさ、早く帰らないとママが心配するからさ、急がなきゃ。」  
そう言つと、二人で鼻歌を歌いながら、遊歩道をひたすら歩いた。

ジョージは、背中に優花の香りを感じながら、懐かしさを感じていた。

遠い昔、いつも近くにあった日向の香り・・・

どれくらい歩いた頃だろう、

ふと気付くと、かなり近くでヘリコプターの音がする。

優花と二人で、何だろうと思いつながら見上げると、かなり低く飛んでいるのが分かった。

耳を澄ますと、パトカーのサイレンが鳴り響いている。

「誰か悪い人が逃げてるんだよ！見つけたら、二人で捕まえよう！」  
と、がワクワクした顔で言つと、

「実はその悪い人はおじちゃんなのだー！」と、ジョージが叫んだ。

「キヤー！キヤハハハ！」

身をよじる優花を落とさない様に気をつけながら、やっとの思いで二人は森を抜けた。

そして、そこには十人を超す警察官が、拳銃を構えて二人を出迎えたのだった。

「な、何？」

「動くな！その子をゆっくりと降ろすんだ！」

真ん中の警察官が叫んだ。

物々しい雰囲気の中、ジョージがぼかんとした顔で立ちすくんでいると、

「み、みんな、ちょ、ちょっと待ってくれ！」

一番端の警官が、他の警官に向かって叫んだ。

「ジョージ？ジョージじゃないか！何やってるんだよ、お前！こんな所で！？」

と、その警官が近づいて来るなり叫んだ。

「いや、何って、知り合いの子供さんが道端で泣いていたから・・・」

「ジョージはそう答えながら、その警官を見直すと、

「おお、デイヴか！」  
と叫んだ。

デイヴはトレパツオンの常連だ。恋人が、近くのバーで働いていて、よく二人でコーヒーを飲みに来ては喧嘩をしている。

「おおデイヴかじゃないぜ、全く。どれだけ大騒ぎになっているか分かってるのか？携帯ぐらい持つてるだろう？電話くらいしろよ！」

ジョージは頭を掻きながら、

「いや・・・電話代払ってなくて、止められてんだ・・・」  
と、申し訳なさそうな顔をした。

「ドジな奴だな、全く！」

そう言いながら、後ろを向いて他の警官に合図をすると、全員一斉に顔を見合いながら、向けていた銃を降ろした。

デイヴと呼ばれたその警官は、

「つたく、緊張して損したぜ。」

そう言うのと、無線を取った。

発見が予想以上に早かったのは、目撃された黒のトランザムが、周りに住宅が少なく、比較的分かり易い通り沿いに停められていた為、ヘリコプターからの目視がたやすかった事と、そこから二人は徒歩で行動した為に、警察犬が容易に追跡出来た為だった。

全てを聞いたしおりは、

「ホントにすみません。」

と言いながら、何度も頭を下げるジョージに、

「もう頭を上げてください。もし、ジョージさんが優花を見つけてくださらなかったら、本当に何が起こっていたか分かりません。頭を下げるのはこちらの方です。私の不注意でこんな事になってしまつて、本当にすみませんでした。」  
と頭を下げた。

「いや、ホントに僕が悪いんです。」

ジョージはもう一度頭を下げた途端、

「あいたたた・・・」

と、言つて顔をしかめた。

「どうしたんですか？」

「いや、森の中に小さな小川があつて、優花ちゃんをおんぶしたまま、調子に乗つて飛び越えたら腰を捻つちやつて・・・」

「大丈夫ですか？病院に行った方が・・・」

「いえ、大丈夫です。慣れてますから。」

そう言つて、ジョージは笑つた。

その後、ロイによっていくつか質問されたが、事件性は無いとして解散となつた。

学校から出ると、

「ああ、ご主人に連絡された方がいんじゃないですか。きっと、死ぬほど心配されていますよ。」

と、ロイがしおりに言つた。

「ああ、そうだ。パパに電話しなきゃ。」

しおりは携帯を開けた。

「もしもし？あなた？優花が見つかったの！ううん、無事よ。ちょっとした知り合いが偶然見つけてくれて・・・」

涙を浮かべながら電話で話しているしおりを、ジョージは優花と手をつないだまま、複雑な思いで見つめていた。

「ハイ、ジョージ。家まで送っていくよ。乗りな。どうせお前のポンコツは、今頃どっかに持つて行かれてる。」

ロイがパトカーのドアを開けた。

「お前を乗せるのは久しぶりだな。」

「そうだな・・・」

ジョージは、一瞬下を向くと呟いた。

「ジョージさんパトカーに乗った事があるんですか？」

しおりが、涙の乾いた顔でロイに聞くと、

「昔、僕がポートランド市警にいた頃、散々こいつの世話をさせられ・・・」

「ロイ、しおりさんも疲れているだろうし、そろそろ帰さないか。」

ジョージは笑いながら話を遮った。

「オウ、そうだな。じゃ、乗りな。連行する。」

「サンキュー。」

ジョージは、苦笑いをするると乗り込んだ。

「しおりさん、優花ちゃん、又一緒にクレープ食べましょう。」

「はい。でも、それよりも後日、改めてお礼に伺いますから。」

「いやいや、そんな。本当に今日の事は、間抜けな僕の責任なんです。あ、やっぱり、一つだけお願いしてもいいですか？」

「何でしょう？」

「僕の事、さん付けで呼ばないで、ジョージって呼んでもらえませんか？」

と、ジョージは笑った。

「そんな失礼な事・・・」

としおりは言い掛けたが、ニコニコと笑いながら、パトカーの中から、ドア越しに答えを待っているジョージを目の前には、嫌だとも言えず、

「分かりました。ジョージ・・・」

と、しおりは答えてから、ふと、

「何か変な感じね・・・」と呟いた。

「でしょう。ジョージって呼んだら、敬語で話しにくくなるでしょう。ふふふ、これで、これからは友達ですね。」

ジョージは、そう言っただけで尻を下げています。

そして、しおりと手をつないでいる優花を見た。

「優花ちゃんも、ジョージって呼んでね、僕の事。」

「うん。優花はおじちゃんと呼ぶの。」

「おじちゃんて・・・俺、まだ若いんだよ?」

「優花には、お・じ・ちゃん!」

「く・・・ま、いいか!じゃ、おじちゃん帰るな!」

「うん!おじちゃん、今日はね、有難う!」

と言っただけで、ジョージとパトカーのドア越しにハグをした。

「それじゃ。」

ジョージは、しおりに向かって言うと、ロイに合図をした。

二人の乗ったパトカーが走り去るのを、しおりは頭を下げながら見送ると、

「優花、お腹空いたでしょう?今日は、優花の好きなスパゲティにしようか!」

と優花の頭を撫でた。

「やったー!パゲティ!パゲティ!」

喜んでる優花を見つめながら、しおりは又溢れてきた涙を拭いた。

### 第三章：部屋 第四章：忘れられないと言つ事

#### 第三章：部屋

次の日、しおりはやはり何かちゃんとしたお礼をすべきだと思い、ダウンタウンのムーンストラックという店で、チョコレートを一箱買うと、トレパツオンへと向かった。

ジョージを呼んでもらおうと思ひ、カウンターへと行きかけると、顔見知りの店員が

「あれ、珍しいね。今日は水曜日だったっけ？」

と、声を掛けてくる。

ジョージに会いたい旨を告げると、

「ああ、ジョージは今日休んでるよ。何だか、具合が悪いんだって。腰がどうか、背中がどうか言ってたけど・・・」

と、申し訳なさそうな顔をした。

しおりは、昨日、優花をおんぶして歩いたせいだと思い、見舞いを含めて直接行ってみようと住所を聞くと、意外にすぐこの近くだ。歩いて、十分と掛からないくらいだろう。

礼を言つて店を出ると、ジョージの住む家まで行つてみる事にした。そしてふと思ひ付き、途中ケニーの所に寄つて、クレープを買つて行く事にした。

「オウ！しおりさん！」

ニコニコと笑いかけるケニーに、昨日の出来事を伝えると、

「全く、ドジなボーイだよ。」

と、言つて笑つた。

「わざわざ優花を助けて頂いたのに、みんなにドジだつて言われて、何だか申し訳なくて。」

「いいんだよ。あいつがもうちょっと頭を使えば良かったんだ。だからあいつはドジでいいんだよ。それがお似合ひさ。でも、まあ、

いい奴だけどね。」

そう言って出来立てのクレープを手渡してくれた。

「ありがとう、ケニーさん。また優花と来ます。」

しおりは礼を言うと、ジョージの住む家へと向かった。

ジョージは、古い一軒の大きな家を数人でシェアしていると店員が言っていた。

ノース・ウエスト地区には、アーティストを目指す若者などが、一軒の家をシェアしながら住んでいる所が多数ある。

ジョージの住む家も、その一つだった。

築百年位は優に経っていきそうなその家は、うっそうとした木々の中に埋まるように立っていた。玄関前の丸いポーチとそのポーチを覆う屋根を、白く丸い六本の柱で支えている。壁はレンガ作りになっていて、窓枠はアイボリーに近い白なのだが、所々に緑色のこけらしきものがへばりついていた。屋根の向こうには、同じくレンガ作りの煙突らしきものも覗いている。

しおりは、少しペンキが剥がれかけたアイボリー色のドアを数回ノックしてみた。

誰も出てくる気配が無い。

試しにノブを回してみると、ギーという音を残しながらドアが開く。

「すみません！」

と、三回ほど叫んだ時に、上の階からアメリカ人の若い男が、面倒くさそうに降りてきた。

「あの、ジョージに会いたいんですが。」

「ああ、あいつの部屋はそこだよ。」

眠たそうな声で、入り口から入って最初のドアを指差した。

自分の部屋へと帰っていきこうとする男に礼を言うと、振り向きもせず手をひらひらと振って上がっていった。

しおりは、ドアの前に立つとノックをしようとしたが、その手が

一瞬止まった。やはり、人妻として独身男性の部屋にやすやすと入っていいものかと、一瞬躊躇したのだった。しかし、ここまで来て引き返す訳にもいかない。

しおりは、思い切ってノックをした。

「イ・・エス・・」

中から、力の無い返事が返ってきた。

「あの、すみません、しおりです。」

「し、しおりさん・・・!? いたたた! 何で?」

慌てている気配がありありと感じられる。

「あの、昨日のお礼をしようと思って。お店に行ったら、ご病気だつて聞いたものですから・・・」

「ど、どうしよう・・・今、僕動けなくて・・」

「もし、ご迷惑でなかったら、入ってもいいですか? 食べる物を持って来てしまったから、ドアの外に置いて行く訳にもいかないし・・」

「クレープやチョコレートなどを置いていった日には、間違いなく蟻が群がるに違いない。」

一瞬の間があった。

「ああ、ええつと・・・あの、散らかってますけど・・・どうぞ・・」

諦めと、何か複雑な思いが交差したかの様  
声が返ってきた。

「気にしませんから。」

しおりは返事を返した後、

「失礼します。」

と言って、ドアを開けた。

瞬間、しおりの身体を巻き込む様に、さっと一陣の風が通り過ぎた。

一瞬立ち尽くしたしおりだったが、次の瞬間、  
「き、汚い!!」

と小さく叫んで、右手で口元を抑えた。  
よくもまあ、ここまで散らかしたものだ。

ベッドの周りには読みかけの本、CD、DVDのケース、中身が  
出ているものもある。

そして、その上には毛布がベッドからずり落ちたままだ。ドアから  
そのベッドまでの間には、脱ぎ散らかした服や、カップラーメンの  
残骸、キャンベルのスープ缶などが散乱していて、足の踏み場も無  
い。

そしてジョージを探すと、ベッドの上から手をだらんと下げた格  
好でうつぶせになったまま、顔だけを情けなさそうにこちらに向け  
ていた。着ているグレーのスウェットのパンツと白いTシャツが、  
ゴミに同化していて一瞬見つけられなかったほどだ。

ドアの所で立ち尽くしているしおりに、  
「いえ、あの、痛くて、毛布取れなくて・

いつもはちゃんと片付いているんです、ほんと。でも、その、痛く  
て・・・」

弁解するジョージの言葉を、しおりは黙って聞いていたが、どう  
見てもカップラーメンの残骸やキャンベルの缶は、昨日今日食べた  
物ではなさそうだ。

「やっぱり、昨日優花をおんぶした時に・・・本当にすみません。」

「いや、大丈夫です。前にも同じ所をやっていますから。二、三日  
じっとしていれば、治ります。」

「何か、お薬は？」

「上の階に住んでいるチャイニーズの友達が、何か中国の塗り薬み  
たいなのを貸してくれたんですが・・・」

とベッドの横にある、スタンドを置いた小さなテーブルの上の丸  
いビンを見た。

「塗ったんですか？」

「いえ、身体が動かなくて・・・」

「借りた時に、塗ってもらえばよかったのに。」

「僕ね、ダメなんですよ。男の人に身体を触られるのが。床屋だつて、絶対ダメなんです。」

ダメ、とそこだけ強調したように言うので、理由を尋ねた。

「中学の時に、まだ日本に居た頃なんです。野球をやってたんです。こっに見えても。」

その時、今と同じ所を捻っちゃって、近所の針灸マッサージっていう看板の所に行ってたんです。そしたら、そこのおじいちゃんの先生が、背中一面に薬を塗った後、ズボンまで脱がすんです。それでマッサージを始めたんですけど、どうも変なんです。マッサージをしてるというよりも、ベトベト触ってる感じで。そして今度は僕のパンツを降ろそうとし始めちゃったんです。それでやっぱりおかしい、って思ってたんですけど、痛くて痛くて動けないんですよ。やめてくれ〜！って、叫んだんですけど、おじいちゃん僕の太ももの上に乗っちゃって、うるさいんじゃない！って、逆に怒り出しちゃって。

でもパンツ半分脱がされた時に、最後の力を振り絞っておじいちゃんを撥ね退けて、ベッドから飛び降りたんです。そして病院の外に逃げ出した時に、又痛みを思い出しちゃったんですね。力が急に抜けて道路に頭から倒れちゃって。情けない事におしり半分出したまま、通りかかった人に助けってもらったんです。あれは参りましたよ、ほんとに。それ以来、男の人が身体に触ると鳥肌が立つ様になっちゃったんです。」

うつぶせのまま、手だけを動かしながら一生懸命に話をしているジョージが可笑しくて、しおりは笑いを抑え切れなかった。

「あははは、可笑的い。でも、ガールフレンドでも呼んで塗ってもらわないと、治るのに時間が掛かってしまうでしょう？」

「僕、そんなガールフレンドなんていませんよ。」

「じゃあ、薬を借りた意味がないじゃないですか。」

しおりが怒った様に言うと、

「でも、どうしようもないし・・・」

ジョージは、消え入る様な声で申し訳なさそうに言った。

しおりはその時、この状況と話の流れから行くと、その薬を塗る事が出来るのは、今現在、自分しかいない事に気がついた。

さすがに躊躇われたが、この流れを作ってしまったのは、他でもない自分自身である。

「あの。私が塗りましようか？」

仕方なく、しおりがそう言うのと、

ジョージは手を大きく振りながら、

「と、とんでもない！そんな。人の奥さんにそんなご迷惑をかけるなんて、そんなそんな！いや、だめですよ。」

と大慌てに慌てた。

「お嫌だったら、止めておきますけど。やっぱり、優花を助けて頂いたたせいでこんな事になったんですし・・・」

「いや、嫌だなんて、とんでもない！ずっと憧れて見てたのに・・・」

最後の方は、ごしょごしょとつぶやいていて聞こえなかったが、

「お嫌でないんだったら、ちょっとお部屋にお邪魔してもいいですか？」

と聞いてみた。

その時になつて、やっとジョージは、しおりがドアの所にずっと立ちっぱなしであった事に気がついた。

「あれ！すみません！ほんと。僕って全く、気が回らないんだよなあ。だからみんなしてドジだドジだって。ケニーさんもいつまで経つても子供扱いするし・・・あの、とにかく入ってください。座る所はえっと・・・どう見てもないですね・・・」

「お邪魔します。」

部屋に入ったしおりは、

「気にしないで下さい」

と言って、床の空いた所にバッグと持って来た荷物を置くと、そ

のまままっすぐベッドの所に向かった。

「さ、塗りましょう。」

「いやいや、ほんと、そんな・・・」

ジョージは、うつ伏せのまま顔を両手で隠した。

「女の子みたい。」

しおりは笑いながら、

「高校生の時、サッカー部のマネージャーをしていたんです。だから、気にしないで下さい。慣れてますから。」

そう言っつてベッドの横に立つと、

「Ｔシャツめくりますね」

と聞いた。

顔を隠したまま、子供の様に頷くだけのジョージを見て、

「ちよつと失礼します。」

と言いながら、Ｔシャツをめくった。

引き締まった背中を目の前にして、しおりは少し戸惑った。

「あの・・・、ちよつとごめんなさい。」

そう言っつと、窓の所に行っつて、最後にいつ開いたのか分からないカーテンを思いつきり開けた。窓から埃と共に光りが差し込むと、湿った部屋に澱んでいた空気が浄化されるような気がする。

少し落ち着きを取り戻したしおりは、

「さて」

とわざと声を大きめに出すと、再び両手で顔を被つたままのジョージの所に戻つた。

薬を手に取り、人差し指でビンからクリームを出すと、背中に塗ろうとした手がふと止まった。

「これは・・・」

広くはないが、引き締まった背中の、左わき腹の後の辺りに、古い傷があつた。

男の身体に傷がある事など、さほど珍しい事ではないのだが、しおりにはその傷が何か異質な感じがして、思わず声が出てしまった

のだった。

「小さい頃、竹やぶで遊んでいて刺さっちゃったんです。」

顔を隠したまま答えたジョージの声に、何か不自然さを感じたが、しおりは、それ以上深く聞くべきではない空気を微かに感じ取り、思い直して目の前の背中に向き直った。

「どのあたりですか？」

「左側の肩甲骨から下の辺り……です。」

しおりは、先ほど人差し指に取ったクリームを両手の平に広げると、背中に手をあてた。

そしてそれをゆっくり拡げていく。

手のひらにジョージの体温が伝わってくる。

しおりは、ふいに時間が止まった様な感覚を覚えた。

聞こえてくるのは、遠くの方で回っている乾燥機の音と自分の鼓動だけ。

ジョージに触れている手の平だけが熱く感じられ、筋肉のうねりを感じる度に、体温が上昇するような錯覚を覚える。

しおりには不思議だった。

男と二人でベッドの上にいるという、そんな状況の中で、身の危険を感じさせる不穏な粒子を全く感じない。

どれくらいの間が過ぎたのだろう。

薬を塗っていたしおりの手が、偶然さっきの傷跡に触れた。

その瞬間、ジョージの身体がピクリと動いた。

「あ、ごめんなさい……」

まどろんでいた空気が、さっと透明になる様に、我に返ったしおりは、ジョージの背中から手を離れた。その手を自分の額に当ててみると、うっすらと汗がにじんでいる。

「あの……おかげで少し楽になりました。」

起き上がるうとするジョージに、

「まだ動かない方がいいですよ。無理してまた悪くなったら、来た

意味がありませんから・・・」

本当は、火照った顔を見られたくなかった。

目の前のジョージの背中を見ると改めて、顔が赤らんでくる。

そして、

「ごめんなさい。」

と言うと、Tシャツを下げた。

「さっきケニーさんの所でクレープを買ってきたんです。それからチョコレートも。食べてくださいね。」

そう言つて、持ってきたビニール袋をベッドの脇に置いた。

とたんに、ジョージのお腹がグーッと鳴った。

ドラマや映画で、こんなシーンをよく見かけるが、この連鎖反応は、忘れていた事実を誰かによつて思い出させられた事で、身体が反応してしまうのであるうか。

「昨日、帰つてから何も食べてなくて・・・」

と情けない声を出すジョージに、

「とりあえず、今はこれを食べていてくださいね。ちょっとお買い物をして、又戻ってきます。」

しおりはそう言つと、バッグを持って外へ出た。

火照つた顔に、まだ少し雨の匂いの残る、四月の風が心地良い。

近くのスーパーへ行くと、しおりはベッドの上でも食べ易いサンドイッチと、フライドチキン、それとオレンジジュースを買つて戻つた。

ジョージはベッドの上に起き上がつて待つていた。

「大丈夫・・・なんですか・・・?」

「大分、楽になりました。多分、寝ている内に固まっていた背中の筋肉が、マッサージしてもらつたおかげでほぐれたんだと思います。」

とジョージは頭を下げた。

しおりは、正面から目を見て話されると、改めて顔が紅潮してくるのを感じ、目を逸らしながら、

「今日は急にすみませんでした。また、明日、今度は何か作って持ってきます。そんなに動けなくなっているとは思わなかったもので・・・」

と言つて、先ほど買ってきた物を、ベッド脇のテーブルに置いた。「とりあえず、今日は帰ります。また明日来ますね。ジョージさ・・・」

そこまで言い掛けた時に、ジョージが手を前に出して、しおりの言葉を遮った。

「さんは、無しの約束だったでしょう？」

「じゃあ、また明日・・・ジョージ・・・君・・・」

しおりはそう言つと、逃げる様に部屋から出た。

ジョージは、苦笑しながらしおりの手の触れた部分をなぞつてみた。

その部分だけが、熱を帯びている様に熱い。

しかし、その手が先程の傷口に触れると、手を止め暗い顔になった・・・

しおりは車の中で、まだ冷めやらぬ自分の顔に手を当てた。

窓を開けて、新鮮な空気を顔に当てながら、ジョージの部屋での、自分の行動を思い起こしてみた。

恩人だとは言え、人妻である自分がとつていい行動だったのであるうか・・・

しかし何故だろう、あの会話も無くなった数分間、息苦しさを感じなかった事が不思議だった。

ふと、しおりが小学生の頃、父親と二人で二時間程ドライブをした事を思い出した。実家に母親を迎えに行ったとか、何かそんな理由だったと思う。

その道すがら、父は終始無言だった。と言つても、元々口数の少ない人だったし、珍しい事ではなかった。そしてそんな何もしゃべ

らない父親の横で、しおりはその空気を快く感じていたのだった。

しゃべりたくない訳では無い。ただ無意味な会話を無理やり探さなくても、父親の匂いが車の中に充満しているだけでよかったのだ。父がハンドルを握る右手。シャツの下から伸びる太い腕。それらが幼い頃のしおりに、心地よい安心感を与えてくれた。

その父も十年前に他界したが、今でもハンドルを操る右手と、バツクしながら駐車する時の、自信ありげな横顔が忘れられない。

「お父さん・・・大好きだったなあ・・・」

つぶやきながら、いつの間にかさっきのジョージの背中と腕を思い出している事に気付くと、しおりは狼狽してハンドルを握り直した。

次の日、しおりは煮物と唐揚げとおにぎり、それと冷凍し易いように小分けしたカレーを持ってジョージの住む家へと向かった。

ノックしようとして玄関のドアを見ると、誰かが閉め忘れたのか、隙間が開いている。

しおりは恐る恐る入ると、すぐ横にあるジョージの部屋のドアをノックした。

すると以外にも元気な声で、

「イエス」

と、返事があった。

「しおりです」

「どうぞ、開いてますから。」

明るく返事が返ってくる。

「失礼します。」

ドアを開けると、部屋の中がきれいに片付いていた。

そして部屋の隅にあるシングルベッドの上に、昨日と同じグレーのスウェットパンツに、又、別の白いTシャツを着て、壁にもたれかかるようにジョージは笑っていた。

「本当に来てくれたんですね。」

しおりは、急に昨日のジョージの引き締まった背中を思い出して、思わず目を伏せた。

「か、片付けたんですね。大丈夫なんですか？」

立てないほどの痛みを抱えては、これだけ片付けるのはさぞ大変だっただろう、と感心していると、

「どうぞ入ってください。」

と、ジョージが声をかけた。

言われるがままに中に入ると、昨日はある事さえ気付かなかった  
コーヒートーブルを見つけた。

しおりは、持ってきた物をその上に置いた。

「これ食べてください。」

「本当ですか!?!」

ジョージは顔をほころばせながら、ベッドから降りようとして顔をしかめた。

「あ、ごめんなさい。そこにいてください。」としおりは言つと、  
袋から出したおにぎりと唐揚げをベッドまで運んだ。

ジョージは目を丸くして、

「お〜!」

と叫ぶと、おにぎりを一口食べた。

「う、うまい!」

それからは、おにぎりとお揚げを口に運んでは上を向き、又一口  
食べては上を向き、結局、最初にひとこと「うまい!」と言っ  
てからは、食べ終わるまで一言もしゃべらなかつた。

全てを食べ終わって、昨日買っておいたオレンジジュースをごく  
ごくと飲み干し、

「感激です!」

と、目尻を下げて笑った。

あまりの食べっぷりに、目を丸くしていたしおりが、

「二食分のつもりだったのに・・・」

と呆れていると、

「今まで、あんなに美味しい唐揚げを食べた記憶が無いです。ビックリしました。本当に。」

と言つてにこにこ笑っている。

しおりはほんとはよく笑う人だな、と思いながら、

「お粗末さまでした。所で、痛みはもういいんですか？」

と、訊ねた。

「おかげさまで、時間をかければ多少は動けるようになりました。仕事の方は今週一杯休む事にしましたけど。」

「そうですか。よかった。私、これはどうかと思つて別の薬も買つてきたので、使つてください。」

しおりはそう言つと、日系マーケットのビニール袋を開けて、中の薬を手渡した。

「有難う御座います。あ、でもこれまた塗り薬・・・」

「あ、いやだ。私つてばかだなあ。自分じゃ塗れないつて言つのに・・・ジョージさ・・・」

ジョージが軽く睨んでいるのを見て、最後を「ジョージは・・・」  
と言ひ換えた。

呼び捨てにしてしまった恥ずかしさをこらえながら、

「どうしよう・・・何か他の貼れる薬と替えてこうようかしら・・・」

とつぶやいた。

「そんな事に時間を使う事無いですよ。多分、今日一日、ゆっくりしていれば、明日には大分良くなつていと思ひますから。」

「でも、油断して悪くなつてもいけないし・・・せつかく買ったのに・・・」

ジョージを見ると、いたずら小僧の様にニコニコ笑つてしおりを見ている。

「あゝあ、塗り薬じゃあ、自分じゃ塗れないなあ。もう一回塗つたら、多分、いや、確実に良くなると思ふんだけどなあ・・・」

と、わざとらしく腰の辺りをさすつている。

ジョージの魂胆が分かったしおりは、軽く睨みながら、

「じゃあ、もう一回だけ塗ってあげます。」と言つと、

「イエス！」

と言つて、小さくガッツポーズをした。

しおりは、うつ伏せになったジョージのＴシャツをめくり、ベッドの脇に腰をかけた。するとすぐさま、

「あの、今日は背中全体をお願いします。」

と、病院に來た患者の様な口ぶりでジョージが言うのを聞いて、思わず

「バカ！」

と言つて右の尻を軽く叩いた。もちろん、本気で叩いた訳ではなく、ジョージの言葉を聞いた瞬間、前からずつと友達だった様な錯覚を覚えて、つい手が出てしまったのだ。

「あ、すみません、つい・・・」

薬を塗るのを忘れ、顔を紅くしているしおりに、

「しおりさん、僕ね、何だかしおりさんとは、昔からの知り合いの様な気がするんです。」

もちろん実際には、まだ数回しか会ってないけど、なんかこう、こつこつと何て言うんでしたっけ。波長が合つて言うのかなあ・・・いや、何か違うなあ・・・普通だったら、旦那さんがいる人を部屋に入れるべきではないんだろっけど、しかも薬まで塗ってもらつたりして。でも何だろう・・・僕には姉はいないけど、もしいたとしたらこんな感じなのかなあ・・・」

しおりも同じ事を感じていた。

確かに波長が合うのだろうか、近い距離にいても、息が詰まらないし違和感が無い。

しかし、“姉”という言葉にしおりは引つかかった。

「何故、私の方がお姉さんなのかしら？そんなに老けて見える？」

「いやいや、こんなどうしようもない僕よりも落ち着いて見えるからで、しおりさんは今まで見た日本人の女性の中で、一番魅力的で

す。」

ジョージは慌てて続けた。

日本人の中で？とつっこうと思ったが、止めておいた。元々容姿に自信がある訳でもない。

「ふくん・・・まあ、いいわ。でも私には、自分の事をジョージと呼べたり、友達のように喋らせようとしたりするくせに、あなたはいつも敬語口調なのは、やっぱり自分で年下だと確信しているからじゃないの？」

「いやいや、違いますよ！本当は僕だって同じ様に話したいけど、人の奥さん呼び捨てにしたり、馴れ馴れしく話しかけたりは出来ないでしょう？だからなんです。だって、もし誰か詮索好きな人が聞いていたら、変に思いますよ。」

ジョージは弁解するように言ってくる。

改めて考えてみると、確かにジョージの言う通りだ。

とは言いながらも、なんとなく釈然としないしおりだったが、ふと気になって、

「ところで、ジョージはいくつなのかしら？」と訊ねた。

「もし、僕が年下だったら、しおりさんは自分が幾つか教えてくれないんでしょう？」

「そんな事ないわ。別に、年齢にはこだわらない主義なの。」

「じゃあ、せーので一緒に言いましょうか？」

「いいわよ。」

「せーの！」

「28！」

「30・・・」

しおりの方が二つ年上だった。

「ぶっ・・・」

「あ、今、笑ったでしょう！」

「え？笑ってないですよ！」

「痛かったのはこちら辺だったかしら・・・」

と言いながら、マッサージの途中で止めていた手を少し強めに押した。

「いててて！勘弁してください！本当に笑ってないんです！でもちよつとだけ……」

「あゝ。何だかあなたと話していると、弟を思い出しちゃうわ！」  
しおりには四つ年の離れた弟がいる。

背丈はジョージよりも遥かに高く、いつも見下ろす様にしおりをからかうのだ。

それを聞いたジョージは、

「ね、やっぱり姉さんだ。」

と、言って笑った。

「もう、知らない！これで終り！」

しおりはジョージのTシャツを引き下げた。

「ええ！？せつかくのしおりさんのマッサージが……もうちよつとだけお願いします！」

ジョージは泣きついてきたが、

「い・や・だ・！」

と言って、その願いを退けた。

本当を言つと、もう少しだけ薬を塗ってあげたかったのだが、今更ながら、じゃあ後ちよつとだけよ、と言つのも変な気がして止めた。

「あゝあ、残念だなあ……まあでもいつまでも甘える訳にもいかないしなあ。しょうがない、諦めるか……」

つぶやいているジョージを見ると、少し可哀想な気がしたが、これ以上のやりとりは慎むべきだと思った。何と言つても自分は夫がいる身なのだ。

「さて、そろそろ帰ります。」

うつぶせのままのジョージにそう言つと、ジョージはふと顔を上げて、

「そつだ、しおりさん。メールしてもいいですか？いや、アドレス

をこちらから聞くのは失礼だし、もし嫌だったら断りにくいでしょうから、僕のアドレス渡します。もし気が向いたらメール下さい。僕日本人の知り合いでやり取りしている人ってロスのおじさんぐらいしかないんです。ぜひ、メール友達になってください。」

そう言いながら、茶色い紙袋の端を破って、自分のアドレスを書き込んだ。

「もし、一週間経ってもメールが来なかったらあきらめます。」  
苦勞して起き上がると、しおりに手渡した。

「私、あんまりメールとかしないし・・・」しおりは戸惑いながら受け取った。

昔は友達同士でよくメールをしあっていたものだが、最近は送られてくるメールの内容が、旦那の愚痴や子供の教育の話になる事が多くなって来た上、オレゴンに駐在になってからというもの、いちいち話の局面で、でもそつちはアメリカだから違うんでしょう？となるので、面倒になっていた。

「いいんです。もし気が向いたらで。しおさんの立場も分かっているし、しつこくはしたくないですから。ただ単に、しおさんと友達になりたいんです。」

「分かりました。約束は出来ないけれど・・・」  
しおりはそう言うと、茶色い紙の切れ端をバッグに入れて立ち上がった。

「じゃあ、帰りますね。」

「しおさん、本当に色々とお難うございました。僕ももう大丈夫ですから。明日からはばっちりです。」

ジョージは微笑むと、どんと胸を叩いた。

正直言って、明日はどうすべきかしおりは悩んではいた。完治していないのは明らかだが、かといって、いつまでもこの部屋に入りすぎるべきではないのも分かっていた。しかしそうは言っても、向こうからもういいですと言われると、何となく寂しい気持ちが湧いてくる。

「分かりました。でもあまり無理はしないでね。ジヨージ……ジ……」  
なかなか呼び捨てにするのは難しい。

「はい！分かりました！」

わざと子供の様に大きな声を出して、ジヨージは敬礼をした。

「じゃあ、失礼します。」

と言って会釈をすると、ジヨージがベッドの上でひらひらと手を振っている。それを見て、思わずしおりも笑いながら、軽く手を振ってドアを閉めた。

ジヨージは、しおりが出て行ったドアを見つめた。

僅か10フィート先のドアを、しおりが閉めて出ていっただけで、この部屋全体がモノクロに変わってしまった様な錯覚を覚える。

本当は、まだまだ背中痛みは引いてはいない。しかし、これ以上、彼女をこの部屋に来させるべきではないだろう。そう思って、もう来なくても大丈夫と言ってしまったのだが、思った以上に寂しさが募った。

「いい香りだったなあ……」

と呟き、部屋に残るしおりの香りを残さず吸い取ろうと、鼻をヒクヒクさせながら上体を動かしたとたん、

「いててて……」

とベッドに突っ伏した。

「ああ、やっぱりまだ痛いな……ああ、ここも痛くなってきた……」

そう呟きながら、ジヨージは寂しく胸に手を当てた。

しおりは帰りの車の中で、今日のやり取りを思い出していた。  
なんとという、幼いやり取りをしたものだろう。

所詮、男女のやり取りなどというものは、後から思い起こしてしまつと、身をよじりたくなる程恥ずかしく思える事が殆どだが、そ

れにしても恥ずかしい。

しかし、たった二つ違いであの年下気取りは何だと言っているのである。

しおりは、「やっぱり姉さんだ。」と言った時の、ジョージの顔を思い出していた。いまましいけれど、あの笑顔はどうしても憎めない。それどころか、ふとすると引きこまれそうになる。

しおりは、ジョージに家族はいるのだろうかと考えた。あの、極楽トンプの様な笑顔を見る限り、育ちのいい、お坊ちゃまのような気がする。多分、そんなところだろう。

そのくせ、偉そうに気を使っちゃって・・・

明日からはもう大丈夫です、と言ったのも、しおりを気遣ったの事だと言うことは分かっていた。

本当はまだかなり痛そうだったなあ・・・

気が付くと、降りなければいけないフリーウェイの出口を過ぎてしまっている。

「ああ、いけない！戻らないと！」

慌てて、しおりはハンドルを切った。

次の日の夜、憲二が出張先のテキサスから帰って来た。

「ただいま。」

玄関のドアを開けて入ってきた憲二は、優花を見ると、安堵の表情を浮かべて抱き締めた。

「全く、心臓が止まるかと思ったよ。大丈夫だったのか、色々。」としおりを見た。

「ごめんなさい、心配かけて。あなた食事は？」

「ああ、会社でミーティングをしながら済ませた。」

ネクタイを外しながら、ダイニングテーブルのイスに座った憲二に、しおりはビールを注ぐと、電話では伝える事の出来なかった詳細を話した。

しかしジョージについては、たまに行くコーヒー屋の店員だとだけ話した。あまり詳しく話しても、余計な誤解を招くだけだ、と思っただからだ。

憲二は、しおりの話を眉間にシワを寄せながら聞いていたが、ビールを一口飲むと口を開いた。

「しかし、そのバスの運転手、軽率すぎやしないか？無事だったから良かったものの、何かあったらごめんなさいじゃ済まないだろう。ちゃんと学校を通して首にしてもらうか、路線を変えてもらうかした方がいい。」

「うん、でも一生懸命謝ってくれたし・・・」

バスドライバーのジムは、あの事件の次の日、優花と一緒にバスから降りてくると、しおりの前で、おいおいと泣きながら謝ってくれた。アメリカ人はなかなか謝らないと言っのが、一般的なイメージだが、その日のジムは、平身低頭と言っ言葉がぴったりなほど、太った身体を折り曲げて、汗で汚れたマリナーズの帽子で涙を拭きながら、謝ってくれたのだった。

しおりはこれ以上、事を大げさにしたくはなかった。

「所で、そのコーヒー屋の店員さんには、何かお礼はしたのか？」

「うん。チョコレートだけど、渡してお礼を言っておいたわ。」

部屋に行った事や、マッサージをした事までは、もちろん言えなかった。

「ジョージおじちゃん、元気だった？」

横で聞いていた優花が聞いてきた。

「うん、元気だったよ。優花ちゃんによろしく言っってた。」

「ねえ、パパ。ジョージおじちゃんの車って、とってもポンコツなんだよ。きつたないし！」

「そんなだから疑われるんだ。」

憲二は、異常な程、車に関してはいきれいな好きで、少しでも靴が汚れていると、そのままでは車に乗せてくれない。もちろんキズなんでもっての外で、最近優花が、おもちゃの金具でちょっとした傷を

作った時など、1週間程口を開いてくれなかったほどだ。

「ジョージおじちゃんはいいい人だよ！」

優花が庇う様に言うと、

「車も身だしなみも一緒だ。きちんとしていないと、人からはそういう風に見られるんだ。」

少し酔いの回ってきた憲二は、怒った様に言った。

「でも……」

納得出来ない優花を、しおりは手で制すと、

「先にお風呂に入れてきます。」

と憲二に告げて、優花を立ち上がらせると、バスルームへ連れて行った。

お風呂から上がると、しおりは髪をとかしてやりながら、

「ねえ、優花。パパはね、ジョージおじちゃんの事を知らないから、あんな風に言うけど、今度ママがちゃんとお話しくからね。」

と、優花の頭を優しく撫でた。

「うん。だって優花はおじちゃん好きだよ。」

面白いし。だからパパに教えてあげてね、ちゃんと。」

「うん、約束。さ、今日はもう遅くなっちゃったから、本を読んで寝ようね。パパにお休み言ってこようか。」

「うん！」

リビングに戻ると、いつのまにかパジャマに着替えていた憲二に、

「このまま、先に寝かせちゃいます。」

と言うと、

「ああ。」

とテレビを見ながら答えた。

「おやすみなさい！」

優花が、憲二に向かって大きな声で言うと、やっと顔を向けて、

「お休み。」

と軽く微笑んだ。

優花を寝かしつけてリビングに戻ると、憲二は水割りを飲んでいました。最近では、明日に残ると言っていて、あまりハードリカーを飲まない様になっている憲二にしては珍しい事だ。しおりは水の入ったグラスを持って、憲二の座っているダイニングテーブルに、向かい合わせに座った。

「この間は大丈夫だったの？会議中だったんでしょ。」

「大丈夫も何も、会社中大騒ぎだったよ。」

社員の家族が、事件に巻き込まれたんじゃないかって。最悪な事に、テキサスの支店から本社にすぐ伝わってな。専務から、俺の携帯にすぐさま電話が掛かってきたよ。何がどうなっているんだってあれこれ聞かれて・・・俺も、まだはつきりと事情が飲み込めてないから、返事がどうしてもあやふやになってしまっただろう？そうしたら、何やってるんだ、自分の家族の事だろう！って切れられちゃった。」

「本当にごめんなさい。私の不注意でした。携帯を忘れてなかったらこんな事にならなかつただけど・・・」

「まあ、お前を責めている訳ではないけどさ・・・」

歯切れの悪そうな返事をしたのが気になった。

「何か言われたの？」

「駐在員の妻として、よその国で面倒を起こす事の無いよう、自覚させる様になって言われたよ。」

「ぼやくように憲二は言った。」

「面倒？確かにこの間の事は、私にも注意が足りなかつたと思うわ。でも、そうなるまでの過程を知らない人達に、あの時の事を面倒な事扱いされるなんて・・・」

「俺達駐在員つてのは、ある意味会社の顔なんだ、その国の。ある一人の駐在員が起こした事が、結局は、あの会社の人がつていう風に広がっていく。駐在員の家族つて言うのも同じ事なんだ。何かをすれば、あの会社の誰それさんの家族はつて、最初に会社の名前が

付いて回る事になる。それを本社は嫌がるんだよ。今回だって、何も無かったから良かったけど、これで本当に事件になってみる。二ユースには、会社名が出る可能性が高いだろ。それは決してプラスにはならないし、どちらかと言うと、会社からすればかなりなマイナスイメージなんだ。だから、基本的に駐在員の奥さん方はあまり出歩かないで・・・」

しおりは、聞いていてショックだった。

もちろん憲二の言う事も、会社の言う事も分からないではない。駐在員というのは、赴任先では、会社の看板を背負っているのと同じだ。何かあれば必ず会社名が出る。憲二の言っている事もよく分かる。自己紹介でも、会社名が冠のように、初めについてまわるのが普通だ。でもだからといって、今回の事について、面倒を起こしたかの様に言われたのが悲しかった。そして、憲二も少なからずそう感じている様子が、しおりを更に傷つけていた。

あれだけ心配して泣いた事を、多少なりともいたわって欲しかった。

「分かりました。今度から気をつけます。」

憲二の話が終わるのを待って、しおりが硬い表情でそう言うのを聞くと、

「うん、そうしてくれると俺も助かる。色々と大事な時だからな。

さて、ちょっとシャワー浴びてくるか。」

と二階に上がっていった。

次の日、しおりは優花を送り出すと、お茶でも飲もうとリビングへ戻った。

淹れたたてのお茶を飲みながら、携帯を充電しておこうとバッグに手を入れた時、茶色い紙切れが目に入った。

ジョージのくれた、メールアドレスだった。

昨日、行動を自粛する様に言われた為、しおりは、当分一人で出

歩く事は出来なくなつた。今までは、毎週水曜日にトレパツオーンに出かけていたのが、これからは行く機会があるかどうかも分からない。

しおりは、コーヒーの香り漂うトレパツオーンの店内や、しおりを温かく迎えてくれた従業員達を思うと、寂しさを感じた。

そしてケニーの作るクレープ・・・ケニーのあの温和な顔を思い浮かべるだけで、すぐそこからクレープの香りがしてくる様な錯覚さえ覚える。

そしてジョージ・・・痛みは引いたのだろうか？今週一杯は休むと言っていたけれど、来週にはちゃんと働ける様になるのかしら・・・あれこれと考えると、更に寂しさが増してくる。

そうだ、ジョージが来週から働き始めたら、又水曜日には、私が来ると思つてあのテーブルを取つておいたりするのかしら・・・多分、彼ならばそうするだろう。しかしそれはもう必要の無い事なのだ。

そう思つた時、しおりはパソコンの前に座つていた。自分でも、メールをするための口実を、並べ立てたという事は分かつていた。しかし、あまり外出が出来ないとなると、この家の中だけで、何をすれば良いと言つのだろう。

籠の中の鳥ではないのだ。

しおりは、小学校から高校まで、ずっと一緒だった親友と、メールをする時にだけ使うアドレスを持っていた。やはり結婚した女同士、夫達には見られたくない内容のメールだつてあるものだ。

憲二の知らないそのアドレスを、しおりは使う事にした。パソコンに向かうと、一言一言、言葉を選ぶ様に、ゆっくりとキーを押していった。

件名：しおりです。色々ご迷惑をおかけ致しました

先日は大変ご迷惑をおかけ致しました。お部屋にまで押しかけてしまい、なんと常識にかけた事をしたものと反省しております。私、この間の優花の件について、主人の会社の本社の方から、外出を控える様にと言われてしまいました。今度からは、そちらの方に伺う事はあまり無いかもしれません。お手数をおかけして申し訳ないのですが、トレパツオンの皆様や、ケニーさんによるしくお伝え下さい。そして、ジョージさん。色々とお難う御座いました。優花もあの時ジョージさんに助けてもらわなかったら、本当に誰かにさらわれていたかもしれませぬ。本当はちゃんとお会いして、夫婦共々お礼をするべきなのでしょうが、色々とお事情が御座いまして、それも難しそうです。ジョージさんとお話している時は、とても楽しい時間を過ごす事が出来ました。また、いつかお会い出来れば幸いです。

それでは、失礼します。

しおり

読み返して見ると、まるで別れの挨拶の様だと思った。しかし、しおりがこのままトレパツオンに行く事がなくなれば、ジョージと会う事は無い様に思える。

しおりは一抹の寂しさを感じながら、送信ボタンを押した。

翌日、ジョージから返信メールが届いていた。

件名：メール有難う御座います・・・でも・・・

メールが来て、飛び上がるほど喜んだんですが・・・ものすごくショックです・・・  
もうしおりさんに会えないんですか？

外出を自粛って、あの時の事はしおりさんには全く責任の無い事じゃないですか。

悪いのは僕なんです。僕がもう少し考えた行動を取っていれば、良かった事なんです。

どうしたらいいんでしょうか？

どう謝ったらいいのか・・・

だからと言って、僕がしゃしゃり出ていっても、状況は変わらないのでしょうけど・・・

いや、でも、そうすると本当にもう会えなくなるのかなあ。僕はちよっと、久しぶりに落ち込んでいます。

えーっと、こうなったらお願いしてもいいでしょうか？

こうなったのは僕のせいなのをお願いするというのも失礼な話なんです。たまにメールしてもいいですか？あ、こういう事は結婚している人に聞いてはいけないことなのかな？でも、やましい事を書く訳でもないし。

だって結婚している女性だって、知り合いに道でばったり出会ったりしたら、立ち話しますよね。別にそれを誰かに見られてもいいわけだし。だから立ち話のつもりで、ちよこつと話し相手になってもえれば、僕はそれでいいんです。毎日なんてメールして煙たがられるのも嫌だし。そうだ、僕の店で会えなくなった代わりに、毎週水曜日にメールしていいですか？あ、でも、という事は、その返事に返事をするのに、一週間もかかるのか・・・あの、そしたらもう一回どっかで、何曜日でもいいんです。メールをさせてください。お願いします。

### ジョージ

読み終わったしおりは、あきれて吹き出してしまった。偶然会ったの立ち話の例はいいとしても、曜日を決めてしまえば、それは偶然ではなく必然になってしまう。ばったり会ってしまったのと違って、意図的に会っているのと同じではないか。

それに、考えている事をそのまま打ち込んでいるからか、メールの文章がとても長い。

しかし、パソコンの前であれこれと頭を悩ませながら、一つ一つキーを打っているジョージの姿を想像すると、自然に顔が綻んだ。

だが、現実的に考えると、家庭の主婦であるしおりが、夫の知らない独身男性とメールを交換するなどという事は、許される事ではないだろう。とは言え、憲二に説明してメール交換をしても良いかと聞くのも何となくおかしい気がする。では断ればいいのだろうか、それも寂しい。

別に不貞をしている訳ではない。

大体、自分の行動を、自分の夫に逐一報告している妻がいるだろうか。

例えば、毎朝行くバス停で、素敵な男性がいつも同じバスを待っていたとする。その男性と交わすちょっとした立ち話を、夫に言わずに楽しみにしていたとしたら、罪になるだろうか。

しおりは、結局自分も又、立ち話に置き換えている事に苦笑してしまった。もし、ジョージとのメールのやり取りが変な方向に進む様だったら、そこで止めてしまえばいい。当たり障りの無いメールのやり取りだけならば、問題ないだろう、と自分を納得させ、キーを打ち始めた。

件名：分かりました

メールを送って頂くのは一向に構わないのですが、曜日を決めてしまったりする事は、私自身、あまりしたくはありません。だってそれは偶然の立ち話とは言えませんし。(笑)もし、何かジョージさんに楽しいお話でもおありでしたら、いつでもメールを送ってください。でも、私は結構メール不精ですし、家の事もやらなければいけません。

その為、お返事に数日かかる事もあるかもしれませんが、それでもよろしかったら、いつでもメールを送ってください。

しおり

件名：やった！

有難うございます！よかった！だめって言われたらどうしようかって本気で悩みました。それでは有り難く、メールをさせて頂きます。でも、このアドレスのメールってご主人もご覧になるんですか？それだったら、本当にご迷惑になるかもしれないので、止めておきますが……。

ジョージ

RE：やった！

このアドレスは、私が昔高校時代の親友とだけやり取りする為に作ったアドレスです。やはり、親友とだけ分かち合いたい悩みもありますから。ですから、主人が見る事はありません。といってもあまり変な内容だったら、ばらしちゃうかも……お気をつけ下さい。

しおり

件名：気をつけます！

そんな貴重なアドレスを有難う御座います！神に誓ってふざけた事は書きません！でも、そうか……秘密のアドレスなんですわ……  
・  
なんとなく、ちょっとうれいな。あ、いや変な意味ではないですよ。

あ、今しおりさん少し睨んだでしょ。しおりさん睨むとちょっと恐いからなあ……でも、恐くても素敵ですけどね！あちゃ！また怒られそう。とりあえず退散します！それではこれからメールの交換をよろしくお願い致します！

ジョージ

それから、しおりとジョージのメールの交換が始まった。

メールの内容は、今日は何を食べたとか、仕事でこんな事があったとか、他愛も無い様な話ばかりなのだが、あまり外に出なくなっていたしおりにとって、ある意味生活の一部になっていた。

しおりは優花を送り出してから、大体、朝の内にメールを読んで返事を出す様にした。その方が時間を気にしなくて済む。

ジョージは生真面目に、必ず三日置いてからメールを出してくる。たまに答えをすぐに聞きたい時など、催促したいぐらいなのだが、それをしてしまうと、暇な主婦が物欲しそうにしていると想像せうなので、我慢をしつつ、とりあえずメールのチェックだけは、毎日欠かさない様になった。

ジョージのメールは、短いものもあれば、やたらと長いものもある。しかし、それが長かろうと短かろうと、ジョージの送ってくる文章は、読みやすく、そして暖かかった。

しおりはメールの交換と言うよりは、交換日記に近いような気がしていた。

件名：今日は星がとてもきれいですね・・・

しおりさん、さっき仕事から帰って来たのですが、久しぶりに夜空がとてもきれいでした。

それで僕、ちよつと前にとても素敵な経験をした事を思い出したんです。

カナダに、アルゴンキン州立公園という所があるんですけど、そこでキャンプをした事があるんです。そこは沢山の湖が点々としていますが、湖を渡るにはカヌーを使うんですね。それで、湖と湖の間はそれを担がなきゃいけないんですけど、これが慣れてないから、重い重い。でも周りを見ると、女性でも、軽々と担いでるんですよ。多分、重心の取り方とかになにかコツがあるんでしょうね。

でもそうやって苦労して行った湖で、急に野生のムースに遭遇したりすると、とても感動するんです。大きいですよ、ムースって。ちょっと恐いぐらいでした。そして、キャンプ場っていつても、何も手入れされていない、自然の中だから、テントを張れる場所があるまりないんですね。

湖によつては、その周りに数箇所しかない所もあるんですよ。それでキャンプ場っていうんだから、びっくりです。

何とか僕も、暗くなる前に場所を見つけて落ち着いたんですが、静かなんですよ、ホントに。

それで僕、暗くなつてからカヌーで湖に出てみたんです。（真似しちゃ駄目ですよ、危ないから。）

あの日は、不思議なくらい風が無くて、波一つ立ってなかったんです。だからカヌーもピクリとも動かない。そして本当になんにも聞こえないんです。普通、何か聞こえるものでしょう？水の音、風の音、鳥の声、葉っぱの擦れる音・・・聞こえてきてもおかしくない事って、いくらでもあると思うんです。でも、あの日は本当に何にも聞こえなかった。僕はそれで、カヌーの中で横になってみたんです。

そして、上を向いた時、ビックリしました！

あんなに沢山の星を見た事は、ありませんでした。そしてその星が、物凄く近くに感じるんですよ。上から本当に降ってくるみたいに。でもあまりに多すぎて、どこに焦点を合わせたらいいか分からなくて、とにかくびっくりしたまま、上を見てボーっとしていたんです。全く音の無い世界で、雨が降ってくるみたいに、沢山の星の光りが僕に降り注いできて・・・そんな時って、どんな感じがすると思います、しおりさん？僕もあんな経験は、あの時しかないけれど、本当にね、空中に浮かんでいるみたいない気持ちになるんです。ホントに。こういうのって、日本語で何でしたっけ？そうそう重力だ。そういうのを全く感じなくって・・・多分、宇宙空間で外に出たら、こんな感じなんだろうなって、思いながら、大分長い事そのまま横

になっていました。

いやいや、本当に素敵な経験でした。

あれれれ、また長くなっちゃったなあ・・・

いつかしおりさんも行ってみてください。

それでは！

ジョージ

件名：素敵な経験ですね

それは素敵な経験でしたね。私もいつか、その“地球にいながらの無重力”というものを、経験してみたいと感じました。でも、相変わらずジョージさんのメールは長いですね。まるで一つの小説みたい（笑）

しおり

件名：今度は短いです

確かに僕のメールは長いですね。初めて誰かとメールの交換なんてしているので、嬉しくつてしょうがないんです。でもやっぱりご迷惑ですよ。という事で、今回は短めにいきます。

以前、僕はカナダのナイアガラの滝に旅行に行った事があるんです。景色の話は長くなるのでまた次の機会にしますが、そこは端の上にある、アメリカとカナダの国境を、歩いて越えられるんですね。それで、僕も歩いて入国審査をする建物に入っただら、日本人の女の子が質問されていたんですね。それで審査官が「どこの国から来たんだ？」って聞いたたら、その女の子、なんて答えたと思います？なんとその子、

「メイド・イン・ジャパン！」って、叫んだんですよ！いや！笑っちゃいました。

あれ？やっぱり、長いなあ・・・僕のメール。

## ジョージ

件名：メイド・イン・ジャパンには違いありませんね（笑）

メールの長さは気にしないで下さい。まあ、確かに長いとは思いますが。（笑）

でも、いつも読みやすくて楽しませて頂いています。今年は特に雨が多くって、本当に鬱になりそうですが、（家に閉じこもりっぱなしですし）ジョージさんのメールを読むと、元気が出てきます。また、楽しいお話を待っています。

しおり

件名：サムライ・ムービー

それでは遠慮なく・・・

最近、沢山の日本の選手がメジャーリーグで活躍してますね。同じ日本人として、なんだか誇らしいです。いつか僕も、シアトルのセイフコ・フィールドで、生の試合を見たいなあ。帰りはパイナップルマーケットで新鮮なシーフードでも買って、家で鍋なんかして・・・でも一人鍋は寂しすぎるか、ははは。あ、そうだ、シアトルで思い出しました。全く前の話とは関係ないんですけど、一度、シアトルのダウンタウンを、一人でぶらぶらした事があったんです。そしたら、日本のレンタルビデオ屋さんがあったんですよ。それで何気なく覗いたら、なんと昔の黒沢明監督の映画や、古い座頭市の映画なんか、英語の字幕付であったんです。店員さんに訪ねたら売ってもくれるって言うから、ケニーさんにお土産に買っていこうと思って、選んでたんです。そしたら、二人のアメリカ人のおじさんが入ってきたんです。で、店長さんに、「ハーラーキーリームムービーはあるか？」って、英語で聞くんです

よ。その店長さん、英語はあんまり分からなかったみたいなんですけど、“ハーラーキーリームービー”の所だけはすぐ分かったみたいで、ちょうど僕のいた棚の辺りに、時代劇物が置いてあったんでそこを指差したんです。だから、僕もちよつとどいてあげたんですよ。でも、そのおじさん二人は、何を言っているんだ？って顔で、店長さんを見てるんですね。そして大きな声で、

「ハーラーキーリームービーだ！」って。僕も手伝ってあげられればと思つて、聞いてたんですけど、やっぱり“ハラキリ（腹切り）”に聞こえるんです。だから僕も、この棚にある古い映画は、サムライ・ムービーだからハラキリシーンもあるかもしれませんよつて、教えてあげたんですよ。そしたらその二人、顔を見合わせて、だめだ、こりやつて感じなんですね。店長さんも、どうしていいか分からない感じで。でもすぐに、二人の内、禿げた方のおじさんが、  
「何だ、ここにあるじゃないか。」って、反対側の棚を指差して、もう一人の友達に言ったんですよ。そしたらそのおじさんも、  
「これだ、これだ！」って。

しおりさん・・・何だったと思います？

おじさん達が探してたの？

それはですね、なんと、

“ハーローキティのムービー”だったんですよ。笑っちゃいました！最初僕がその店長さんと、その棚のサムライ映画について話をして、その後におじさん二人でしょ。こういうのって、先入観って言うんです。まったく、分からなかったんです。絶対、サムライ映画の話だつて思い込んで。

ハーラーキーリームービー

ハーローキティームービー

英語の発音は、二つとも近いと言えば近いですよ。いやーでも、おじさん二人でハーローキティは浮かばなかった。  
ははは

ジョージ

しおりは、ジョージの送ってくるメールを読む度に、その場所に一緒に居合わせていたかの様な錯覚を覚えた。アメリカの生活が長いせいか、難解な日本語を使う訳でもなく、かといって、何もかも簡素化してしまった様な、不愉快な響きの日本語を使う訳でもないジョージのメールは、一つ一つが短いドラマの様に、しおりの心のスクリーンに、その時の映像を映し出していく。

件名：おかしい！

ホントにおかしい！私、ジョージさんのメールを読んでいると、自分までその場にいたような気になります。私には、そんなに沢山誰かにお話しする様な事なんかないから、ジョージさんがとてもうらやましく思います。

しおり

RE：おかしい！

そんな事はないですよ。誰もが生きている長さだけ、ドラマを持っているのだと思います。ただそれを忘れているだけで。僕は記憶力がいいだけなんですよ。もっと世の中に役に立つ能力があれば少しはマシなんでしょうけど・・・全くの役立たずで・・・ケニーさんに、早くボーイ呼ばわりされない様に頑張ります！

ケニーさんのクレープか・・・今度いつ食べられるのだろうか・・・優花にも、またあのカスタードとイチゴのクレープを食べさせてあげたい・・・

そう考えていたしおりは、ジョージの家族の事に関して、何も聞いていなかった事を、ふと思いつ出した。

件名：家族

そう言えば、ジョージさんのご家族はどちらにいらっしやるのですか？あなたは、きつといい所のおぼっちゃんなんでしょう。なんとなく、お育ちが良さそうな気がします。いつも明るくて、楽しそう。でも、ご旅行はいつも一人旅なんですね。ご家族や友達とは行かないんですか？なんだか、プライベートな事をあれこれ聞いてしまつてごめんなさい。ちょっと気になったもので・・・

件名：一人旅

あははは！僕はそんなに能天気に見えるのかなあ。僕、いつも旅行は一人で行きます。予定を立てては行かないし、その場その場ですぐに気が変わるから、誰か他の人とは行けないんです。やっぱり、能天気なんですね。ははは！

ジョージ

一人旅の理由は分かったが、家族の事については一切触れていない。単に書き忘れたのか、意図的にそうしたのは分らないが、それをわざわざ確認するのも、しつこいような気がして、また別の機会に聞く事にした。

そのメールを出して二日後、しおりはちょっとした事故を起こした。

件名：車をぶつけてしまいました・・・

今日、近所のグロッサリーストアで、電灯のポールに、思いきり車をぶつけてしまいました。後ろがかなり凹んでしまい、それを見た主人にきつく怒られて、少し落ち込んでいます。

主人は、車に関してはとても厳しいのです。

しおり

件名：大丈夫ですか！？

車をぶつけたって、しおりさん、身体の方は大丈夫なんですか？  
車なんて、裸で走ってるんですから、傷が付いて当たり前ですよ。  
それよりも、しおりさんが、大丈夫かどうかが一番大事な事です。  
もし、しおりさんが少しでも怪我していたら、僕はそのポールを倒しに行きますからね、ははは。でも、車の事故って、後から身体にあちこちが痛くなってきたりするらしいですよ。もしそんな事になったらいつでも言うってください。いつかのお礼に、今度は僕がマッサージをします。あれ？でも出来る訳ないか。ええと、何となく、モニターの向こうから睨まれているような気がするんですけど・・・あの、変な事を考えている訳ではないんです。本当に心配なだけでちゃんと伝わるかなあ・・・

ジョージ

しおりは、最初の一行目を読んだ時、本当はこの一言を待っていたのだという事に、気がついた。

憲二は、仕事から自分の車で帰ってくるなり、ガレージの中にある、しおりの車の傷に気付くと、

「どうしたんだ？」

と眉間にしわを寄せて聞いてきた。

結局は、しおりの単純な後方確認のミスだと分かると、

「俺はあんなみつともない車、絶対乗らないからな。明日、朝一でボディショップに持って行ってくれ。」

と、イライラした調子で言うと、

小さく、

「チツ」

と舌打ちをして、二階へと上がって行ったのだった。

しかし結局、最後まで、しおりの身体を気遣う言葉を聞く事は出来なかった。

ジョージにはもちろん、車の傷の程度は分かりようもない。しかし、例えそれがかすり傷程度のダメージであっても、同じ様にしおりを気遣ってくれただろう。

マッサージうぬんの所では、居るはずのないジョージの顔を出し、思わず、モニターに向って軽く睨んでは見たものの、すぐに苦笑へと変わっていった。

しおりはメールを読み終えると、いつのまにか、あの埃っぽかったジョージの部屋を思い起こしていた。

音の無い、湿っぽさと埃っぽさの混じりあった狭い部屋のベッドの上で、恥ずかしさに、両手で顔を覆ったまま、しおりに身を委ねていたジョージ。

そういえば、もう痛みは引いたのだろうか・・・

ゆったりとイスに身体を預けたまま、パソコンの文字を見るとも無しに見ていたしおりの脳裏に、ジョージにマッサージをしてもらっている、自分の姿が浮かび上がってきた。

ポロロン　ポロロン

しおりの携帯の着信音が、リビングルームに響き渡った。

我に返ったしおりは、慌ててイスから立ち上がった。頬が火照っている。

冷蔵庫から水を取り出し、グラスに注いで一口飲むと、頬を右手で扇ぎながら、鳴り続ける携帯に向かって手を伸ばした。

#### 第四章：忘れられないと言う事

メールを交換する様になってから、三週間ほどが過ぎた。

その日、朝の十時頃、しおりは出張から帰ってくる憲二を迎えに空港へと出かけた。

空港に隣接する立体駐車場に車を止めると、地下通路を通って、空港内へと向かった。

この地下通路はいつ来ても人影が無い。

わざわざ地下まで降りなくとも、一階からも二階からも、行けるといえばそうなのだが、国際空港の、駐車場からのアクセスの一つなのだから、もっと人気があっても良さそうなものなのだが・・・などと思いつながら、しおりはその通路を抜けて、エスカレーターを上がると、各エアラインのカウンターの並ぶ二階へと出た。

時計を見ると、憲二の乗った機が着くには後二十分ほどある。

しおりは、少しづらづらして時間でもつぶそうと思い、出迎える為のゲートの方ではなく、レストランやお土産屋の並ぶ方へと足を向けた。

その時だった。見覚えのある後姿をコーヒーストップに見つけた。ジョージだった。

これだけ人の集まる空港内で、あまり知り合いの多い方ではないしおりが、誰かと出会うのも珍しい事だ。

しかし、人と人というものは、意外に近くをすれ違っている事が多いのではないだろうか。後になって、同じ時間に同じ所にいた事に、お互いが驚く事も良くある。ただ気付かないだけなのだ。

アメリカ国内でも、白人の比率がとりわけ高いこのオレゴンで、マイノリティーであるアジア人の知り合いに気付く確立は、日本国内に比べればかなり高くなるだろう。

ジョージは一人ではなかった。

テーブルの向こう側に、褐色の肌をした小柄な美しい女性が座っていた。ヒスパニック系だと思われるその女性は、泣きじゃくっている。ジョージが、悲しそうな顔で何かを話しかけながら首を横に振ると、その女性は両手で顔を被って、テーブルに突っ伏した。

ジョージはゆっくりと立ち上がり、優しく肩に手を廻して、その女性を立ち上がらせると、国際線のゲートへと向かった。

911の事件以降、セキュリティチェックのゲートから先へは、搭乗者しか入れなくなっている。

時間が迫っているのか、ジョージは何とかが行かせようとするのだが、その女性は泣いて言う事を聞かない。悲しい顔をしたジョージは、下から覗き込む様にして、女性の顔を見つめながら何かを伝えようと、ようやくその女性は、諦めたように頷いて顔を上げた。

ジョージは、優しく目線でゲートへと促した。その女性は、泣き顔のまま、無理やり笑顔を作ると、ジョージにハグをし、身体を離しながら耳元で何かを伝えた後、ジョージの唇にキスをした。

それを見た瞬間、しおりの心がズキンと音を立てて軋んだ。

ジョージの表情は、斜め後ろのしおりからは伺えない。

そして長いキスが終わると、その女性はくるりときびすを返して、後ろ向きのまま手を振り、ゲートへと向かって行った。

彼がどこで何をしようと、しおりには関係のないことだ。だがその時のしおりは、二人がキスをしている場面を見て、平静さを失った自分に驚き、そして戸惑っていた。

しかしその後、しおりはもう一つの光景を目にする事になる。

ジョージは、搭乗ゲートに消えていく女性を安心したように見送ると、駐車場へと続く通路へと向かった。

その時、壁に背をもたれ掛けていた、三十代前半と思われる、かなり丈の短い赤のスカートを履いた白人の女性が、ジョージに声を掛けた。

こぼれそうな大きな胸を誇示するかの様に、大きく胸元の開いた黒いシャツを着た、濃いめのメイクアップのその女性は、ふいに声を掛けられて驚いているジョージに、意味深な笑顔で近づくと、強めのハグをしてきた。そしてジョージの顔を両手で挟むと、頬にキスをしたのだった。

しおりは、目の前の光景が信じられなかった。先程、一人の女性と涙の別れをしたばかりだというのに、もうすでに違う女性と・・・しおりは、何か自分は勘違いをしていたのではないかと、思い始めてきた。

ジョージの笑顔を見ていると、夏の朝露の様な、青い透明さを感じる時もある。そしてその笑顔の向こう側には、決して水商売風の女性との関係などあってはならないのだ。

しおりの勝手な憶測は、これまでのジョージの姿をかき消す波紋の様に、じわじわと広がっていった。

そしてついには、ひよつとしたら自分もメール友達と言いながら、そういう軽い女と思われているのではないか、という疑惑が沸いてきた。そう考えると、これまでの様々な言動が疑わしく思えてくる。本当に旅行など行ったのだろうか？

いやもし本当に行ったとしても、そのたび毎に、違う女性と行っていたのではないか？

悪い方へ悪い方へと、思考が流れていく。

一人猜疑心に振り回され始めたしおりの視線の向こう側に、腕を取られたジョージと厚化粧の女性が、エスカレーターに乗って消えていった。

ゲートから出て来た憲二が、しおりの顔を見て、

「どうしたんだ？調子でも悪いのか？」

と聞いてきた。

「ううん、別に・・・」

しおりはそう答えただけで、それ以上何も言わなかった。

出張で疲れているであろう憲二を気遣い、しおりが運転する車のすぐ側で、車のクラクションが響いた。

「どうも調子が悪そうだな。俺が運転する。恐くてしょうがない。」

憲二はしおりに言っ、フリーウェイから車を降ろさせると、運転を代わった。

「ごめんなさい。ちょっと頭が痛くて・・・」

しおりはそう言っ、窓を開け、顔を外に向けて深呼吸をした。

次の日、ジョージからメールが届いていた。

件名：友達

昨日、友達がメキシコに帰りました。家の事情でどうしても帰って来いっって言われたそうです。長い付き合いだったから、とても寂しいけれど、でも家族って大事ですもんね。

ジョージ

読み終わったしおりは、何故、昨日見送った女性の事を、友達とだけしか書かないのだろうかと思った。別に女友達でもいいではないか。しおりにはジョージが故意に相手が女性だった事を隠したよくな気がした。

RE：友達

ジョージさん。一つだけお聞きしたい事があります。ジョージさんは私に何かを期待されているのでしょうか？実は昨日、私、空港であなたを見かけました。声を掛けようと思いました。女性と一緒にでした。多分メールの中のお友達なのでしょう。では何故、そのお友達が女性だと書かないんですか？

それより、ただのお友達とでもキスをするのでしょうか？その後すぐ、別の女性にもキスをされているのも見ました。私には理解が出来ません。もし、私も彼女達と同じ様な相手として期待されているのならば、お門違いです。

私には夫もいますし、家庭もあります。女性をとつかえひつかえする様ないい加減な人と関わるわけにはいかないのです。

#### しおり

さすがに、ちょっときつい言い方だったかなとは思ったが、送信を躊躇っているしおりの脳裏に、昨日のキスシーンが再び浮かび上がり、また腹が立ってきて送信ボタンを押してしまっていた。

パソコンをそのままの状態で、イライラした頭を冷やそうと、外の空気を吸いに出て戻ってみると、メールが来ていた。見るとジョージだった。

件名：誤解です・・・が・・・

ルールを破ってこんなに早くメールを出す事を許してください。確かに昨日はある女性を送りに行きました。でも僕の中では、ただの友達であって、それ以上ではありません。別に彼女が女性だった事を隠したつもりも無いのです。もちろん、昨日ご覧になっていたのなら、お分かりだとは思うのですが、確かに彼女からの好意は感じていました。キスをされたのも事実です。でも、僕はしていま

せん。断らなかつたのはいけないのかもしれませんが、出来なかつた。こう書いていると確かにいい加減ですね。その後の女性については、話すと長くなりますし、多分しおりさんにとつては関係の無い話だと気分を害されるのも申し訳ないので、説明は止めておきます。僕はしおりさんに何かを期待するなんて考えてもいなかつた。ただ、前から店ですつとお見かけしていて、なんて素敵な女性だろうと思つて・・・本当にそれだけです。でも、確かにそうです。しおりさんにはご家庭もあるし、これ以上、僕みたいな人間が関わるのは良くない事です。言われてみれば、僕の生活なんていい加減なものです。ちゃんとした会社にお勤めの旦那さんや、しつかりした優花ちゃんを大事にされているしおりさんに、これ以上ご迷惑をかけたくはありません。最後に、また長くなっちゃいましたが、これまでこんな僕の相手をしていただいてありがとうございます。とても幸せでした。

#### ジョージ

しおりは読み終えて、何かひよつとして自分は勘違いをしているのではないかとも思ったが、これ以上、ジョージを見かける度に心中が穏やかでなくなるのは避けたかつた。

自分でも信じられないが、はつきりとジョージに惹かれている自分に気が付いたのだった。今考えてみると、空港での自分の感情の揺れは、あきらかな嫉妬に他ならない。

そう考えると、人妻である立場として、これで終わらせておくべきだとしおりは思った。

それ以降、ジョージからのメールはぶつつりと途絶えた。

それから三週間ほど経つたある日、しおりはダウンタウンにある、日本領事館に来ていた。しおりのパスポートが切れるので、更新の手続きに来たのだった。

ダウンタウンを運転するのは、今あちこちで道路工事が行われているから危ないと言う憲二の忠告を聞いて、ビーバートンの駅からMAXに乗って来ていた。

MAXとは、ポートランド市内外を繋ぐ路面電車である。しかし、ガソリン価格の高騰や、朝の渋滞を嫌う人達で、その必要性はかなり高くなっている。

パスポートの更新手続きを済ませ、MAXの乗り口まで歩いて行く内に、確かもう一つの電車が、トウエンティースードまで乗入れている事を思い出した。時間を見るとまだ十時半だ。領事館は午前中の受付が十一時半で終了するので、早めに来ておいたのだった。

どうしようかと迷ったしおりは、やはり久しぶりにケニーのグループが食べたくなり、MAXに飛び乗った。途中で確か、ストリートカーと言う、別の電車に乗り換えれば、そのままトウエンティースードに着くはずだ。

しおりは、車の窓から見える風景とは全く違う景色を、MAXの窓の外に眺めながら、ふとジョージはどうしているのだろうかと思っ

た。なんとなく、後味の悪いメールを最後に出してしまった事を、今でも後悔してはいたが、今更のこのこと会いに行く訳にもいかない。やはり、今日はクレープを食べて帰ろうとしおりは思った。

電車を降りると、しおりは周囲を見渡した。久しぶりのトウエンティースード。

一ヶ月近くも来ていない。

さすがに周りの木々の葉っぱも、青みを強く増してきて、夏を迎える準備も万端といった所だ。

しおりはケニーの所へと、真っ直ぐに向かった。

着いてみると、ケニーはちょうど開店準備を終え、入り口の鍵を開けかけた所だった。

「お久しぶりです。」

「オー、しおりさんじゃないか！」

ケニーは、柔和な顔に満面の笑みを浮かべて、しおりを抱き締め  
た。

「本当に久しぶりだなあ！」

嬉しそうに笑うとイスを勧めかけたが、急に難しそうな顔でそれ  
を引っ込めた。

「しおりさん、ちょっとコーヒーでも飲まんか？」

「でも……」

「大丈夫、別の店だよ。」

ジョージが何かを言ったに違いない、そう思ったしおりは、観念  
したように

「はい。」

と言うと、後を付いていった。

トウエンティースードから2ブロック東へ行くと、トウエンティ  
ースードほどではないが、いくつかのテナントが立ち並ぶ、トウエ  
ンティースードと呼ばれる通りがある。

さほど賑やかな訳でもないが、ポートランド有数の有名レストラン  
などもあって、隠れ家的な通りなのだ。

その一角にある、小さなコーヒーショップにケニーは入っていっ  
た。

勝手を知っているかの様に、奥の方に席を確保すると、

「待ってなさい」

と言ってしおりを座らせ、数分後、両手にラテを抱えてきた。

「有難う御座います。でもケニーさん、お店はいいんですか？」

「はっはっは！気ままな店だからな。出る前に急用で今日は休いま  
すって、貼り紙をしておいたよ。」

お客も多分“またか！”って思うだけさ。」

と言って笑った。しかし、急に真面目な顔に戻ると、

「所で、ボーイと何かあったのかい？」

あんなに落ち込んでいるボーイを見るのは久しぶりだ。ちょっと心  
配になってな。」

そう言つて、ラテを一口飲んだ。

しおりは、どうしようかと一瞬躊躇したが、全てを話してみる事にした。

ケニーはふんふんと聞いていたが、しおりがジョージに、いい加減な人と言つてしまつた事を聞くと、悲しそうに眉をひそめた。あまりにもケニーの顔が真剣なのを見て、しおりは不安を覚えた。

「私、何かいけない事を言つてしまつたのでしょうか？ あまりにも立て続けに違う女性とキスしている所を見てしまつて、なんだかいい加減な人に思えてしまつて。」

ケニーはそれには答えず、おもむろに聞いてきた。

「しおりさん、ユーはジョージの事が好きかね？」

ふいをつかれたしおりは、

「そんな事は・・・」

と否定しようとしたが、自分の顔が紅潮してくるのを隠しきれなかった。

「いや、もちろん、ユーは結婚している。だから、そんな事は口に出せない事ぐらいは分かるさ。でも、誰かを愛していたとしても、他の人を好きになる事は良くある事だろう？それは誉められる事じゃないかもしれないが、責められる事でもない。人間なんだからね色々あるよ。多分しおりさん、ユーはジョージの事が好きだからこそ、とつかえひつかえ女性とキスしているジョージを許せなかったんだろう。もし、どうでもいい相手なら、誰とどこでキスしようが、気になることもないだろうからな。」

ケニーの口から、ジョージの事をしおりが好きなのだと言われ、何故か否定出来ない事が恥ずかしかった。これでも自分は人妻なのだ。

「ボーイは確かに女性によくもてよる。羨ましいぐらいにな。でもわしが知る限り、あいつは今まで、誰かと特別な関係になつた事は一度も無いはずだよ。又そういうミステリアスな所が、逆に女性を引きつけるのかも知れんがね。」

「そう言えば、お部屋も散らかっていたし、ガールフレンドがいる感じじゃなかった……」

「何？しおりさん、ユーはあいつの部屋に入ったのか？」

その真剣な表情に、しおりはただ事ではない雰囲気を感じ取った。

「な、何か、私……」

「そうか、しおりさんを部屋に入れたのか……あのな、しおりさん。あいつの部屋に入ることが出来たのは、ユーだけなんだよ。そうか、そこまで気を許していたか……いや、立ち直ってきたと言うべきかな……」

ケニーは呟くように言うと、窓の方を見た。

「あの……彼に何かあったのですか……？」

「しおりさんには、ボーイがのんきに毎日暮らしている様にしか見えないかもしれん。まあ、確かにそう見えるわなあ。でも、あいつほど、毎日を一生懸命に生きている奴もいないんだよ。ただそう見せないだけで。別に、身体が悪いとかそんなんじゃない。あいつは、ボーイはな……」

少し間を置いて、

「しおりさんにだったら話してもいいだろう。」

と自分に言い聞かせるように呟くと、重い口を開いた。

そしてしおりは、ケニーの口から、ジョージの悲しく重い過去を聞かされたのだった。

ちょうど十年前、ジョージが十八歳の時だった。

ジョージは、父春雄と母珠江、そして十三歳年の離れた、五才になる妹の真由とロサンゼルス郊外のサンフェルナンドヴァレーという所に住んでいた。

ジョージの父春雄は、九州の佐賀県で小さな食堂を営んでいたのだが、高校の時の同級生、北川に誘われて、ジョージが十六の時に渡米したのだった。そして北川と春雄は、ビジネスパートナーとして、小さな日本食レストランをオープンした。ビジネスも軌道に乗

り、順風満帆に思えた夏の日の夜、事件は起こった。

昼間、季節外れの雨が降ったせいか、珍しく蒸し暑く感じられたその夜、何とか無事に高校を卒業していたジョージは、皿洗いをしながらレストランを手伝っていた。

八席だけのカウンターと、四人掛けのテーブルが二つ、後は二人掛けのテーブルが四つあるだけの小さなレストランだったが、その夜はとても忙しく、板前として働く北川と春雄は必死になって寿司を握った。そして無事に全ての客が満足して帰ると、北川は上機嫌だった。

「よし、今日のまかないは“端っこちらし寿司”にするか！」

「やった！」

ジョージはこの“端っこちらし寿司”が大好きだった。ネタケースの中に残った、様々な寿司ネタの端っこを寄せ集めて作るだけのちらし寿司だが、北川と春雄の機嫌のいい日はそれに加えて、イクラダのホツキ貝などの余り物ではないネタまで乗せてくれる。

そしてそんな時は、ジョージの母、珠江と妹の真由も電話で呼び出されて、皆でテーブルを囲むのだった。

北川は独身で家庭を持っていなかった為、ジョージや真由をことのほか可愛がってくれた。

「そうだ春雄、久しぶりに焼酎ば飲もうか。」

「お、よかやつか！」

二人はたまにどこからか芋焼酎を仕入れてくると、昔話に花を咲かせるのが常であった。

「車のトランクに入っとるけん。ちょっと持ってくるたい。真由ちゃん、奥さん、先に食べとってよかばい。ジョージ、お前は待つとけ。先輩より先に手ば付けたらいかんぞ。」

北川はジョージを睨むと外へ出て行った。

「ちえ！」

ジョージが舌打ちをし、真由が、

「いただきまーす！」

と声を上げたその時だった。

カラン、と音がして入り口のドアが開いた。

振り返りながら

「おじさん、早かったじゃ・・・」

と、言いかけたジョージの顔が凍りついた。

そこには、薄汚れたカーキ色のコートを羽織った、ホームレス風の男が立っていた。卵の白身の様にぶよぶよと濁った目は焦点が合っており、ぶつぶつと何事かを呟いている。そして、その右手には回転式のリボルバーが握られていた。

麻薬の中毒症状が現れているのは明らかだった。

その男はぶつぶつと呟きながら近づくと、テーブルの上のちらし寿司を手づかみで食べ始めた。

寿司カウンターの前に居た春雄はそれを見ると、少しずつ、ジョージ達がしゃがみこんでいるダイニングの方へと移動しようとした。背中に柳刃包丁を隠し持ち、ゆっくりと移動していた春雄は、その時すっかり海苔の入っている缶を落としてしまった。

スチール製の缶は、静まり返った店内に殊更大きな音を響かせた。その男はゆっくり音の方へと振り向いたが、焦点が合っていない。

しかし、その焦点の合っていない暗い目に、焦った春雄が握っている柳刃包丁がキラリと映った。

男はうつろな目で何かを呟くと、いきなり発砲した。

頭部に銃弾を受けた春雄は、その場に崩れ落ちた。真由が泣き叫び、珠代が叫んだ。

阿鼻叫喚の中、その男はゆっくりとジョージ達が固まっている方向へ向きを変えると、銃口を向けた。

恐怖で泣き叫ぶ真由と珠代の前に、初めは覆いかぶさっていたジョージだったが、銃口が向けられた途端、両手を広げて男の前に立ちただかると叫んだ。

「やめるー!!」

しかし、それが逆効果だった。

麻薬の禁断症状が現れているその男には、黒いＴシャツと黒いズボンのジョージが、手を広げて立ちほだかる姿が、邪悪な羽根を広げた悪魔の様に映ったのだった。

男は一瞬ひるんだかと思うと、にやりと笑いながら、

「悪魔め・・・」

と呟くと、ジョージに向けて発砲した。

銃弾はジョージの左わき腹に命中した。

しかし、その当時のジョージの身体は、銃弾を受け止めるにはあまりにも細すぎた。

至近距離から発射された銃弾は、ジョージのわき腹を貫通し、後ろにしがみついて隠れていた、真由の首筋に入り込んで止まった。

真由が崩れ落ち、ジョージが崩れ落ちた。

そして目の前で次々と崩れ落ちる子供達を見た珠江は、そのまま気を失って倒れた。

男は、一家全員が倒れてしまうのを確認すると、濁った目を見開き、何事かを叫びながら、自分のこめかみに当てた銃の引き金を引いた。

車の鍵をどこかに落として探し回っていた北川が、銃声と悲鳴を聞いて急いで戻ってきた時には、店内は血の海になっていたのだった。

話を聞き終わったしおりは震えが止まらなかった。なんと言う話だろう。

昔、母が、

「アメリカって怖い所ねえ・・・」

と言いながら読んでいた新聞に、

“ロス郊外で邦人一家射殺”

と言う記事を見たのを思い出した。

あれはジョージの家族の事だったのだ。

「それで、お母さんは・・・」

「ボーイの母親は首を吊って自殺したそうだ。無理もないさ、目の前で三人が撃たれたんだからな。気絶から覚めた時には、もうおかしかったらしい。それで、ジョージ達が運ばれた病院のトイレで・・・  
・ けどな、ジョージはたまたま撃たれた所がよくって、死ぬ事は無かったのさ。問題は妹さんだった。

首に当たった弾のせいで、植物人間になってしまったんだよ。でもあいつは諦めなかった。守りきれなかったのは自分のせいだって、一生懸命働いて病院代を稼いだらしい。

知っているかい？あの、生命維持装置っていうのは、物凄いわ金が掛かるんだよ。とてもとてもまともには払える訳がない。だからあいつは朝晩休み無く毎日働いたんだってさ。足りない分は、あちこちに頭を下げて回ってな。でも、さすがに限界だったらしい。親父さんが掛けていた旅行保険は大分前に切れてたらしいしな。」

事件から二年が過ぎた頃、とうとうジョージにも限界が来た。

そして、北川や医師の説得により、真由の生命維持装置のスイッチが、呆然とするジョージの前でついに外されたのだった。

その瞬間、ジョージには真由が大きく息をしたのが見えた。

「まだ生きてるじゃないか!!」

ジョージは叫んで、スイッチを戻そうとしたが、医師と北川に押さえられると、

「真由！」

と叫んで、目から涙をこぼしながらその場に倒れこんだのだった。

二年に及ぶ、過酷な労働と緊張の為に、精神的にも肉体的にも限界だったのだろう。

目が覚めたジョージは、まるで抜け殻だった。

店舗を移した北川の店を手伝いながら、生活をしてはいたものの、

まるで生気が感じられなくなっていた。仕事が終わるとアパートに真っ直ぐ帰り、アルコールに浸る。まだ二十一歳になっていなかったジョージは、同じレストランで働くメキシコ人達から、倍の値段で酒を買っていたのだった。

そして、次の日の朝はどんよりとした目をして仕事に行き、又帰って来ては酒を飲む。それを繰り返している内に頬はこけ落ち、目は落ち窪み、まだ二十歳だと言うのに髪は白髪混じりになっていた。

見かねた北川は、環境を変えてみてはと思い、オレゴンに住む、北川の叔父に相談してみた。

そしてその叔父の口利きで、ポートランドのダウンタウンにある、日本食レストランで働き始めたのだった。

「たまたま、その叔父さんって奴はわしの昔からの友人でな。全てを教えてくれたんだよ。

でもな、こつちに来てもあいつの生活は全然変わらなかったよ。仕事が終わっては部屋に帰って飲みつぶれて。誰もあいつの部屋に入った事が無くつても、あれだけ毎日酒臭けりや、誰だって飲んでいゝる事ぐらいは分かるさ。しおりさんが見た化粧の濃い女つてのは、たぶんリカーストアの店員だったロビンだろ。わしの店の常連だよ、彼女も。とにかく毎日の様にあいつが酒を買いに来るもんだから、心配になって時々あいつに話しかけていたらしいんだな。でも何を話してもボーイは悲しそうに笑うだけなんだつて、彼女まで寂しそうに言うから、少しだけ事情を話してやったんだ。そしたら彼女、おいおい泣いてな。彼女の弟もシアトルで撃たれて死んだんだつて、気持ちはよく分かるつて。しおりさんびっくりしたかい？アメリカでは、意外と身近にある話なんだよ。日本人には分からないかもしれないけど。とにかく、それから彼女は二日にいっぺんはあいつに酒を売らなかつた。法律だつて、嘘をついてな。売れ！、いや売らないつて、あの頃は半分揉めてたよ、あの二人は。たまにあんまりひどいと、ロイつて言う日系人の警官に電話して、表ざたにな

ら無いように、一晩だけ留置場に寝かせてもらったりして。だから、彼女空港であいつを見かけて嬉しかったんだと思うよ。彼女にとつて、ジョージは弟みたいなものなんだ。見た目が派手だからって変な風にとつたら可哀想だよ、彼女が。あの子はいいい子なんだ、とても。まあそれはいいとして、その内あいつが、ボーイがわしの所に来る様になつてな。わしは大分説教したよ。いい加減にしろつてね。気持ちは分からんでもない。でもそれは他の人から見たら、全く関係の無い事なんだ。本人だけが分かる世界で落ち込んでいるのもいい加減にしろつてね。それからあいつが立ち直るまで大分かったよ。そしてあいつは本当に努力したんだ・・・

しおりさん、わしが言うのもおかしい話だし、結婚している人に言うべき事ではないかもしれないが、あいつの友達を止めないでやってくれんかね。わしはボーイと会ってから、あいつが誰かとあんなに楽しそうに話している所を見たことが無いんだよ。確かにあいつは沢山の女性から好かれとる。でも本当に、一人としてあいつの部屋に入った人はいないんだよ。しおりさんを除いてはね。あいつはね、立ち直るまでに沢山の人達に助けってもらってきた。もちろん、沢山の女性も含めてな。

だからあいつは、その女性達がキスをしてきても断らん。そんな事をしては、申し訳ないと思ってるんだろうな。でも決してあいつからはしないんだよ。自分からしてしまえば気持ちが通じてしまう。そのつながりが、又目の前から消えて無くなってしまふのが恐いんだよ。そういう意味では、あいつはまだ完全に立ち直ったとは言えないだろうなあ。だから、お願いだ、しおりさん。あいつを見捨てないでやってくれないか。」

そう言つて、ケニーは頭を下げた。

しおりは涙が止まらなかった。

なんとと言う辛い過去を背負ってきたのだろう。目の前で愛する人が次々と死んでいくなんて、とても想像が出来るものではない。

しおりは、自分がジョージに出したメールを思い出すと、身体に震えが走った。

何という次元の低さだろう。

ジョージの背負ってきた悲しみや苦しみと比べると、単なる嫉妬、羨望、ありとあらゆる低次元の世界の中でイライラしていただけではないか。そう思えば思うほど、自分の言葉に寒気がして、しおりは両手で自分の肩を覆った。

ジョージはそれを怒りもしないで、パソコンの前で哀しそうにあのメールを読んだのかと思うと、しおりは頭をどこかに打ち付けたくなる衝動に駆られた。

あまりのしおりの落ち込み様に、ケニーは

「あんまり心配しなくてもいいさ。あいつはもう、一番駄目だった時は乗り越えたんだ。後はしおりさんと仲直りさえ出来れば・・・」  
ケニーがそこまで言いかけた時、しおりは立ち上がった。

「ケニーさん・・・私・・・有難う御座いました・・・いえ、すみませんでした・・・」

ああ、なんて言えばいいのかしら・・・」

しおりは天を仰いで呟くと、ふいにケニーに向き直って、  
「ケニーさん、私、今からジョージの所に行つて来ます。」

そう言うと、何か言いかけたケニーに頭を下げて店を出た。

しおりは走った。とにかくジョージに謝りたかった。次元の低さを笑われてもいい。許してもらえなくてもいい。ただ一言謝りたかった。トレパツオンに着くと、顔馴染みの店員が、

「あいつは休みで今日は家にいるって、言つてたけど。」  
と教えてくれた。

しおりは飛び出ると、又走った。

こんなに走ったのはいつ以来だろうか。しかし、疲れよりも何よりも涙が止まらない。そしてやっとジョージの住む家に着くと、ドアをノックした。

じりじりする程の時間が経った頃。見覚えのある、いつかの若者

が眠そうにドアを開けてくれた。

「オウ、あんたはいつかの・・・」

少し驚いているその若者に、

「ちよつとすいません」

と日本語で言いながら、横をすり抜けた。

そしてジョージの部屋をノックした。

「イエス？」

ジョージの声がした。

「私です！しおりです！」

そこから先は声にならなかった。次々と涙がこぼれ始める。

「しおりさん？」

と驚いた声が出て、ドアが開いた。

その瞬間、しおりはジョージの胸に飛び込んでいた。そして大きな声で泣きじゃくりながら、

「ごめんなさい！ごめんなさい！」

と何度も繰り返した。

「ワーオ、お前がドアを開けるなんて、珍しい事もあるもんだな。」  
目を丸くして驚くさっきの若者に、ジョージは目で部屋に戻るよ  
うに促した。

「とにかく、中に入りませんか？誰が見ているか分かりませんから。」

優しく背中に手を当てながら、しおりを部屋にいれると、後ろ手に  
ドアを閉めた。そして、いつまでも嗚咽を繰り返すしおりをイス  
に座らせ、自分はベッドに腰掛けた。

「一体、どうしたんですか？びっくりしましたよ、本当に。」

戸惑いを隠せないジョージは、そう言って声をかけながら、ティ  
ッシュを差し出した。

「私、ジョージさんの事何も知らなくて・・・それなのにひどい  
ことばかり言って、ご、ごめんなさい・・・」

しおりは嗚咽を繰り返した。

ティッシュを握り締めたまま、いつまでも泣き続けるしおりを見てジョージは、

「ああ、ひよつとしてケニーさんに何か聞いたんですね。そうか・でも、僕は本当にだらしなしいし、のんきに生きているだけなんです。本当の事なんですよ。」

と言つて寂しく笑つた。

「違うの、違うのよ・・・」

ジョージの言葉を聞いて、又泣き出したしおりに、立ち上がったジョージは、部屋の隅にある小さな冷蔵庫からペットボトルの水を出すと、グラスに入れて差し出した。

「しおりさん、落ち着いてください。全くあのおじさんったら、こんなにしおりさんを泣かせちゃつて・・・でも、正直言つと、僕が立ち直れたのもケニーさんのお陰なんです。悔しいけど。」

泣きながら、グラスの水を一口飲んだしおりを見ると、話し始めた。

「僕ね、あの頃本当に早く死にたくつて、死にたくつて。でも自殺をする勇氣すら無くつて・・・どうしようもなかったんです、毎日お酒ばかり飲んで。酔つ払つと、この部屋に真由が、僕の妹が出てきて、楽しそうに走り回るんです。少し、狂つてたんですね。そしてお兄ちゃん、お兄ちゃんつて、僕が一番好きだった顔で笑うんです。でも、何かの拍子に、急にどこかに行つちやうんですよ。通りを走る車の音だったり、カラスの声だったり、何かのきっかけで・・・悲しそうな顔でいなくなつちやうんです。その瞬間、自分が結局、二度までも真由を守れなかった事を思い出して。泣けてきて、また飲んで・・・毎日その繰り返しでした。そして、ある休みの日に、フラフラ歩いてたら、いい匂いがしてきたんです。僕その日、もの凄くお腹が空いていたのもあったのかな。前の日も、何も食べないで飲んでいたので。そして匂いの方歩いていったら、ケニーさんがクレープを焼いてたんです。ああ、北川さんの叔父さんが、知り合いがクレープ屋をやっているから、一度行ってみるつて

言つてたなあつて、思い出したんです。でも、まさかこんなに近くにあるなんて思わなかった。毎日、仕事場と酒屋と自分の部屋ぐらゐしか行く所なかったから。でもとにかく、前の人がオーダーしたカスタードとイチゴのクレープがとても美味しそうで、美味しそうで。僕も同じのをって頼んだんです。そしたらケニーさん、ジロつて僕の顔を見て、ああつて言つて作つてくれたんです。後で聞いたら、知つてたんですね、僕の事。

いつ来るか、いつ来るかつて待つていたらしいんですよ。そして僕のクレープが出来上がつて一口食べたなら、これが本当にいい匂いで、美味しくつて、美味しくつて……でも、急に涙が出てきちゃつたんです。ぼろぼろつて。日本語つていいですね、ぴつたりの言葉がある。で、ぼろぼろ、ぼろぼろ、一口食べる度に涙がこぼれるんです。止め様が無いんです。そしたらケニーさんが、

「おい、わしのクレープはな、美味しく食べれる奴にしか売らないんだ。泣くんだったら、食うな。」つて。そう言われても止まらないんです、涙が。そしたらケニーさん、急に店を閉めちゃつて。ちよつと来いつて裏に連れて行かれたんです。知つてました？あの裏にはちよつと座る所があるんですよ。と言つても隣の家の庭先ですけどね。とりあえず座らされて、ケニーさんが、

「おい、お前、何故泣く？」つて。僕は、世の中にこんなに美味しい物があるなんて、知らなかった。こんなに美味しい物を、死んだ妹にも食べさせてあげたかつたつて泣きました。だつてあいつは、真由は、楽しい事や、美味しい物を、何も知らないまま死んで行つたんです。その後、何故ケニーさんに話す気になつたのかは忘れてたんですけど、どうしても死んだ妹の笑顔が忘れられない、何をしていても頭に浮かんでくる、お兄ちゃんつて話しかけてくるつて話したんです。そしたらケニーさん、

「何故、忘れられないんだ？」つて聞くんですよ。何故つて言われなくても、考えてみたら何故なんだろうつて。

「お前、一ヶ月前に何食べたか覚えてるか？小学校の時の先生達を

みんな覚えてるか？そんな訳無いな。人間てのはな、賢い生き物だよ。大事な物だけ残して、いらぬ物はどんどん捨てていくんだ。尻尾だって、毛だってそうだろう。記憶だってそうだ。全部忘れた方がどれだけ楽な事か分からないのに、何故忘れられない事があるんだ？それはな、いいかお前、それは忘れちゃいけないって事なんだ。考えてみる。大事に思っていた人の記憶っていうのは、いつもその人の一番の笑顔のままだろう。何故だと思っ？簡単な事さ。またその笑顔に会えるからさ。わしにはな、死んだ後の世界の事は分からん。でも、そうとでも考えんと、忘れられないって事の意味が分からんだろう？人間はいつか必ず死ぬさ。当たり前だがな。しかしな、わしはその時に、頭の中にある大事な人達の、一番の笑顔に、もう一度出会えると信じとる。さあ、どうするんだ、お前。今、ここで死んだら？そんな顔で、そんななりで妹さんに会えるのか？恥ずかしくないのか？妹さんが好きだったのは、そんな酒臭い、小汚いお前じゃないだろう？どうなんだ？」って。僕は、又泣きました。いつも妹が言っていたんです。お兄ちゃん、石鹸いいニオイだねって。安物なんですけどね。でも、ケニーさんの言う事を聞いて、目の前が開けたって言うか、妙に納得したんです。そうなのか、忘れられないって事は、忘れちゃいけないって事なんだ、又いつか会えるって事なんだって。で、ふと自分を見てみると、お酒の臭いしかない。こんなんじゃ、真由に会わせる顔なんかありません。それから僕は、お酒をね、辞めたんです。そして毎日クレープを食べる事にしたんですよ。でもね、やっぱり一口食べると涙が出てくるんです。そしたらケニーさん、倍お金を取るんです。ひどいでしょ。悔しいから、次の朝また食べてもやっぱり泣けてくる。だから、僕は一口食べたらずぐ上を向く様になっただんです。昔の歌にあったなあ。でも我慢しても、その後下を向くと、目の所に溜まっていた涙が、結局ぼろぼろってこぼれちゃう。そして又倍お金を取られて、

「めそめそいつまでも泣きやがって、これからお前の事はボーイっ

て呼ぶからな。」ってケニーさんはもつといじめるし・・・  
時間掛かりましたよ、ホントに。でもまあ、お酒を買う事に比べれば安いもんですけどね。

そして、やっとある日泣かなかったんです。一口食べて、サツと上を向いたんですけど、涙が出てこない。ああ、これでやっと真由に胸を張って会えるってとても嬉しかった。でもね、ケニーさんお金を倍払えって言うんですよ。何でって聞いたら、最後の治療費だって。僕は、20ドル札をカウンターの上に置いて、お釣りは取って！って言ってやりましたよ。」

しおりは、ずっと泣きながらジョージの話を聞いていた。美味しい物を食べて上を向く癖には、そんな悲しい話があったのだ。

「何故、誰も部屋に入れなかったの・・・？」

「この部屋には、真由が住んでいたんです。いや、お化けではないですよ。僕の心の問題なんですけどね。ケニーさんのお陰で大分気持ちは楽になったけれど、どうしても一人になってしまうと、この部屋に真由の声がしてくるんです。でも、僕はいいじゃないかって思いました。聞こえてくるのならそれでいい。聞き続けていようって。泣くぐらいなら、その声を楽しもうって。でも、だから誰にも入ってきて欲しくなかったんです。何となく踏み込まれたく無かった。」

「でも、私は・・・」

「それが僕にも分からないんです。今まで絶対、誰も入れたくなくなつたんですけど・・・でも本当の事を言うと、あ、気持ち悪がらないでくださいね。僕、背中が痛くて寝てたでしょう？そしたら、やっぱり真由の顔が浮かんで来たんです。その時、ちようどノックが鳴って、しおりさんの声が聞こえた時、真由が「ほら、しおりお姉さんが来たよ。ドアを開けてあげなきゃ。」って、言った様な気がしたんです。それで僕も、ああ、そうだ入れてあげなきゃって・・・やっぱり変ですよ。」

ジョージはそう言って笑った。

しおりは初めてこの部屋に来た時、ドアが開いた瞬間、風が通り抜けたのを思い出した。あれは、ジョージの妹、真由だったのだからか……

「ううん、そんな事無い……可愛かったんでしょね、真由ちゃん……あ、ごめんなさい。」

「いや。もう大丈夫ですよ、本当に。真由ね、優花ちゃんそっくりだったんですよ。ほっぺたがポツコリしていて。だから最初会った時にビツクリしましたよ。ああ、優花ちゃんに会いたいなあ……」

ジョージは目を細めると、窓の外を見た。

その頃には涙も乾いてきたしおりは、改めて部屋の中を見渡すと、ある事に気が付いた。

壁には沢山の写真が張ってあったのだ。この間来た時には、緊張もあって部屋全体を見る余裕など無かったからか、気づきもしなかった。

「ジョージさんは旅行が好きなんですね。」

ジョージはしおりの見ている壁の写真を横目で見ると、

「僕ね、生きている内に出るだけ沢山の美しい景色を見ておきたいんです。そしていつか死んだ時に真由に会ったら、色々と話してあげたいんですよ。あいつ、たった7つで死んじゃって、どこにも行けなかったから。だから、いつも旅行に行く時は一人なんです。景色を頭に焼き付ける事以外に、余計な事を考えたくないから。」

と言つて、寂しい目を壁の写真に向けた。

「ジョージさん、それじゃいつか死ぬ為に毎日生きている様なものじゃない。そんなの哀しすぎる……」

「でもねしおりさん、人間いつかは死ぬんです。その時の為に準備をしておいてもおかしくは無いでしょう？」

「でもあなたはまだ二十八才よ。そんなに若いのに、死んだ後の事ばかり考えて生きていくのってやっぱりおかしいわ。これから素敵

な女性も現れるでしょうし、そしたら家庭を持つたりして・・・あなたは今を見つめて、今を生きるべきよ。」

しおりはジョージを見詰めて言った。

「この僕が家庭を持つ・・・？考えた事も無かったなあ・・・。素敵な女性かあ・・・。」

その時、悲しそうに天井に向けられていたジョージの視線が、ふとしおりの方へと向きを変えた。ベッドに座っているジョージと、イスに座っているしおりとの距離は、三十センチと離れていない。

しおりの身体を、覚えのある甘い緊張感が走り抜けた。

あれは中学二年の時だった。

初恋の相手だった同じクラスの男の子と、教室に二人きりになった事があった。

夏休みの教室、お昼を少し回った頃だったろうか。

体育祭の準備で集まっていたクラスの数人が、いつの間にかしおり達二人を残していなくなり、たまたまあぶれた形で二人が教室に残されたのだった。後から聞いた話では、皆が気を利かせて二人を残すように仕込んだらしいと分かったが・・・

蝉が鳴きしぐれ、染みの付いたカーテンが揺れていた。

しおりもその男の子も、何を話していいのか分からなかった。

その男の子は、張り詰めた空気をどうにかしようとして、しおりに持っていたマンガの本を、「ここ面白いから見てもよ。」

とぶつきらぼくに開いて見せた。

しおりも何気なさを装いながら、

「どこ？」

と、彼の指が指し示すページを覗き込んだ。

そして二人は、覗き込んでいるお互いの顔が

、体温を感じられる程の距離に近付いてしまった事に気付くと、慌てて離れたのだった。

しおりは、あの時の熱い教室の空気を思い出していた。

沢山の哀しみを焼き付けてきたその目を見開いたまま、ジョージの顔が近づいてきた。

しおりの耳に、遠くの方で乾燥機が回っている音が聞こえてきた。

いつだったかも同じ音が聞こえていた様な気がする・・・

ゆつくりと、乾いた空気の中に光る埃が舞っているのが見える。

しおりは動けなかった。言葉を発する事すら出来ない。

ジョージの吐息が近づいてきた・・・

しおりはゆつくりと目を閉じた・・・

その時だった。

「しおりさんは、お化粧が剥けても素敵ですね。」  
ふいにジョージの声が聞こえて来た。

ハッと我に帰ったしおりの目に、ニコニコと笑っているジョージの顔が写った。

「バ、バカ！」

しおりは自分の勘違いに、目の眩むような恥ずかしさを覚えながら叫んだ。

顔がみるみる紅くなっていく。

「もう！バカバカ！最低！大体、剥けてもって！バカ！バカ！バカジョージ！！」

そう叫ぶと、両手で顔を覆ってひざの間につ伏した。

「いや、でも、僕の周りに素敵な人ってしおりさんしか浮かばなくて。でも、やっとまたジョージって呼んでくれましたね。ちよっ

と嬉しいな。」

ハツと口を押さえて顔を上げたしおりに、

「あの、出来たらバカじゃなくて、バカチンって言って貰えますか？僕、よくそうやって、母親に叱られてたんです。」

ジョージは遠くを見る目でそう言った。

しおりは、今度はきりりとまなじりを上げて叫んだ。

「私はあなたのお母さんじゃありません！大体私をいくつだと思ってるの！」

「三十才」

今更何を聞くのかといった顔でジョージが即答した。

「もううー！バカチン！！」

しおりはうつかり叫んでいた。

「やったー！！」

その無邪気な笑顔を見てみると、怒る気も恥ずかしさも消えてしまい、思わずしおりも噴き出していた・・・

「じゃ、気をつけて帰って下さいね。」

「有り難う。」

今朝来る時に車を止めた、MAXの駅の駐車場までジョージに車で送ってもらったしおりは、降りながら改めて中を覗き込むと、

「たまには掃除しなさい、ジョージ。」

と、子供を叱る母親の様な顔で言った。

「そうやって叱られるのなら、ずっと掃除しないでいようかな。」

ジョージは嬉しそうに笑うと、

「そうだ、しおりさん、こっちの曲って聴きますか？」

と、聞いてきた。

「アメリカの曲？たまには聴くけど・・・」

「これあげます。僕の一番好きな曲なんです。いつか聴いてください。」

そう言って、一枚のCDをしおりに渡した。

「有難う。今度聞いてみる。」

しおりは受け取ると、一瞬見つめ合った目を逸らした。

「又、メールしてもいいですか？」

「はい。」

しおりは、もう一度視線を合わせて答えた。

「今日は有難う。わざわざ送ってもらって。それと・・・色々と・・・ごめんね。」

そう言うとき、くるっとさびすを返し、車を止めている所へと歩き出した。

途中一度振り返って見たが、もうそこにはジョージの車は無かった。

しおりは、帰りの車の中で、一体今日一日でどれだけの涙を流したのだろうかと思った。

バックミラーで顔を見てみると、化粧は剥げ落ち、目も腫れている。全くボロボロで見られたものではない。

しかし、もしもあの時ジョージがキスをしてきていたらどうしていただろう。

きつと、自分は受け止めていたに違いない・・・

動けなかったというよりも、動きたくなかったのではないか。

ジョージはあんな事を言ったが、近づいてきたジョージの目にははつきりとした、ある意思を感じていた。

しおりは、ジョージに惹かれてしまっている自分が、この先どうするべきなのかの答えも見つからないまま車を走らせた・・・

ジョージはケニーの所に来ていた。

「ヘイ、ボーイ、なんだ最近、あちこちで違う女と会ってるんだってな。気をつける、誰が見ているか分からんからな。」

ケニーはそう言うのにやりと笑った。

「いえ、みんなただの友達です。ケニーさんだって知ってる子達ですよ。」

ジョージはクレープを一口食べて上を向いたかと思うと、すぐに肩を落とした。

「ケニーさん、僕、今日初めてある人にキスをしたって、本気で思いました。出来なかったけど・・・」

「ほう、そうか・・・」

ケニーには、その相手がしおりである事はもちろん分かっていた。「ボーイ、美しく咲いてる花つてのはな、今、根を張っている大地と、茎にくっついてる葉っぱがあつてこそ、美しさを保っている訳だ。それを全てとっばらうちまったら、今の美しさをキープ出来るとは限らんぞ。それでもな、その花を手に入れたかったら、まずそれを受け止める事の出来る大地に、男にならんとな。それも分かんらんで、花をもぎ取ってみい。結局は枯らしてしまうだけだぞ。」

「・・・分かってます。」

くっついてる葉っぱは優花ちゃん、大地は旦那さんか・・・

ジョージは自分がどうしたいのか、どうすべきなのか全く分からなかった。生まれて初めて芽生えた、誰かを好きだという感情。それをどうコントロールしていいのかが分からない。しかし、今の自分には大地として誰かを受け止めるだけの器が無いと言う事だけは分かっていた。

ケニーは一人で思い悩むジョージを見ると、

「もうボーイとも呼べなくなってきたな・・・」  
と、小さく笑った。

第五章：確かなる繋がり 第六章：星の向こうに 第七章：エピソード

第五章：確かなる繋がり

「帰国の辞令が降りた。日本に帰るぞ。」

その日の夜、食卓に付くと久しぶりに上機嫌な憲二は、いきなりそう切り出した。

「え？帰国？」

しおりは急な言葉に、戸惑いを隠しきれなかった。

「なんだ、嬉しくなさそうだな。嫌なのか？」

「いえ、あんまり急だったから・・・」

「駐在なんて、帰る時はそんなもんだらう。」

「それで、いつ？」

「一ヶ月後だ。」

「い、一ヶ月・・・」

しおりは息を呑んだ。

「ねえねえ、パパ。優花たち日本に行くの？」

嬉しそうに優花が憲二に聞いた。

毎年、夏に憲二の実家へ帰省する度、いまだ健在である憲二の両親から、好きな物を買ってもらっている優花は、日本が大好きだった。

「そつだ、日本に帰るんだぞ！」

「やった〜！」

優花は無邪気にはしゃぎ回っている。

とつとつ帰国か・・・

いつかは必ずこの日が来る事は分かっていた。それに、出来れば優花が小学校低学年の内に帰国出来ればとも考えていた。それを考

えると、アメリカの小学校に入る前である今は、タイピングも申しぶんないはずである。

しかし、心のどこかにこれで終わりか、という寂しい思いがある。それはしおり自身このポートランドが好きになっていたのと、やはりジョージの存在があった。

しおりはふと思った。

もし、逆にこの地にとどまる事になったとしたならば、ジョージとの関係はどうなっていくのだろう・・・

上機嫌の優花と、酔いの回った憲二が二階のそれぞれの部屋で眠りにつくと、しおりはジョージが渡してくれたCDをデッキに入れた。

リビングのコーナーに置いてある、フロアスタンドだけが灯る薄暗い静かな空間に、切ないギターの音色が流れ始めた。

記憶のひだに沁み込んでいくその音色は、優しく大切な笑顔を引き出してくる。そして、そのギターの後には、男の声が続いた。

なんと言う切ない歌声なのだろう。

ギターの音色に見事に調和した、男性としてはハイトーンなその歌声は、甘く、切なく、そして静かなる狂おしさで、あたかも砂に落ちた雨粒の如く、しおりの心に音も無く沁み込んで行った。

いつの間にか、ジョージと初めて言葉を交わした時の事を思い出していた。

「今、片付けますね。」

そんなジョージの一言から始まった様な気がする。

それからたった二カ月余りの間に、どれだけの涙を流した事だろう。

優花の事件・・・

ケニーに聞かされたジョージの過去・・・  
ジョージ自身が語った妹に対する思い・・・  
思い起こしていたしおりの脳裏に、ジョージが寂しく笑う時の口  
元や、楽しそうに笑っている時の目じりの皺などが、甘い男の歌声  
とともに浮かび上がってきた。

帰国か・・・

これで良かったのかもしれない。

ジョージに出会ってしまった事が、良かったのか、そうでなかったのかは分からない。

気持ちの上だけでも恋心を抱いてしまった事を考えると、人妻という立場を考えれば、出会わなかった方が本当は良かったのだろう。しかし、あれほど強く、悲しく生きてきた人間をしおりは知らない。その彼の人生に触れる事が出来ただけでも幸せだった。これで日本に帰国してしまえば、メールは続けられても、会えるチャンスはほぼ無いであろう。

これでさよならか・・・

切なさが、曲と共に心に沁みってくる。

しおりはパソコンをつけると、メールを打ち始めた。

件名：帰国する事になりました。

突然ですが、帰国が決まりました。一カ月後には日本です。いつか帰らなければいけない事は分かってはいましたが、いざとなると本当に寂しいものですね。ジョージと知り合えて本当にとっても楽しかった・・・

それよりも、今日は色々とごめんなさい。あなたの事をなにも知ら

ないでひどい事を言った事、今でもとても後悔しています。なんて自分が次元の低い人間なのかを思い知らされて、とても落ち込みました。それに比べてジョージは強い人なのですね。私だったらそんなに強くは生きられないだろうなあ・・・今でも今日知った事を思い浮かべただけで、泣けてきます。

ああ、ケニーさんのクレープも忘れられないなあ・・・何だろう・・・今は日本への帰国を楽しみに思うより、ポートランドを離れる事の方がよりつらい事に驚いています。あまりに急に帰国の事を聞かされて、少し文章が支離滅裂ですが、とにかくなんだか寂しいのです。

あの曲聴きました。素敵な曲ですね。とても心に沁みました。よかったら誰が歌っているのか教えて下さい。

しおり

二階で憲二がトイレを使う音を聞くと、しおりは送信をして、すぐにパソコンをオフにした。

件名：シヨックです・・・

参りました。シヨックです・・・でも、そうですね。ご主人の会社から帰れと言われれば帰るしかないですものね・・・

僕ね、しおりさんと出会えて物凄く幸せでした。自分自身も大分変われたと思っています。

僕は全然強い人間じゃないんです。皆に迷惑ばかりかけて、助けてもらって。でも、笑わないで下さいね。こんな事を考えちゃいけないのかも知れないけれど、一度でいいから一緒にどこかに旅行を試してみたかった。変な事を考えている訳ではないんです。ただ、しおりさんと二人で、素敵な景色を見てみたかったです。多分、その景色の色、音、香り・・・感動出来る所が同じだという自信があるんです。変な自信ですけど・・・そんな事を結婚している人を相

手に考える事自体がいけないのかもしれない。けど、今までそんな事を思える人がいなかったから・・・でもそう思える様になっただけでもちよつとは進歩したのかな。しおりさんのお陰ですね。ああ、なんだか今日は久しぶりに飲みたい気分です。でも、まだ後一ヶ月あるんですよ。出来たら来て欲しいな、ラテを飲み。そして一緒にクレープ食べましょう。

あ、あの曲ですが、アーン・ネービルって言う人が歌う、“クレイジーラヴ”って曲です。

僕は必ず一日に一回はこの曲を聴くようにしています。大好きなんです。日本でもこの曲をどこかで聴いたら、僕の事を思い出してください。

とりあえず、店で待っています。

### ジョージ

しおりは次の朝、いつもの様に優花を見送った後パソコンを開くと、ジョージの返信メールを読んだ。そして、読み終わるとすぐ、車のキーを手にしていた。

トレパツオンに着くと、店員達が口々に

「久しぶりだね！」

と声をかけてくる。

しかし肝心のジョージの姿が見当たらなかった。仕方がなくしおりは、ラテを片手にいつものテーブルを見ると本が置いてある。がっかりして他を探そうとしていると、すぐ後ろから、

「今片付けますね。お客様。」

と声がした。

「ジョージ・・・！」

すぐ横にジョージが立っていた。

しおりは恥ずかしかった。これではメールを見て飛んで来たと思われるに違いない。

「あの、こつち方面に用事があつたから・・・それで・・・」  
言い訳がましいしおりに、

「よかつた。一日でも多く会いたかつたんです。あと、一ヶ月しかないんだし。」

ジョージはそう言って座らせると、

「ちよつと待っていてくださいね。少しは仕事をしないと。」

と言って、カウンターの後ろに入っていった。

他の店員とハイタッチを交わしている。

すると他の女性の店員が側に来て、軽く睨みながら言った。

「この席、これから一ヶ月間、自分が仕事の日はあなたの為に取っておくんだって。」

よくよく気を付けて見ていると、女性の店員達の視線が鋭くしおりに向けられている。

しおりは小さくなつてジョージが戻つて来るのを待った。

ジョージが休憩の時間になり戻つて来ると、二人でケニーの所へと向かつた。

しおりの話を聞くと、

「そうか、帰るのか・・・バラの町ポートランドから一番素敵なバラが無くなつちまうな・・・寂しいもんだ・・・」

ケニーは、寂しそうに肩を落とした。

「いつか必ず遊びに来ますね。それに後一ヶ月、出来るだけ食べに来ます。」

しおりは、目の縁に浮かんできた涙を人差し指で拭った。

「あの・・・しおりさん・・・」

クレープを食べながらジョージがおずおずと聞いてきた。

「あの、これから毎日メールしていいですか？いや、別に返事はいらないんです。読んでもらえればそれで・・・」

「どうしようかなあ・・・ジョージのメールは長いからなあ・・・」  
ととぼけると、

「いや、絶対に短いメールにします。しますから・・・」

と両手を合わせるのを見て、  
「ふふふ、冗談。メールくださいね。」  
としおりは笑った。

ふざけあう二人を見ながら、ケニーはもつと早くに会っていれば、と思わずにはいられなかった。しおりと出会わなければ、ジョージはここまで立ち直れただろうか。

ケニーは、カウンターの後ろの小さなイスに腰掛けると、一つため息をついた。

それからジョージのメールは毎日届いた。

しおりはそれを、優花を見送った後の午前中に読んで返事を出し、二日に一度はジョージとケニーの所へと出掛けていった。

そして一週間が経ったある日、佐和子から電話があった。

「あのね、今度の金曜日、優花ちゃんうちにお泊りできないかなあ？って言うのはね、ほらもうすぐしおりさんとこも帰っちゃうでしょ？うちの奈々が寂しがっちゃってさ。どうせなら奈々の誕生日も近いし、お泊り誕生日パーティーでもしようかと思ってるの。他に仲の良い子を何人か呼んで。だからさあ、是非優花ちゃん来てくれないかなあ。」

「それは絶対に優花も喜ぶわ。だって奈々ちゃんが一番仲よしだったし。この間も会えなくなるのが嫌だって泣いてたのよ。だからこちらからお願いたいくらい。」

「じゃあ、六時頃来られるかな？そうだ、しおりさんも一緒に夕ご飯食べていたら？憲二さん今出張でいないって言ってたじゃない。」

「私、金曜日は、七時頃に実家から電話が来る事になってるの・・・」

「そう、でもどうせ、日曜日に憲二さんも入れてお別れ会をするから、大人はその時でいいわね。」

「うん、そうね。でも有難う。それじゃ、優花を六時頃に連れて行

きます。」

電話を切ったしおりは、ジョージにメールを打ち始めた。

件名：お泊り

今度の金曜日、優花がお友達のお誕生日会と優花のお別れ会を兼ねて、そのお友達の所にお泊まりに行く事になりました。優花も日本に帰る事は楽しみでも、お友達とお別れは寂しがつているので、今度のお泊り会はきつと喜ぶんじゃないかなって思っています。

しおり

件名：夫婦水いらずですね。

じゃ、金曜日は夫婦水いらずですね。どこかに食事にも行くんですか？だんなさんがちょっと羨ましいです。ははは、それよりも、優花ちゃん、是非帰る前に一度会いたいなあ。

ジョージ

次の日の朝に返信メールを読んだしおりは、夫婦水いらずの時間を楽しむ事が、これから先あるのだろうかと思いつながら、メールを出した。

件名：残念ながら・・・

残念ながら、夫は出張中なので、一人寂しくおそばでも食べます。今日が行けそうなので、これからそっちに行きますね。

しおり

メールを送ると急いで支度をして家を出た。

トレパツオーンに着くと、入ってくるしおりに合わせた様に、ジョージがラテをいつものテーブルに置いて、座って待っていた。

「有難う。あれ？もう休憩なの・」

ジョージはそれには答えず、神妙な顔をして口を開いた。

「しおりさん。あの、今度の金曜日の夜、僕とご飯を食べてもらえませんか？」

「え？」

「しおりさん、一人だってメールで読んだから・・・絶対にばれない様に注意しますから。」

そしてその後一杯だけ付き合ってください！帰りは僕の知り合いのタクシードライバーにちゃんと送らせませう。行く時は僕が迎えに行きます。駄目ですか？」

しおりは、真剣な顔をしたジョージの矢継ぎ早な質問にたじろぎながらも、その内容を考えるとさすがに躊躇した。

「何かあったら、全部僕が責任を取りますから。」

と言うジョージの言葉に、何かあった時の責任など取れるはずがないではないか、と可笑しく思いながら、

「あら、じゃあ主人にばれて離婚でもされたらどうするの？」

と、少しおどけて言った。

「そしたら僕がもらいます。こんな僕でよければ。」

しおりはジョージの目の力に狼狽しながら、

「バ、バカね！冗談よ。大体もらうなんて私は物じゃありません。」

そう答えたものの、情けない事に顔が紅潮している。

「すみません。」

ジョージは頭を掻きながら、

「で、だめですか？」

とさらに聞いてきた。

しおりは、

「考えてから、メールします。」

とだけ答えた。

その後二人でケニーの所に行ってクレープを食べた。二十分ほどして、しおりが帰る時間となりイスから立ち上がると、ジョージが真面目な顔で、

「前向きなお返事をお待ちしています。」  
としおりに言ってきた。

しおりはクスクス笑うと、  
「やっぱり、ジョージの日本語は時々変ね。  
とにかくメールします。」

とジョージに告げた。  
そして、

「又来ますね。」  
とケニーに挨拶をして、ジョージに手を振ると、通りの角に止めてある自分の車へと向かった。

しおりの答えは始めから決まっていた。

ただあの場ですぐ承諾をするというのは、主婦という立場上、躊躇われただけだった。

その夜、優花を寝かしつけるとメールを出した。

件名：お願いします。

お食事の件オーケーです。ただ家を出るのが七時半くらいになつてしまうので、あまり時間は取れませんが・・・それと、あまり人目につくレストランなどは、少し行きにくいのです。よろしいでしょうか？

しおり

返事はすぐに届いた。

しおりは、ジョージがパソコンの前にかじりついていた姿を想像

すると、微笑みながらメールを開いた。

RE：お願いします。

もちろんです！有難う御座います！

行こうと思っている所は、レストランとかそんなオシャレな所ではなくて、小さなピザ屋です。そこで日本人のお客さんあまり見かけた事ないし、友達に頼んで一番奥の席を確保します。では、金曜日七時半頃迎えに行きますね！

ジョージ

しおりは二階に上がり、優花がちゃんと寝ているのを確認すると返事を出した。

件名：お迎え

ではよろしくお願いします。私はマレー・ブルバードから、家の方に曲がる所の角まで出ています。ピザですか。大好きです。楽しみにしていますね。

しおり

しおりは送信ボタンを押すと、すやすやと寝息を立てている、優花の隣で横になった。

そして金曜日になった。

しおりは六時に優花を佐和子の家に届けると、

「じゃ、優花、いい子にしているのよ。ちゃんと出来るかな？」

と声をかけた。

「うん！大丈夫だよ！」

と返事をする優花の頭を撫でると、佐和子の方に向き直り、

「じゃあ、よろしく願いします。何かあったら携帯に電話を下さ  
い。」

と頭を下げて、車の方へと向かった。

車に乗り込むと、しおりはドキドキしてきた。いけないことをしているという自覚はあるのだが、今更後戻りも出来ない。ただ友人と食事をするだけの事だ、と自分自信に言い聞かせると、車を出した。

七時きっかりに、日本の実家の母親から電話があると、現在の近況を話し、帰国したらすぐ会いに行く旨を伝えて電話を切った。七時十五分だった。

しおりは、二階の自分達の寝室にあるバスルームへと駆け込んだ。メインのバスルームは、壁が白い為かライトをつけると、必要以上に明るくなるのが嫌いだった。その明るさは、憎たらしいほど光明に衰えてきた肌を映し出す。

「でも、レストランだったらこんなに明るい事も無いから、少しくらい誤魔化せるか・・・」

と諦め、バタバタと階段を下りると、携帯を持って外へ出た。

夏時間になってからは、六月でも天気の良い今日の様な日は、八時くらいまで日が昇っている。慌ててしおりは家の中へと戻ると、縁の広い帽子とサングラスで顔を隠して、改めて外へ出た。

待ち合わせの場所まで、歩道を隠れる様に歩いていると、キンという金属音が足元で響いた。

拾い上げてみると大きな１ドルコインだった。直径が四センチほどもあるう、１９７７年製造のその古い１ドルコインは、ずっしりとした重さをしおりの手の平に感じさせながら、手垢に汚れた鈍い銀色の光りを放っている。

しおりは今まで１ドルコインを見たことが無かった。たかが古いコインとはいえ、なかなかの存在感がある。周りを見渡すと落とし主らしき人影は無い。どうしようかと思いつながら、ふと時計をみると七時二十分になっている。しおりはそのコインをバッグにいれる

と、待ち合わせ場所へと急いだ。

家の前の道を少し南へ行き、ハートと言う道の角を曲がり東の方へ行くと、マレー・ブルバードと言う大きな道に出る。その大きな道に出た角の所でジョージはすでに待っていた。

しおりを見たジョージは目を丸くした。

「し、しおりさん、どうしたんですか？そんなに帽子を深く被ってサングラスまで・・・」

「誰かに見られたら誤解されるかと思って。」

「よっぽど、そっちの方が人目を引きますよ。」

ジョージは笑いながら、黒いトランザムの助手席のドアを開けると、しおりが乗り込むのを確認してから、ドスンと重たそうなドアを閉めた。

「笑ったわね・・・」

睨みながら帽子とサングラスを外したしおりを見て、

「でも、しおりさん本当に素敵です。その服もとても素敵です。」

とジョージは感動した面持ちでそう言った。

しおりは今日、いつものジーンズではなく、白いＴシャツにオフホワイトの麻のジャンパースカートを着ていた。いつもと少しだけ気分を変えてみたかったのだ。

しかし、あれだけ美しい女性達に囲まれているジョージから見れば、しおりなど取るに足らない存在だと思えるのに、大真面目な顔で褒めてくれる。

その言葉に、

「有難う・・・」

と、小さくなりながら答えた。

ジョージの運転は、しおりに安堵感を与えた。

車の運転ほどその本人の隠れた性格を晒し出すものは無い。同乗者が運転技術を持っていれば、尚更隠しきれるものではない。そしてそのジョージの運転は、しおりを十分満足させるものであった。

ブレーキを踏むタイミングなども、決して助手席のしおりの足先がきゅつと縮まる事も無い。違う状況であったならば、うとうとしていたかもしれないほどの安心感を覚える。

そんな事を考えている内に、車はノース・ウエスト地区のトウエンティースードに入って行った。

運良く、ジョージの車が通りかかる所で一台の車が出て行き、その空いたスペースに慣れた手つきで車を止めた。

「ちょっと待っていてください。」

ジョージは言うつと、先に降りて助手席の方へ回り、車のドアを開けた。

その一連の動きがあまりにもスムーズで、いつものジョージではなく、年上の紳士に見えてしまい、しおりは戸惑った。

ジョージは、しおりが降りるのを確認してからドアを閉めると、目の前の店を指した。

「ここです。」

なんとそこはトレパツォンからたった4ブロック先の小さな店だった。

入り口が小さい為、これまでここが一軒の店だという事に気付かなかったのだ。

「どうぞ」

ドアを開けてくれたジョージの脇を通って店に入ると、やたらと狭い店内が目に入った。

入ってすぐ左側にガラスの衝立があり、そこに三種類のピザが作り置きしてある。そのすぐ右側に隠れる様に古めかしいオーブンが置いてあり、更にその横がレジになっている。反対側の、入って右手はすぐ壁で、どこの町なのか分からない、古い写真がべたべたと貼ってあった。その壁に沿ってカウンターが設置してある。かなり狭い造りだ。テーブルは見た所、入り口脇の所に一つだけしか見当たらない。

しおりの後にジョージが入って行くと、

「ヘイ！ジョージ！」

「ヨウ！久しぶり！」

と店員達が声をかけてくる。

「しおりさん奥で待っていてもいいですよ。」

「奥？」

「そう奥があるんです。」

しかししおりは、食べ物に関しては何にでも興味をそそられる性格だった。

「でも、ちょっとだけ見てみたいの。」

そう言つと、前の客がオーダーする様子を見つめた。

客が欲しいピザの種類と枚数を言つと、それを大き目のスパチュラですくつて、オーブンの中に放り込む。

要は作り置きピザを温め直して提供するだけの事で、格別目を引く様な事は何も無い。少しだけ残念に感じたが、そんな贅沢を言っている立場ではない。

「しおりさん、何にします？」

「じゃあ、私はペパロニ。」

「じゃあ、僕はチーズで始めるかな。」

ジョージがオーダーを伝えると、

「オーケー！」

と言つて、太ったいかつい顔の店員が二枚のピザをオーブンに放り込んだ。

ジョージが代金を払い、釣銭に加えて1ドル札を、レジの脇にあるチップ入れのビンにねじ込んだ。

「ハイヨ！」

先ほどのいかつい顔の店員が、何の変哲も無い薄い紙皿に乗せたピザを渡してくれた。

それを手に取ったジョージは、

「さ、こっちです。」

と言つて、細長い店内をそのまま真っ直ぐに奥へと進んでいった。

すると、気付かなかつたが突き当たって左側に小さなスペースがあり、そこに小さなテーブルが一つ置いてある。そこに店員の一人が座って雑誌を読んでいた。

「ヘイ、ジョージ遅かったな。」

その店員は顔を上げると、しおりを見て

「ビュー」

と口笛を吹いた。

「なるほど、お前も変わったな・・・」

イスから立ち上がりジョージの肩を叩くと、しおりにウィンクをして、店内に戻って行った。

「サンクス」

その店員の背中に声をかけたジョージは、

「あ、どうぞ。ここ取っというてもらったんです。」

と言つてイスを引いた。

「有難う」

「さ、冷めない内に食べましょう!」

そう言いながら、もう口を開いている。

しおりは食べ様としたが、ピザは大きくてとても薄く、持ち上げるとペロリと三角の部分が垂れ下がってしまったって、うまく食べる事が出来ない。

それを見ていたジョージは、

「こつやって食べるんです」

そう言うと、ピザの乗っている紙皿を軽く二つに折ってしおりに差し出した。

「この皿ごと口に持って行って、少しずつピザをずらしていくんです。それか、この先端の三角の所を中に少し折り込んで、ピザ自体を半分に折って食べるんです。」

「面白そう。やって見よう!」

しおりは先端の三角の部分を折り込むやり方で食べてみる事にしました。なるほど食べやすい。

そして一口食べた。

「美味しい！」

しおりは思わず、目の前のピザを見つめ直した。見た目は何の変哲も無いピザだが、生地がとても薄い。

そのピザをただオーブンに入れただけなのだが、薄い生地の裏はパリットとしていて、なんとも言えない香ばしい香りが漂っている。使っているトマトソースも、他の店のそれと比べると、にんにくが利いていて風味がとても良い。そしてその全体のバランスがいいのか、口に入れた時に、鼻から抜ける香りがとても素晴らしかった。

しおりはあっけに取られているジョージの前で、瞬く間に一枚を平らげてしまった。目を上げるとジョージが目を丸くして見ている。恥かしさに小さくなっていると、

「ははは！やっぱりしおりさんって素敵です。美味しい物を美味しく食べる事の出来る人って、最高ですよ。よし！僕も追いつこう！」

ジョージはそう言うと、自分のチーズピザにむしゃぶりついた。

「さ、第二段行きましょう！」

一枚目を食べ終わると、しおりの手を取って立ち上がった。

結局二人は、一人三種類ずつ三枚のピザを食べた。

「ああ、お腹一杯・・・」

とため息をつくしおりに、

「本当によく食べますね。それでなんでそんなにスタイルが良いんだろう？」

とジョージは感嘆の眼差しを向けた。

「なんだか、がっかつ食べちゃって恥ずかしい・・・でも、本当に美味しかった。」

「本当はオシヤレなレストランでもって思ったんですけど・・・」「うっん、とても素敵だった。知らないだけで、美味しい所ってたくさんあったのね・・・もっと早く知っておけば良かった。」

「あの、もう一軒だけいいですか・・・？」

ジョージがおずおずと聞いてきた。

「後三十分くらいなら・・・」

時計を見ると、しおりは答えた。

実際は、憲二もいないし優花も泊まりに行っていないので、帰りは何時でも構わないのだが、気持ちの中にやはり躊躇する部分がある。本当の事を言えば、何時間でもこうして話をしていたかった。

むろん、常識で考えればとても許される事ではないだろう。外出を控えるようにと言われているというのに、ここでこんな事をしている所を誰かに見られて、更に憲二に知れたならば、何を言われるか分ったものではない。

しかし、人の心と言う物は自分で思うほど強くはない。様々な接着剤で繋がりがあっているだけの世界で、より強い繋がりを持ち始めている方へと心が傾くのは仕方の無い事だ。もちろん憲二の間には、優花と言う何事にも勝る強固な接着剤がある。しかし、一人の男として比べてしまうと・・・

しおりはそれ以上考えるのが恐くなった。

「じゃ、すぐそこなんです。」

店を出ると、ジョージはしおりを車に乗せた。

車は右へ曲がると、そのまま東へ向かい、パール・ディストリクトと呼ばれるエリアへと入って行った。

少し前までは倉庫街だった所に、今はオシャレなレストランやギャラリーが立ち並び、注目のスポットだ。

その中の、一軒のバーの前に車を止めた。

「ここです」

かなり目立つ通りの角にあるその店は、沢山の客で賑わっている。こんな所では目立ってしまうのではないかと不安に思っていると、

「こっちです。」

と言いながら、しおりの手を引いて、足早に店内の端の方にある階段を降りていった。

狭い階段を降りると、そこにビリヤードの台がどんとフロアの中央に設置してある小さなバーが現れた。狭い店内を見渡してみると、

自分達を除いた客の全てがアメリカ人だ。

「ここなら、知り合いの日本人に会う事も無いでしょう。」  
とジョージが笑った。

確かにここなら誰にも会う事は無いだろう、  
そう思いながらジョージに連れられるまま、隅の方の席に二人で座った。

「何を飲みます？」

「私はよく分からないから・・・」

「じゃ、僕が適当に頼んできます。」

ジョージが立ち上がって、バーカウンターの方へと近づくと、嬌声が起こった。

「ジョージ！どうしたの！？」

「へい！ジョージ！久しぶりじゃないか！」

あちこちでジョージはハグを交わしている。

女性達はほぼ強制的にジョージを抱き寄せている。

しおりはつくづくジョージと言う男は、沢山の人に愛されているのだと感じた。しかし当然の結果、ジョージが席に戻ると、それらの視線が一気にしおりに刺さってくる。両手にカクテルを持って戻ってきたジョージに、

「あなたの知り合いだらけじゃないの。」

と恨めしそうな顔のしおりに、

「大丈夫です。余計なことを言う連中ではないですから。ここで誰が誰と会ってたなんて事は、バーの外に出たら皆不思議なほど忘れるんです。礼儀ですね、酔っ払いの。じゃ、乾杯！」

そう言って、ジョージはしおりに渡したグラスと自分のグラスをカチンと合わせた。そして二人とも同時に一口飲むと、

「旨い！」

「美味しい！」

と声を上げた。

「本当に久しぶりだ・・・」

ジョージは上を向きながら呟いた。

しおりは、上を向いたまま一言もしゃべらないジョージを見ながら、この人はこの一杯をどれだけ待ち望んでいたのだろうかと思っただ。そしてその場に自分がいる事が、少しだけ誇らしくもあった。

何気なくその横顔を見詰めていたしおりの目が、ふいに視線を合わせてきたジョージの目と重なり合った。しおりは慌てながら、話題を探そうと自分の飲んでいるカクテルの名前を尋ねた。

「あれ？ええつとなんて言っただけ彼女？しおりさんのイメージでっ頼んだんだけど・・・ああ、そうだ。この紙にカクテルの名前を書いてくって言ってたな。」

ジョージはグラスを乗せているナプキンを取ると、開いて見せた。二人で覗き込むと、

“セックスオンザビーチ”

と書いてある。

「セ、セックス・・・？」

「あーいや、全く知らなかったんです！いや、参ったなあ。なんてカクテル作ったんだろ、彼女ったら・・・！」

しおりは軽く睨んだが、ジョージの慌てぶりが可笑しくて思わず噴き出した。多分、バーテンダーの女性がジョージをからかったのだろう。

「ジョージは何を飲んでいるの？」

「僕は、タンカレー・トニックです。タンカレーって言うジンで作ったジントニックです。」

「美味しいの？」

「僕はそのビンが好きなんです。緑色で可愛くって。」

「味とは関係ないじゃないの。」

と、しおりは笑った。

「そうですね、僕、味音痴だし。」

そう言って、ジョージも笑った。

それからジョージは色々な話を聞かせてくれた。様々な客の話や、

自分の失敗談など、飽きる事の無いジョージの話は、軽く酔いの回ってきたしおりに、時間の経つのを忘れさせてくれた。

しおりは笑いながら、水滴のついたグラスを傾けてカクテルを一口飲むと、濡れた手を拭く為にハンカチを取り出そうと、持っていたバッグに手を差し込んだ。

その時、指先に硬い物が触れた。取り出してみると、あの時の1ドルコインだった。

「ああ、あの時拾った・・・」

「ちよつと見せてもらってもいいですか？」

ジョージはコインを手を取った。

「久しぶりに見たなあ。こうやって見ると本当に大きいですね。昔の人はどうやって財布に入れてたんだろう。重くて仕方が無いですよね。」

ジョージはひっくり返してみながら、

「昔、僕が小学生の頃、父が良くアメリカの西部劇を見ていたんです。その映画の中にジュリアーノ・ジエンマって俳優さんの“荒野の1ドル銀貨”って言うのがあったんですよ。

かつこ良かったなあ。こうね、撃ち合いをするんですが、胸のポケットに入れた銀貨に相手の弾が当たってジエンマは助かるんです。

そして逆に相手を倒すって言う映画だったんです。単純だったけど、面白かったなあ。」

そう言つて遠い目をした。

「へえ・・・」

しおりは返されたコインを見つめると、

「これ、あげる」

と言つてジョージの胸のポケットに入れた。

「やった！」

喜んだジョージだったが、ポケットを押さえると急に寂しそうな表情になった。

「あ、嫌な事思い出させちゃったかしら・・・」

「いえ、違つんです。しおりさんから何かもらえるのは、これが最初で最後なのかと思つたら、ちよつと寂しくて・・・」  
そう言つて目を落とした。

しおりには言わなければならぬ事があつた。

「あの・・・ひよつとしたら、本当に今日が最後かもしれないの。会えるのは・・・」

「え？どうして・・・？」

ジョージはショックを隠しきれなかつた。

「明後日家を出て、帰国までホテルに入る事になつたの。家族で。車も一台になつちゃうし、多分来られないかもしれない・・・」

「そうかあ・・・とうとうこの日が来たのか・・・」

ジョージは、しばらく黙つて上を向いていた。

「日本に帰つても連絡するわ。だからジョージもメールしてね。」

悲しげに上を向いているジョージにそう言つと、しおりはグラスを傾けた。

しおりはいつの間にか二杯目のカクテルを飲み干していた。少し酔いが回つてきたのか、こめかみの血管がトクン・トクンと波打っているのが分かる。

ジョージが、上に向けていた目をふいにしおりの方へと向けた。

しおりの視線とジョージの視線が寂しさを含んだまま絡み合つた。

しおりは視線を外せないでいた。

この悲しさに満ちた瞳・・・

もう一週間もすれば、見られなくなつてしまふ。

寂しさがしおりの身を包み始めた。

そのまま、どのくらい見詰め合つていたのだろう。

ジョージがゆっくりとグラスに手を伸ばした。それにつられるようにしおりも自分のグラスに手を伸ばした。隣り合つていたグラスに伸ばされた二人の指が軽くぶつかった。

その瞬間、どちらかのグラスの氷がカランと湿つた音を立てた。

急にザワザワと周りの雑音が二人を包み込んだ。

我に返ったしおりは、自分の鼓動の激しさに驚いていた。目の前のジョージは、しおりとぶつかった自分の指を見つめている。

ふと時計を見ると九時を回っていた。

「か、帰らなきゃ……」

しおりが顔を伏せて言うと、

「そうですね……」

とジョージは一瞬視線を落としたがすぐ、

「タクシーを呼びますね。僕の知り合いだから心配は要りませんか  
ら。」

と言って、しおりを見て微笑んだ。

そして携帯を取り出すと、相手と何事かを話し、電話を切った。

「十分で来るそうです。」

そう言っただち上がった。

「ちょっと待っていてください。」

ジョージは、バーカウンターの方へ行くと、バーテンダーの女性達や数人の客とハグを交わして戻ってきた。

「さ、行きましょうか。」

来た時とは別のドアからジョージに付いて外へ出ると、店の横側の出口へと出た。いつの間にか外は薄暗くなっている。

「少し歩きましょうか。酔い覚ましに。」

ジョージの言葉にしおりは黙って頷くと、横に並んで歩いた。

「今日は本当に有難う御座いました。最後にいい思い出が出来ました。  
」

ジョージはしおりを見て寂しく笑った。

その横顔を見ていると、何故だか切ない思いが込み上げてくる。

「最後だなんて……また、いつか会えるわよ……」

その時、

「あ、あそこだ……」

と、ジョージは1ブロック先のタクシーを指差した。

「しおりさんとちょっとだけ一緒に歩きたくて、あそこで待っている様に頼んどいたんです。」

そう言って、いたずらっ子の様に微笑んだ。

黄色いタクシーの止まっている所までは、後五十メートルくらいだろうか。その短い距離を二人はゆっくりと歩いていった。

大きな杉の木が歩道にせり出すように生えている所まで来ると、タクシーはもう目の前だった。

「しおりさん、じゃあ、最後に・・・」

ジョージが両手を広げた。

しおりにとつてハグは、最後までなかなか慣れる事の出来なかったアメリカの習慣だったが、今はすんなりとその腕の中に入っていく事が出来た。軽い酔いのせいもあったのかも知れない。

思ったよりも厚いジョージの胸に頬をつけると、

「色々と有難う。私、ジョージの事忘れないわ・・・」

そう言って離れようとした。

その瞬間、ジョージは腕に力を込めて、しおりを抱き寄せた。

「ジョージ・・・？」

「しおりさん。あの・・・このままで聞いて下さい。顔を見ちゃうと言えなくなるから・・・」

しおりは動けなかった。

ジョージの鼓動が、抱きすくめられた胸を通して伝わってくる。

それに連動するようにしおりの鼓動も高まっていった。自分の付けてきた香水と、ジョージの身体から漂う石鹸の香りとが混じり合っていく。

ジョージの次の言葉を待つ耳の感覚だけが、敏感になっているのが分かった。

しおりは、ずっとこのままでいたい衝動に駆られた。少しのアルコールと、ほのかに立ち上る二人の香り。そして夏の粒子が混じり始めた六月のポートランドの静かな空気・・・

それらが軽い陶酔感をしおりにもたらししていたのかもしれない。

しおりは、次の言葉を聞いてしまうと、それが消えてしまう様な気がして恐かった。

「しおりさん・・・」

ジョージが口を開いた。

しおりは身体を強張らせた。

「しおりさん、僕はあなたが好きです。とても・・・」

ジョージの言葉が、胸に頬を当てたままのしおりの元へ、心臓を通して聞こえてくる。

口からではなく、胸から聞こえてくる言葉は、心の声となって直接しおりの脳裏に飛び込んできた。

しおりはどう答えていいのか分からなかった。身体が麻痺したかのように動かない。

「しおりさん・・・しおりさんのこれから先の、何十年も残された人生の中の、一分だけ、たった、たった一分だけでいいんです。僕にいただけませんか・・・？」

静かな声でそう言うと、ゆっくりと身体を離した。

俯いたままのしおりの両腕に添えられていたジョージの手が、しおりの両方の頬をやさしく挟み込んだ。

ジョージの手は少しだけ震えていた。

しおりはゆっくりと上を向いた。

たった一分だけだ・・・

心のどこかでそう呟きながら、しおりは目を閉じた。

二人の唇が重なった。

二人に覆いかぶさる様に伸びている木の枝を、風が通り抜けていく。

しかし、二人にその風の音は届かない。

しおりの脳裏には、ジョージが見たというアルゴンキン州立公園の、音の無い星の世界が、広がっていた。

約束の一分をとくに過ぎたと思えた頃、二人の唇がいったん離れた。ジョージは追いかける様にもう一度キスをした。

そして、離れた。

しおりの耳に風の音が戻ってきた。

「有難う・・・しおりさん・・・」

俯いたままのしおりを抱き寄せると、ジョージが呟いた。

しおりは無言のまま小さく頷いた。

ジョージはゆっくりと身体を離すと、一つ深呼吸をした。

「こっちです。」

優しくしおりの背中に手を当てると、歩き出した。

二人とも、一言も口を開かなかった。

優しい風が、二人の顔の火照りを覚ますように通り過ぎていく。

タクシーが目の前に現れた。

ジョージが、右手で窓をコンコンと叩く。

すると窓が開くと、中から苦虫を踏み潰した様な顔の、でっ

ぷりと太ったドライバーが眠たそうに、

「ヘイ、ジョージ。どれだけ待たせれば気が済むんだい？」

と、大きな身体に不釣り合いな短い両手を広げてぼやいた。

「悪かったな、ケビン。」

ジョージは助手席のドアをしおりの為に開けた。

アメリカでは、一人客の場合、後部座席よりも、助手席に乗せる

事が多い。

「お金はもう払ってあります。だから心配しないで下さい。」

目を伏せながら、乗り込むしおりを見つめると、

「今日の事は一生忘れません。」

と言って、また寂しく微笑んだ。

しおりは、伏せていた顔を上げ、眩しそうにジョージを見つめると小さく頷いた。

ジョージはドアを閉めると、ドライバーのケビンに目で合図を送った。

車はゆっくりと走りだした。

しおりは振り返らなかつた。振り返つて、いつまでも見送っているジョージを見てしまったら泣いてしまいかもしれない。それが恐かつた。

サイドミラーを見ると、小さく手を振るジョージの姿が写っていた。

タクシーは暗い住宅地を抜けて、そのままフリーウェイへと入っていった。

すると運転席のケビンが口を開いた。

「知っているかい？あいつの事を女達がなんて呼んでいるか？実はな、アイロン・ハートって呼ばれてるんだぜ、あいつ。分かるかい？アイロンって？メタルの事さ。金属の。分かる？あいつさ、いつもへらへらしてるだろう？でもな、誰もあいつのハートに近づいた女はいないんだよ。だから、あいつのハートはアイロンで出来ているって、皆が言ってるのさ。俺も、どんな熱い女がアイロン・ハートを溶かすのかって見てたんだが、なるほど、あんたとはねえ……なるほどなあ、熱だけじゃ溶けないアイロンもあるって事なんだなあ……おつと俺の英語分かつた？大丈夫かい？」

しおりは運転しているケビンに向かって微笑むと、  
「少しだけ……」  
と答えた。

家に着くと、しおりは冷蔵庫から水をグラスに注ぎ、それを持ってリビングのソファに腰を下ろした。

一口飲むと、改めて今日の事を思い浮かべてみた。自分が信じら

れなかった。経緯はどうであれ、自分は夫以外の男とキスをしたのだ。されたのではない、したのだ。

しおりは自分の唇に触れてみた。

ジョージの唇の感触は残ってはいない。

しかし何故だろう、頬に触れたジョージの手の平の熱さだけは、はつきりと思い出す事が出来た。

久しぶりに飲んだアルコールが抜けていないのか、いつまでも顔が火照っている。

しおりは立ち上がるとブラインドを開け、窓を開けた。夜の冷たい風が顔の火照りを冷ましていく。少しだけ風に当たると再び窓とブラインドを閉めて、リビングへと戻った。

しおりは唇を人差し指でなぞりながら、ソファアに座り込み、目を閉じて上を向いた。

かすかにタンカレー・トニックの香りがした様な気がした・・・

次の日の朝、四時頃しおりはソファアの上で目を覚ました。どうやら、そのまま眠ってしまったらしい。

化粧を落としシャワーを浴びると、バスローブのままキッチンへ行き、お茶を入れた。

リビングへと戻り、パソコンをつけてメールを開いてみると、ジョージからメールが届いていた。届いた時間を見ると、ほんの三十分ほど前だ。

件名：有難う御座いました。

昨日の夜は僕、眠れませんでした。謝った方がいいのか、お礼を言うべきなのか、自分でもよく分かりません。でも僕のした事は、世の中の人達からすれば許されない事なのでしょう。しおりさんにとっても申し訳ないと思っています。あ、結局謝ってるな。

でも、信じてもらえるかどうかは分かりませんが、自分から人にキ

スをしたのは生まれて初めてなんです。それがしおりさんでよかったです。本当にそう思っています。ありがとうございます。しおりさん。

ジョージ

しおりはキスの二文字を目にした時、改めて顔が熱くなった。ジョージにとつてのファーストキス・・・ぎこちなさと、少し震えていたジョージの手を思い出した。

しおりは小さく微笑むと、立ち上がってブラインドを開けた。東の空が少しだけ、うす桃色に染まり始めていた。

「本当にお邪魔しました。」

しおりは優花を迎えに佐和子の所に来ていた。

「ねえ、しおりさん。明日は大丈夫よね・律子さん所も来るしさ。」

「ええ、うちの主人も今夜帰ってきますから。」

明日はすみませんが、よろしくお願いします。」

「ホント？よかった！。じゃあ、明日楽しみにしてるわね。あ、最後なのに楽しみつても変ね。」

佐和子は笑った。

「ええ、じゃあ、明日伺います。」

しおりも笑って答えると、優花の手を引いて車へと戻った。

「さ、おうちへ帰ろうか。」

しかし、車に乗り込むと急に、

「ねえ、ママ。優花クレープが食べたい。」  
と言い出した。

しおりは、昨夜の事を思い出して少し躊躇したが、しおり自身、最後にケニーに会っておかなければならないとは思っていた。

「そうね、じゃ、最後に食べに行こうか！」

はしゃぐ優花を乗せて、ノース・ウエスト地区へと車を走らせた。

「おお！久しぶりだなあ、優花ちゃん！」

ケニーは満面の笑みを浮かべると、優花を抱きかかえた。

「ケニーさん、ひよっとしたら今日が最後になるかもしれません。」

明日から帰国までホテル住まいなんです。」

しおりは、抱き抱えられたままきゅきゅと喜ぶ優花を見ながら、残念そうにケニーに告げた。

「そうか・・・残念だな。せつかく知り合いになれたのに・・・」

そう言って肩を落としたケニーは、抱き抱えていた優花を降ろすと、

「よし！それじゃあ、今日は優花ちゃんとママにご馳走するか！何でも言ってくれ。じゃんじゃん作るぞ！」

と笑って、カウンターの中へと入って行った。

「優花はカスタードとイチゴ！」

「私はほうれん草とチーズ！」

「よし！任しとけ！最高のやつを作ってる！」

出来上がったクレープをほおばると、二人揃って、

「美味しい！」

と叫んだ。なんだか懐かしい香りがした。

「ね、おじいちゃん、あのジョージおじちゃんは？」

ふいに優花が聞いた。

ケニーと目が合ったしおりが、

「あのおじちゃんは忙しいんだって。」

と、優花に言うと、

「あゝあ、会いたかったなあ。」

と残念そうに下を向いた。

ケニーはそれを苦笑いして見ていたが、通りのずっと先の方に何かを見つけると、ニヤリと笑った。

「優花ちゃん、あっちの方を見てーらん」

と優花が向いて座っているのと、反対方向を指で指した。優花は振り返ると、大声で、

「ジョージおじちゃん!!」

と叫んで走り出した。

「あれ!?!どうしたの!?!優花ちゃんじゃない!会いたかったよ!優花ちゃん!」

ジョージは一瞬驚いていたが、すぐに笑顔を浮かべて優花を抱き寄せると、そのまま肩に乗せて歩いてきた。しおりは小さくなって下を向いていたが、その目の前にジョージの靴が見えると、仕方なく顔を上げた。

にっこり笑うジョージと目が会うと、昨夜の事が急に脳裏に甦ってきて、顔が紅くなる。

「あ、あの、昨日は・・・」

ジョージが眩しそうな目で、そう言いかけるのを目で制すと、「よかったね、優花。最後に会えて。」

とジョージの肩に乗っている優花に目をやった。

「やっぱりもう来られませんか・・・」

ジョージがしおりの方を向いて呟いた。

「本当は、今日も諦めていたんですけど、少しだけ時間が空いて・・・それで優花がどうしてもクレープを食べたいって言い出したものだから・・・」

連絡をせずに来た事を、言い分けする様にしおりは答えた。

それを聞いたジョージはふいに、

「そうだ、優花ちゃん。おじさんと一緒に写真撮ろうか?」

と言つて、優花を肩から降ろした。

「うん!」

はしゃいだ顔の優花がジョージの顔に自分の顔をくっつけると、ジョージは自分の携帯のカメラで二人の写真を撮った。

「あの、しおりさんも一緒にいいですか?」

おずおずとしおりの顔を見るジョージに、

「はい。」

としおりは答えると、ジョージの横に並んだ。

「どれ、わしが撮ってやるよ。」

ケニーはジョージの携帯を受け取ると、

「電話にカメラか、進歩したもんだ。」

とぶつぶつと呟きながら、しおりとジョージの写真を撮った。

「ジョージ、お前、何ががちになってるんだ？女性と写真撮る時は、肩に手を回すのが礼儀ってもんだらう。」

ケニーは大げさにため息をつく、二人に近づき、真っ赤な顔のジョージの手をしおりの肩に回した。そしてもう一度携帯をぎこちなく構えると、

「全く」

と舌打ちをした。

「しおりさん。すき間が5インチも離れとるよ。それじゃ、ジョージが間抜けに見えるじゃないか。まあ、間抜けだけど。」

しかめっ面でもう一度二人に近づくと、恥かしそうな顔をしたしおりの身体をジョージに押し付けた。

「全く、世話の焼ける奴らだ。」

ケニーは、嬉しそうにニコニコして見ている優花にウィンクをすると、もう一度写真を撮った。

「ケニーさんも一緒に写ってください。」

しおりがそう言いながら、優花の手を引いてケニーの側へ立つと、ケニーはしかめっ面で直立不動になった。

「ははは！ケニーさんの方が女性と写真撮られるのに慣れてないじゃないですか。」

ジョージは目尻を下げて笑うと、一枚写真を撮った。

客が来て、ケニーがカウンターの中へと入っていった。

「後で、メールで送ってね、ジョージ。」

しおりの言葉に、寂しそうにジョージは頷くと、急に優花に向かって、

「あ！又僕のカスタードを食べてるな！」

と言つて、追いつけ回し始めた。

しおりは、その光景を寂しく微笑みながら眺めていた……

「それでは、帰ります。」

しおりは優花と手をつなぐと、ジョージとケニーに告げた。

「いつか、必ず戻ってきますね。」

しおりは、ケニーとジョージ、そしてクレープハウスの看板を、もう一度心に焼き付ける様に見詰め直した。

この小さな店で経験した事は、ポートランド滞在中の一番大きな思い出として心に残り続けるであろう。

しおりは、涙を浮かべたケニーとハグをした。そして次にジョージと。

寂しげな瞳に、一瞬諦めきれない思いを映し出したが、ジョージはすぐに視線を外すと優花とハグをした。そして最後に、ケニーと優花がハグを交わした。

「さ、帰ろうか。」

しおりは優花の手を引くと、二人に頭を下げた。

「本当に、色々とお難う御座いました。」

「おじちゃん達、又ね！」

何度も何度も振り返りながら小さくなっていくしおりと優花を、ジョージとケニーは無言で見送った。

そしてついに見えなくなると、

「おい、ボーイ。泣いてるんじゃないのか？」

と前を向いたまま、ケニーが口を開いた。

「残念でした。僕はもう泣かないんです。」

同じく前を向いたまま。ジョージはそう答えた。

次の日の日曜日、佐和子の家でしおり達のお別れパーティーが開かれた。

ひとしきり皆で料理をたいらげた後、男達はタバコを吸いに外の

バルコニーへ、子供達は二階の子供部屋へと分かれた。しおり達はお茶を手にとると、リビングのコーヒータブルを囲んだ。

「ホント、寂しくなるわねえ。」

佐和子と律子がしみじみと言った。

「私、ポートルランドが好きだったなあ。出来ればずっと住みたかったけど、中途半端な所で日本に帰るよりは、今帰った方が優花にとつてはいいのかな、とも思ってます。」

「そうよ、子供の事考えたらさ、あんまり海外をあっちへ行ったり、こっちへ行ったりするもんじゃないわよ。友達作る暇だってありゃしない。」

そう言って、律子がお茶を一口飲んだ。

「でも・・・」

佐和子が言いにくそうにしおりを見た。

「ううん、あのね、さっきビールを主人達の所に持っていった時に律子さんのご主人が憲二さんに、「じゃあ、来年はベトナムなんですか?」って、聞いていた様に思ったんだけど・・・」

「え!何ですって!?!」

しおりは耳を疑った。憲二からは何も聞いていない。

しおりは、夏休み前にマンション近くの小学校へ編入すれば、他の子達より少し入学が遅れるものの、すぐに馴染めると考えていた。そしてその手続きも済んでいるのだ。マンションだって今まで貸していた人に事情を話して、出来るだけ早く空けてもらえる事になっている。

又日本で新しい生活を始める準備は整っているのだ。

それが又来年転勤となれば全ての事情が変わってくるではないか。何より、せっかく日本に慣れた頃に、又言葉の違う他の国へ優花を連れていくのは、あまりにも不憫すぎるとしおりは思った。

九時を過ぎた頃、パーティーはお開きとなった。憲二はかなり酔っている。

「日本に帰っても、連絡してね。」

「私達も、いつ帰国になるか分からないけど、日本でも会おうね。」  
そう言って、佐和子と律子かわるがわるしおりに声をかけると  
涙ぐんだ。

「必ず連絡します。今日は本当に有難う御座いました。」

二人に頭を下げたしおりは、優花と、男性連中との別れを終えた  
憲二を車に乗せると、運転席に座った。そして見送る佐和子や律子  
達に手を振り、最後の夜を迎える我が家へと向かった。

家に着くと、遊び疲れて眠っている優花を二階のベッドルームへ  
と運んだ。リビングに下りてくると、憲二がソファに座ってくつ  
ろいでいる。

ほぼ引越しの準備が終わっている家の中は、寒々としていた。明  
日、日系の引越し業者が来て、全てを運び出してくれる手はずにな  
っている。

しおりはその箱の中から湯飲み茶碗と急須を取り出すと、お湯を  
沸かしてお茶を入れた。それを憲二に渡して、コーヒーターブルを  
挟んで反対側に座ると、口を開いた。

「ねえ、ちよっとお話があるんだけど。」

「なんだ？」

と怪訝そうな憲二に、

「ベトナムへ行くって本当なの？」

と聞いた。

「チッ」

憲二は舌打ちをすると、

「やっぱり佐和子さん聞いてたか。おしゃべりな人だな、全く。」  
と、酔いの残った顔を両手で擦りながら、天井を見上げた。

「ああ、そうだ。その事を言うとお前はいい顔をしないだろう？俺  
も聞いたのは一週間前だし、日本に帰ってからゆっくりと話そうと  
思ってたんだ。」

「どのくらいの予定なの？」

「三年だ。予定では。」

「その後は？」

「分からんさ。でも、帰国したら、ある程度のポストを準備しとくって部長に言われたよ。」

憲二は少し誇らしげに答えた。

しおりは佐和子に聞いた時から、考えていた事を話そうと思った。

「ねえ、あなた。私ずっと考えていたんだけど・・・」

ひざを揃えて切り出した。

「もしたった三年なのだったら、申し訳ないんだけど、優花は日本に置いておいて上げたいの。」

憲二は目を丸くすると、

「何を言ってるんだ？誰が優花の面倒を見るんだよ？まさか、あの年で俺達の親に預けて行く訳じゃないだろう？」

と声を大きくした。

「ううん、違うの。私も一緒に残ろうと思ってるわ。」

それを聞いた憲二は、眉間にしわを寄せると、

「お前、何を言ってるんだ？俺に単身赴任をしろって言うてるのか？」

と、低い声で問いただすように聞いてきた。

「だって、優花を又、混乱させたくないのよ。今度はまた違う言葉の国でしょう？日本に帰って落ち着いたと思ったら、又違う国。あつちで落ち着いたと思ったら、又帰国。優花だって、おかしくなっちゃうわ。」

「ふざけるなよ！そうならない様にサポートするのがお前達母親の役目だろう？おかしくなるのは、お前がちゃんと面倒をみてあげていないからだろう。大体、他の駐在員の人達は家族で暮らしているっていうのに、俺だけ妻が嫌がったからって、単身赴任なんかみっともなくって出来るか！それに、こうやってのんびり海外生活が出来るのは、俺が必死に働いているからだろうが。それを妻がサポートするのは当然の義務だ！」

「あなたが一生懸命働いてくださっている事には感謝しているわ。私が駐在員の妻として至らないのも分かってる。でも、これは私達の問題ではなくて、優花の問題なの。あの子は少し繊細な所があるわ。他の子供と打ち解けるまでに時間が掛かるのよ。あなただって分かってるじゃない。こっちで学校に行き始めたばかりの頃の事、覚えてるでしょう？学校では一人ぼっち。家に帰ってきてても私と遊ぶばかりじゃ、又、おかしくなっちゃうわ。」

「休みの日には、どこかへ連れて行ってるじゃないか。」

「あなたのお休みの日は、殆どがゴルフじゃないの。」

「そりゃあ、付き合いだってあるしな。ははあ、俺がゴルフばかりしてると言いたいのか。」

少しずつ話がずれはじめている。酔った時の憲二は、言い合いをすると必ず話のポイントがずれてしまう。そして最終的には、全く違う話で怒り出して、話し合いにならないことが殆どだ。しおりはため息をつくつと、

「今あなた少し酔ってるから、また別の機会に話しましょう。」

そう言つて、立ち上がった。

そして二人の湯飲みを、キッチンへ持っていこうとするしおりの後姿に、憲二の声が飛んできた。

「ベトナムもな、色々物騒な事もあるみたいだし、この間みたいに余計な心配をする位だったら、一人の方がいいかもな。」

「何の事？」

訝しげに振り返つたしおりに、憲二は続けて言つた。

「この間みたいに、お前の不注意で優花がいなくなつたりしたら大変だつて事だよ。」

しおりの顔色が変わった。

あの時の事は、今でもしおりの心に深く忘れられない記憶として残っている。あれ程、我を忘れて心配した事は無かつたし、自分を責めた事もない。ジョージのお陰で何事も無く済んだが、もしジョージが見つけてくれていなかったらと思うと、今でも鳥肌が立つ。

憲二は続けた。

「大体な、不注意もそうだけど、他の駐在員の奥さん達みたいに、テニススクールに通うとか、料理でも習うとか何かなかったのか？ つるんでいるといえ、人の噂ばかりしているあの二人のおばちゃんとはっぴかりで。子供にピアノとか習い事をさせている人達だっているんだぞ。」

話の内容が滅茶苦茶だ。そんな事を言われた所で、今更どうにも出来る訳が無い。酔った憲二には、これ以上何かを話しても無駄だと思ひ、怒りを抑えて開きかけた口を閉じた。

「あの時の優花の時だって・・・」

又同じ話に戻ろうとしたのに、しおりはうんざりすると、

「もう、止めて。」

と冷たく遮った。

すると憲二はその言い方が気に障ったのか、立ち上がると、

「なんだよ、その言い方は！人がしゃべってるのに！大体あの時無事だったから良かった様なものの、もしさらわれて殺されてもしていたらどう責任をとるつもりだったんだ！？もしそんな事にもなつてたら、お前が殺したのも同然だったんだぞ！」

と叫んだ。

しおりは顔から血の気が引いていくのが分かった。唇がわなわなと震えてくる。

「なんて事を言うの・・・」

あまりの怒りで言葉が続かない。

「あの時の男だって、たまたま警察が早く見つけてくれたから良かったけど、優花から見たって汚いアメ車に乗っている様な奴なんか、逆に危なかったかもしれないじゃないか！」

それを聞いたしおりは、右手で思いつき憲二のほほを叩いた。

「何も知らないくせに、ふざけた事を言わないで！！」

驚いた憲二はすぐに顔色を変えると、

「ふざけた事とはなんだ！」

と、怒りで震えているしおりの左のほほを思いつき叩いた。

「きゃー！」

しおりは、二、三步よろめくと、叩かれたほほを押さえて下を向いたまま黙り込んだ。

「お、おい、大丈夫か？」

憲二が心配そうに近づいてきた。

「来ないで！」

しおりは、叩かれた頬を押さえたままそう叫ぶと、キッチンのカウンタ―に置いてあった車の鍵を手を取った。

「お、おい。どこに行くんだ？」

慌てる憲二に、

「少し外の空気を吸ってきます。明日からの食料品も必要だし。」

しおりは後ろを向いたまま答えた。

「何も、こんな時間じゃなくても・・・」

そう言いかけた憲二に何も答えず、ドアを開けて外へ出た。

玄関のドアを閉めた途端、しおりの目から涙がこぼれ落ちた。

もし優花が殺されていたらお前が殺したも同然だという憲二の言葉が、繰り返し甦ってくる。酔っていたとはいえ、憲二の発した言葉はひどすぎた。

もう一つ許せなかったのは、ジョージを侮蔑するような発言をした事だった。もちろん、ジョージの過去については、憲二が知る由もないが、たとえ知らなかったとはいえ、助けてくれたジョージに対して失礼であろう。

しおりは、泣きながらガレージの前に止めてあった車に乗り込むと、エンジンをかけ、窓を開けた。

風が入ってくる。

もうすでに暗くなった夜空に、沢山の星が瞬いている。しおりはその星を見ている内に、たまらなくジョージに会いたくなった。

優しさと強さと、そして寂しさに満ちた、深く澄んだ眼差し・・・  
そして、安物の石鹸の香り・・・

しおりは、自分の身体を両腕で強く抱きしめると目を閉じた。  
そしてゆっくりと瞼を開いたしおりは、そのまま車を出すと、ノース・ウエスト地区へ向かった。

車を走らせながら、しおりは憲二を叩いた自分の右手を見た。人を叩いたのは産まれて初めての事だった。

憲二がジョージの事を口にした時、抑え切れない怒りが込み上げてきた。

自分の事を言われた時に感じた、青白く冷たい怒りとは違い、発火したマッチの様に、紅く熱い怒りが、しおりの身体をつき動かしていた。そして気付いた時には、憲二の顔を叩いていたのだった。

しおりは、今ジョージの所へ行くという事が、どういう事を意味するのか分かっていった。

しかし、ジョージに会いたい、あの香りに包まれない、その熱い思いだけがしおりを走らせていた。

ジョージはシャワーを浴びて部屋のベッドで横になると、もう既に何度見たか分からない、昨日携帯で撮った写真を眺めていた。

そこに玄関のドアをノックする音が聞こえてきた。他の住人は誰も出る気配が無い。仕方なく玄関の明かりをつけると、ドアを開けた。

そこには、しおりが涙を流しながら立っていた。

「しおりさん！？どうしたんで・・・」

ジョージが言い終わる前に、しおりはジョージの胸に飛び込んだ。  
いた。

そして泣きながら静かに呟いた。

「今度はあなたの時間を私に分けて・・・」

ジョージは、しおりを抱いたまま静かに玄関を閉めると、部屋のドアを開けた。

二人は、ベッドの脇に置いてある、スタンドの明かりだけが灯る薄暗い部屋へと入っていった。そして、無言のままベッドの脇に並んで座ると、静かに唇を合わせた。

ジョージは唇を合わせたまま手を伸ばし、スタンドの明かりを消した……

密度の濃い、短い時間の中で、何度もキスを交わすと二人は求め合った。

しおりは、求め合うとはこういう事なのかと初めて肌で感じていた。

そして熱く、確かな時間が過ぎ去っていった。

カーテン越しの月明かりが、ぼんやりと部屋の中を照らしている。しおりはジョージの腕に抱かれたまま、わき腹の傷を触った。

「ありがとう……」

しおりは呟くと、無言のままのジョージから、ゆっくりと体を離して立ち上がり服を着た。床の上のバッグを手に取ると、涙の乾いた顔で、ベッドの上のジョージを振り返った。

「さよなら……」

薄明かりの中、しおりは寂しく微笑んでいた。そして、ドアに向って歩き始めた。

「しおりさん！」

後ろ向きのまま、しおりは立ち止まった。

「しおりさん、僕、ちゃんと働きます。もう死んだ後の為に働くのは終わりにします。」

ジョージは一旦、言葉を切ると思い切った様に続けた。

「そして僕、しおりさんを迎えに日本へ行きます。」  
その言葉を聞いたしおりは、少しの間床に視線を落とすと、顔を上げた。

「待ってる・・・」  
小さく答えると、ゆっくりとドアノブを回し部屋を出た。

車に乗り込んだ所で携帯が鳴った。憲二からだった。

「今、一体どこにいるんだ！」

「ごめんなさい。あと十五分くらいで帰ります。」

そう答えると、憲二が何かを言うのを待たずに携帯を切った。明日になれば又、色々と言われるだろう。言い訳も考えてはいない。今は何も考えたくは無かった。

家に着くと、憲二はすでに寝ていた。あれからまた飲んだらしく、ビールの缶が二つほどベッド脇のカーペットの上に転がっている。しおりは優花のベッドルームを覗くと、めくれていた毛布を掛けなおした。

パジャマに着替えて顔だけ洗うと、自分達のベッドルームの、空いているもう一つのベッドに入った。

シャワーは浴びたくなかった。

今は、ジョージの香りに包まれたままでいたかった・・・

## 第六章：星の向こうに

次の日の朝、不機嫌な顔の憲二と、眠そうな顔の優花と三人で、予約していたホテルへと向かった。

玄関を閉め、優花と憲二が車に乗り込むと、しおりは足を止めて、これまで過ごしてきた我が家を振り返った。

もうすぐオレゴンでの生活も終わってしまうのかと思うと、様々

な思いが胸に込み上げてくる。

オレゴンという緑豊かな土地が、自分達家族にとって何か新しい変化をもたらしてくれる事を願い、渡米したのが3年前。

その3年の間の、最後のわずか3ヶ月余りでしおりの人生が大きく変ってしまった。

憲二との繋がりを修復する為の接着剤はついに見つけ出す事が出来なかったが、新たに芽生えた確かなる繋がりに。

しおりは、後悔はしていなかった。

ジョージは、しおりのお陰で変わる事が出来たと言ったが、一番変わったのはしおり自身ではないだろうか。

ジョージに出会う事がなければ、自分の中にあれほどの激しい感情が眠っていた事など、気付く事はなかっただろう。これまでの自分と言うものを変えてくれたその熱い繋がりに、又会える日はいつ訪れるのかは分からない。

しかし、例え誰にも許される事がなくとも、いつまでもその日待ち続けよう、そうしおりは思った。

同じ頃、ジョージはケニーの所へ来ていた。

「おう、早いな。ボーイ。」

驚くケニーにカスタードのクレープを頼むと、スタンド横の階段に座ったまま、ジョージはじっと空を見つめていた。そして出来上がったクレープを受け取ると、それを一口食べ、また空を見上げると、口を開いた。

「ケニーさん、僕、フルタイムの仕事を探します。」

ケニーは、そのジョージの横顔に強い決意を感じ取ると、

「枯らすんじゃないぞ。」

とジョージの顔を睨んだ。

「はい。」

ジョージは口をきゅっと結んで頷くと、残りのクレープを平らげて立ち上がった。

揺るぎの無いその一言からは、これまでの不安定だった心の影は、もう微塵も感じられない。たった、この一言を言えるようになるまで、どれだけの悲しみと苦しみを乗り越えてきた事だろう。深く澱んだ沼の様に光りを失っていた瞳は、ケニーと出会い、その光りを取り戻しかけてはいたが、何かが欠けていた。

しかししおりと出会った事で、人を愛するという事を知った。

許されない愛ではあったが、その愛という感情を自分の中に認めたと今、ジョージの瞳は山肌から湧き出す真水のように、透明感のある力強い光りを放っている。

嬉しそうに目を細めるケニーに向かい、

「さあて、仕事に行ってきますす！」

と言つて、歩き出したジョージだったが、ふと喉の渴きを覚えた。

「僕、そのコンビニでオレンジジュースでも買ってきます。ケニーさんにも何か買ってきましょうか？」

「わしはいい。それより仕事に遅れるんじゃないぞ。」

「はいはい。何だか父さんに言われてるみたいだな。」

ジョージはそう言つて笑つと、道を渡つて、古くからあるコンビニへと入つて行った。

その後ろ姿を頼もしそうに見つめていたケニーの目の端に、ジョージの後に続いて店に入つていく、二人のヒスパニック系の男達の姿が映つた。

サングラスをかけた短い髪の大柄な男と、同じくサングラスをかけ、白いカウボーイハットをかぶった小柄な男は、周りを警戒するように店に入つていく。二人ともポケットに右手を入れたままだ。その異様にケニーは胸騒ぎを覚えた。

その直後だった。

「キヤーー!!!」

と言う悲鳴と共に、一人の女性が店から走り出てきた。

「強盗よ！誰か警察に連絡して！」

辺りは騒然となった。

ケニーはコンビニへと走った。

入り口に近づこうとしたケニーを、コンビニのすぐ隣の店から男が飛び出してきて羽交い絞めにした。

「駄目だ！今入って行ったら危ない！」

「ボーイが！ジョージが中にいるんだ！」

その男はジョージと顔見知りだったのか、

「え！？あいつが！？なんてこった・・・」と呟くとコンビニの方を振り返った。

数分もしない内に、数台のパトカーのサイレンが遠くから聞こえてきた。

次々と到着してくるパトカーは、コンビニを挟んで数ブロックずつ離れた所で道路を封鎖し始めた。バラの絵がドアに描かれた、白い斜体にブルーとイエローのラインのパトカーで次第に通りが埋め尽くされていく。

その中の一台から一人のアジア系の警察官が厳しい顔で降りてきた。ロイだった。そしてコンビニの隣のビルの入り口から、心配そうにコンビニ内を伺おうとしているケニーを見つると、びっくりした様に、

「オオ、久しぶりです、ケニーさん。今度、こっちに戻ってきたん

・・・」

と言いかけたロイに、

「ロイ！ボーイが中にいるんだ！」

ケニーが叫んだ。

「何だつて！？」

驚いたロイは、険しい顔で無線に向かって叫んだ。

「店員以外にも客が中に残されているらしい！」

ロイは無線を切ると、

「ケニーさん。ここは危ないですから、店の中に入ってください！」

そう叫んで走り出した。

その時ジョージは、レジカウンターに近い棚の脇で両手を挙げて立っていた。

ジョージがコンビニに入って、右手の奥にある冷蔵庫からオレンジジュースを取り出し、レジの方へと近づいた時だった。

後から入ってきたヒスパニック系の二人の男が、いきなり銃を取り出すと、レジカウンターのの中にいたオーナーらしき韓国人の男性に向かつて叫んだ。

「カネを出せ！！」

店内が一瞬にして凍りついた。

銃を向けられた男性は、スパニッシュ訛りの英語が聞き取れないのか、それとも恐怖からなのか、両手を挙げたままブルブルと首を振るばかりで動けないでいる。

「急げ！カネだ！」

じれた大柄な男が銃を向け直した時、パトカーのサイレンの音が遠くに聞こえてきた。

「くそ！！」

鋭く叫んだ小柄な男は、極端に緊張していた。サングラスをかけている為、目の表情まではうかがえないが、引きつった半開きの分厚い唇が乾くのか、しきりに唇を舐めている。

そして銃を持った右手が、ガタガタと震えていた。その上、激鉄を起こしたままトリガーに指を掛けている為、いつ暴発してもおかしくない。

それを見たジョージは緊張した。

目を外に向けると、窓の外にはすでに数台のパトカーが到着しているのが見える。開いたパトカーのドアに隠れて数人の警察官が銃

を構えていた。

その時だった。

ジョージの目の端で何かが動いた。

目だけを動かして見ると、山と積まれた韓国製のカップ麺を並べた段ボールの裏に、一人のアジア系の女の子がしゃがみ込んでいた。五歳くらいはその女の子は、このオーナーの娘なのか、大きな黒い目に涙を浮かべてガタガタと震えている。

その瞳を見た瞬間、ジョージの脳裏に十年前の出来事がフラッシュバックの様に甦ってきた。心臓がドクン、ドクンと音を立ててきしみ始める。

覆いかぶさったジョージの胸の下で、大きな目に涙を浮かべながら、

「お兄ちゃん怖いよ……」

と震えていた真由……

「大丈夫だ、お兄ちゃんが守ってやる！」

そう叫んで男の前に立ちはだかった。

死んでも守りきる覚悟だった。

しかし、結局守ってあげる事が出来なかった。二年後、生命維持装置のスイッチを切られた時も、何も出来なかった。

ジョージの瞳に、二度までも守ってあげる事の出来なかった妹、真由の姿と、段ボールの後ろで震えている女の子の姿とが、セピア色の写真がカラーに変わっていくかのごとく、次第に重なり合っていた。

その時、こらえきれず泣きじやくり始めたその子のひじが、不安定に重ねられたカップ麺を乗せた段ボール箱に当たった。スローモーションの様に、山積みのカップ麺が崩れ落ちていく。

ジョージの目に、驚愕の表情を浮かべながら、崩れ始めたカップ麺の方へと銃を向ける小柄な男の姿が映った。

その瞬間ジョージは飛び出していた。

「真由！！」

パン！！

鋭く、乾いた音が店内に響き渡った。

銃声が聞こえてから数分後、犯人の二人組は両手を上げて投降してきた。

犯人が数人の警官に拘束されるのを見て、ロイは店の中へと飛び込んだ。

その店内の様子を見るなり、

「なんてことだ・・・」

と呟いて立ち尽くすと、

「救急車だ！！」

と叫んだ。

外に待機していた救急隊が中に飛び込んでくる。ロイは店の外へ走り出るとケニーを探した。

救急車のサイレンとパトカーのサイレンが、上空を飛び交うヘリコプターのローターが、空気を切り裂く音と共に、トウエンティ―サイド周辺に響き渡る。

ロイは、騒然としているコンビニ前の人垣の一番前に、不安そうに立っていたケニーを見つけると、駆け寄って

「ジョージが撃たれた！」

と叫んだ。

「オーマイ・・・」

愕然とした表情で頭を抱え込んだケニーは、引きつった顔をロイに向けて、

「ロイ！頼みがある。しおりさんを探してくれ！ビーバートンの  
どこかのホテルに家族でいるはずだ！」

とロイの両手を握った。

「分かった！」

ロイはそう叫ぶと、無線を掴んだ。

「ビーバートン中のホテルを片っ端から当たってくれ！名前は“シ  
オリ”だ！ラストネームは・・・分らん！“シオリ”で十分だろ  
う！」

ケニーはロイの言葉を聞きながら、もう一度両手で頭を抱えると、  
がっくりとひざを付いた。

しおり達は、フリーウェイ217近くのホテルにチェックインを  
済ませ、部屋に荷物を運び終えた所だった。

鍵をかけ、三人がそれぞれベッドの上に腰掛けたその時、ドンド  
ンドン！と激しくドアをノックする音が鳴り響いた。

驚いた三人が、部屋の隅の方に固まってしやがみ込んだ所に、大  
声で、

「警察です！しおりさんはいますか！」

と片言の日本語が聞こえてきた。

「け、警察・・・？」

憲二が頭をひねりながら、チェーンを付けたままドアを少しだけ  
開けてみると、そこにロイが険しい顔で立っていた。

濃いブルーの制服を見た憲二が、チェーンを外してドアを開けた。  
奥でしやがみ込んでいたしおりは、そこに立っている険しい表情  
のロイを見ると、

「あ、ああ、ロイさん、いつかはお世話になりました・・・」  
と立ち上がるうとした。

「しおりさん。挨拶は後だ！ジョージが撃たれた！」

「えっ！！？」

とぼかんとするしおりに、

「ケニーさんがしおりさんを探して来いって！」

ロイはしおりにそう言くと、後ろで唾然としている憲二に、

「ポートランド市警のロイです。少しの間しおりさんをお借りします。」

とバッジを見せた。

何が何だか分からないまま、

「はあ……」

と答える憲二と、その後ろに隠れている優花に、しおりは、

「ごめんなさい、ちよつと行ってきます！」と叫んで部屋を出ると、

ロイと一緒にパトカーに乗り込んだ。

「ロイさん！ジョージが撃たれたって、どういふ事ですか!？」

足が震え始めている。

ロイは、サイレンを鳴らしながらパトカーを走らせると、前を向いたまま険しい顔で説明した。

「一時間くらい前に、トウエンティースードのコンビニエンスストアに強盗が入ったんです。そこにジョージがたまたま居合わせて……」

「でも、何故ジョージが……」

「もう一人、韓国人の女の子が残されていたんです。多分その子を庇って……犯人は撃つ気は無かった、あれは暴発だったと主張しているらしいですが……」

しおりはようやく事情が飲み込めてきた。

「それで、それでジョージは無事なんですか!？」

「今、最終的な連絡を待っている所です。」

しおりはロイの最終的などという言葉に悪寒を覚えた。

張り詰めた空気が、パトカーの中に漂い始めた所に無線が入ってきた。

しばらくやり取りをしていたロイだったが、無線を戻すと、一瞬外に顔を向けて、

「くそ!!!」

と小さく叫んだ。

しおりは、ロイの様子にただならぬ気配を感じたが、言葉を発する勇気が出てこない。

「しおりさん、一つだけ聞いてもいいですか？ケニーさんが、私にしおりさんを探してくれと頼んだ時には、何故しおりさんを探すのか、正直な所分からなかったんです。でも噂で、ジョージがとうとう心を許した女性が出来たらしい、って聞いていたのを思い出して・・・ひよっとしたら、それはあなたの事だったんですか・・・？」

ロイが震える声で聞いてきた。

「多分・・・」

不安そうにしおりが答えると、

「そうか・・・あなたが・・・」

そう言つて、ロイは目を細めて窓の外に目をやると、唇を噛んだ。しおりは恐ろしくなつて、耳を塞ぎたかった。しかし、両手が震えて動かない。

しおりの乗ったパトカーは、次々と道の端によけていく車の間を駆け抜けていく。

赤信号を横切り、中央分離帯を走り抜け、そのままフリーウェイに入ってから、サイレンに気付きスピードを落としていく他の車が、まるで止まって見える程のスピードで、ロイはどんどん飛ばしていった。

そのスピードにしおりは嫌な予感を覚えた。

そしてついに、ロイが重そうな口を開いた。

「しおりさん、落ち着いて聞いてください。」

一旦ロイが深呼吸をすると、周りの雑音がしおりの耳から消えていった。心臓が飛び出しそうなほど、その鼓動を早めていく。

ロイは思い切った様に口を開いた。

「ジョージは・・・奴は・・・死にました。」

そう言ってハンドルを右手で叩くと、  
「何故だ!!」  
と叫んだ。

しおりは、ロイが何を言っているのか、理解出来なかった。

何を言っているんだろう・・・？死んだ？迎えに行くと私に告げたのは、つい昨日の事だ。まだ、胸の温もりさえ残っているではないか・・・

触れた傷跡の感覚さえ指先に残っている・・・

しおりは呆然と運転席のロイを見た。

そして、いかつい顔に不釣り合いなその丸い目から、大粒の涙がこぼれているのを見た瞬間、

「いや!!!!」

と叫びながら、両手で耳を塞ぐと、座席に倒れこんだ。

しおりはロイに抱き抱えられる様にして、警察病院の中へと入っていった。

消毒液の匂いが漂うリノリウムの廊下を、よろめきながら進んでいくと、一つのドアの前で、ケニーが力なく視線を床に落としたまま座っていた。

近づいてくる足音に目を向け、二人に気付いたケニーは、立ち上がると駆け寄ってきた。

「しおりさん！」

ロイは黙って首を振った。

しおりの目の焦点が合っていない。

「しおりさん！大丈夫か！」

ケニーが肩に手を掛けて声をかけると、しおりはようやくケニーを見た。

「ジョージ！ジョージは！」

震える声で詰め寄った。

ケニーは痛ましそうに顔をゆがめると、

「こっちだ・・・」

と言つて、ドアノブに手をかけ、ゆっくりとドアを開けた。

蛍光灯に照らされたその部屋は、二つのキャビネットが隅においてあるだけで、他に調度品と呼べる物は何も無かった。

その寒々しい部屋の真ん中に、カバーのかけられたベッドがぽつんと一つだけ置いてある。

白いシーツで覆われたベッドの上に人の隆起を確認すると、しおりは足がすくんで立ち止まった。そのまま崩れ落ちそうになる身体を、ケニーに支えられながら近づくと、ロイがゆっくりと顔に掛かった白い布を取った。

そこには紛れも無いジョージの顔が横たわっていた。

しおりは、目を閉じているジョージを見た記憶が無かった。

目じりにしわを寄せて、子供の様に笑っている顔。

寂しそうに目を細めながら、空を見上げている顔。

いつもどんな時も、その愛らしい眼差しは閉じられる事は無かった。

震える手で頬に触れてみた。

唇を親指でなぞってみた。

初めてキスをした時に震えていたあの唇は、温かかったはずだ。

しかし、いくら何度なぞってみても、あの時の体温は指に伝わっては来ない。

しおりの目から涙がこぼれ落ちた。

「何で・・・！？いやだ！いやよ！ちゃんと働くつて言っただけじゃない！迎えに来るつて言っただけじゃない！私の事が好きだつて言っただけじゃない！」

そう泣き叫ぶと、ジョージの顔をきつく抱きしめて揺さぶった。ケニーとロイは、とても見ていられなかった。二人とも、次から次へと込み上げる涙を止める術が無い。

誰もが愛した、子どものような笑顔はもう見る事は出来ないのだ。

「しおりさん……」

ケニーは、ジョージに覆い被さったまま泣き続けるしおりに近づく、両方の肩に手を当ててやっとの思いで口を開いた。

「ボーイはな、小さな女の子に銃が向けられて、飛び出したらいいんだ……多分、妹さんの事がそうさせたんだろう。」

そう言つて、涙を拭った。

「でも、しおりさん……」

ロイが嗚咽をこらえながら口を開いた。

「本当なら、あれだけの至近距離で撃たれたら、弾は身体を貫通します。そしたら、あいつが抱きしめていた女の子だって、無事じゃ済まなかったでしょう。でも、これのお陰で女の子は助かったんです。」

そう言つと、しおりに一枚のコインを渡した。その深いキズのついたコインは、しおりがジョージにあげた、大きな１ドルコインだった。それを見たしおりは、コインを両手で握り締めると、しゃがみこんだ。

溢れ出る涙が、その握り締めた両手を濡らしていく。

「あなたを助ける為にあげたのに……！ 反対向かなきゃ駄目じゃないの……！」

しおりはふらふらと立ち上がると、またジョージの顔を抱きしめた。

犯人の撃った弾丸は、女の子を庇う為に覆いかぶさったジョージの心臓を背中側から貫通し、胸のポケットに入った１ドルコインに当たって止まったのだった。

その為、奇跡的に女の子は無傷だったのだ。

「そうか、そのコインはしおりさんが・・・」  
ロイとケニーは顔を見合わせると、悲しそうに頭を振った。

一生分泣いたと思ったのはつい最近の事だった筈だ。それなのにいつまでも涙が止まらない。ジョージに降り注ぐ涙の粒が、眠った様に見えるその瞼の上に小さく溜まっていく。

しかしどれだけ泣いたとしても、目の前のジョージは二度と起き上がることはないという事実を、しおりは受け止める事が出来ずにいた。

あゝあ、こんなに泣いちゃって・・・

笑いながら、起き上がってきそうな気さえする。

「そろそろ帰らないと、ご主人と優花ちゃんが心配するんじゃないか・・・」

ケニーが、言いにくそうにしおりの肩に手をかけて言った。

ジョージの顔を抱き締めていたしおりがゆっくりと顔を上げた。涙の向こうに、目を真っ赤に腫らしたケニーとロイの姿があった。

しおりは震える両手を口に当てたまま、立ちすくんで動けなかった。ケニーとロイが両側からしおりを支えて、ベッドから離そうとした。

「いやー!!」

しおりは二人の手を振りほどくと、またベッドの上のジョージの顔を抱きしめた。

ケニーとロイは、涙を流しながらしおりをジョージから引き離すと、戻ろうとよるめくしおりを二人で両方からがっしりと支えた。しおりは二人にしがみつくつと、声を上げて泣いた。二人の男達も堪えきれずに涙を流し続けた。

終わる事のない三人の慟哭は、永遠の眠りについたジョージの側でいつまでも続いた・・・

どれほど時間が経ったのだろう。

ケニーとロイにしがみついていたしおりが、一言一言搾り出すように口を開いた。

「あ、あの、ジョージの携帯は……？」

「携帯？あ、ああ、所持品の中にあつたと思いますが……」

ロイが、真つ赤な目をしばたかせながら答えると、

「あの、あの中に彼と撮つた写真があるんです。それを頂けないでしょうか……他に何もないの……ジョージの写真……」

そう言つてしおりは両手で顔を覆つた。

「そうか……ちよつと待っていて下さい。探してきます。」

しおりをケニーに託すと、ロイは部屋を出て行つた。

「しおりさん、ユーは大丈夫か？なんなら、わしからうまい事旦那さんに話してもいいんだが……」

心配そうにしおりの顔を覗き込むケニーに、

「大丈夫です。自分で話します……」

そう言つと、震える手で泊まっているホテルの名前とルームナンバーを書いた紙を渡した。

「彼のお葬式、私出られるでしょうか……？もし間に合えば出たんです。申し訳ありませんが、ご連絡頂けないでしょうか？」

懇願するように言うしおりに、

「分かつた、連絡するよ。」

そう言つて、ケニーは大事にその紙を胸のポケットにしまった。

ロイが戻つてくると、しおりにジョージの携帯を渡した。

「有難う御座います……」

しおりはいとおしそうに撫でると、バッグに入れた。

「じゃ、送っていきましょう。」

ロイがしおりに声をかけ、背中に手をまわした時、

「すみません、もう少しだけ待つててください。」

としおりは言つと、ベッドの上のジョージの所に戻つた。

しおりの頬に又涙が溢れ出して来る。

上を向いて大きく息をすると、しおりは顔を近づけてジョージの

唇にキスをした。

再び涙に暮れ始めたしおりを、ロイとケニーが両脇を抱える様にして支えると、そのまま三人はジョージの眠る部屋を後にした。

帰りのパトカーの中で、ロイが目をしばたかせながら、

「しおりさん、日本語でマユってどういう意味でしたっけ・・・？」

と尋ねた。

「マユ・・・？」

「ジョージが、女の子を助ける為に飛び出した時、叫んだらしいんです。」

「マユ・・・マユ・・・」

しおりは数回呟いた。

「ああ・・・」

しおりの目から、枯れ果てたと思っていた涙がまたこぼれ落ちた。

「どういう意味・・・なんです・・・？」

「マユって、ジョージの亡くなった妹さんの名前です。やっぱり・・・」

・その子が妹さんに見えたのね・・・」

ジョージの過去を知っているロイは、

「そうだったのか・・・」

と呟くと、涙をこぼしながらハンドルを切った。

その時、外を向いて涙を流し続けるしおりの耳に、

「今度は助けたよ！しおりさん！」

と、嬉しそうに笑うジョージの声が聞こえた様な気がした・・・

二日後、ジョージの葬儀がノース・ウェスト地区の、とある教会で行われた。

身寄りの無いジョージではあったが、葬儀には沢山の人が駆けつけた。あちらこちらで泣き崩れている女性の姿が見える。トレパツ

オーンの従業員達も、ロビンといういつか空港で見たあの女性も、皆が涙に暮れていた。

しおりは喪服に身を包み、優花の手を引いて参列した。白を基調に統一された教会のホールで、黒い喪服に身を包んだしおりの寂しげな美貌は、一際参列者の目を引いた。

ホールの一番奥の一弾高くなつた壇上に、色とりどりの花に埋もれるようにジョージの棺が設置してある。

参列した一人一人がその棺の中のジョージに別れを告げていくとしおり達の順番が来た。

「おじちゃん死んじゃつたの？」

優花が、泣きそうな顔で聞いてきた。

「ううん・・・おじちゃんはね、妹さんに会いに行ったの。」

しおりは、そう言つて頭を撫でると、

「ほら、バイバイ言つてあげて。」

と優花に微笑んだ。

「バイバイ・・・」

優花が、泣きながら棺の中のジョージに手を振ると、しおりは近くにいたケニーに、

「すみません。ちょっとだけ優花をよろしいですか？」

と目を向けた。

「優花ちゃん、ちょっとおじいちゃんの所においで。」

ケニーは、泣きじゃくる優花を抱き寄せると、しおりを見て頷いた。

しおりはケニーに頭を下げると、棺の中のジョージをもう一度振り返つた。そしてゆっくりと近づくと、その愛したジョージの子供の様な顔に自分の顔を寄せた。

「忘れられないって事は、又いつか会えるって事だったわね・・・」

そう語りかけると、微笑みながら唇にキスをした。

「彼女は・・・？」

カリフォルニアから駆けつけた北川は、その様子を見てケニーに訊ねた。

「ボーイが・・・いや、ジョージが愛した最初で最後の女性だよ・・・」  
ケニーはそう言うと涙を流した。

ジョージの身体が茶毘に付される時が来た。

参列者が泣き叫ぶ中、しおりは少し離れた所から、優花の手を引いて見ていた。

そして点火スイッチがオンになった瞬間だった。しおりの身体を、サツと巻き込む様に風が横切った。

と同時に、

お兄ちゃん！！

しおりの耳に、嬉しさで弾ける様な女の子の声が響いた。

ふと空を仰ぐと、満面の笑顔を浮かべながら両手を広げるジョージに、駆け寄り飛びついて喜ぶ、真由の姿が見えた様な気がした。

「やっと会えたね、真由ちゃん・・・」

しおりはそう呟くと、一筋の白い煙が伸びていく、青い空に向かって微笑んだ。

その夜、しおりは憲二と優花が寝静まるのを待って、バッグを持つと車に乗り込んだ。

バッグの中からジョージの携帯を取り出すと、電源を入れてみた。ピンと金属音が鳴って画面が明るくなる。しおりはメニューボタンを押してみた。ピクチャーの所へ行くと、保存されている数枚の写真がある。

全てあの時の写真だった。

優花とジョージが顔を寄せ合っている写真。

直立不動で、しかめっ面のケニーと、しおりと優花三人の写真。

そして、しおりとジョージが並んで写った写真……

しおりは微笑んだ。

なんて緊張しているのだろう……

これじゃまるで修学旅行の写真みたいじゃない……

ふと、ジョージがしおりに言った事を思い出した。

出来たら、バカチンって言ってもらえます……？

そう言って子供みたいに笑ってたっけ……

ふふふ……ジョージだったらなんでもとくっ付いてくれなかったの……

ほんとにバカチンなんだから……

涙が溢れてきた。

ハンカチを取り出そうとしてバッグの中に手を入れたしおりは、中のCDに気が付いた。

機内に預ける荷物の中に入れてしまっただけで、万が一壊されるのを避ける為に、バッグの中に入れておいたのだった。

しおりはイグニッションキーを回すとCDを入れた。

すでに何度も聞いている切ないギターの音に続いて、アールン・ネイビルの甘く、優しく包み込むような声が響いてくる……

I can hear her heartbeat from  
a thousand miles  
And the heavens open up every

time she smiles  
And when I come to her that is  
where I belong  
And I'm running through her like  
a river's song

She gives me love, love, love,  
love, crazy love  
She gives me love, love, love,  
love, crazy love

しおりは夜空を見上げた。

忘れられない笑顔・・・

いつか又会える笑顔・・・

星の間にジョージの顔が浮かんできた。

しおりの目から涙がポロポロとこぼれ始めてくる。

「ジョージ！ジョージ・・・！！」

しおりの小さな叫びは、満天の星の中へと吸い込まれていった。

三日後、しおり達は帰国した。

## 第七章：エピソード

ジョージ、久しぶりね。真由ちゃんと楽しくやってるのかな・・・？  
？ 去年は来られなくてごめんね。ポートランドってやっぱり遠いね、  
ちよっとお墓参りって訳には行かないもの・・・私ね、毎日、あな  
たの写真を見ては、早く会える日を楽しみにしていたの・・・でも、  
昔、同じ様な事を言ったあなたを叱った事があったわね、死ぬ為に

生きている様なものだって・・・

ジョージの命日からちょうど二年後、しおりは、ビーバートン市が見下ろせる場所にある墓地に来ていた。

短く刈り揃えられた芝生が美しい、広大な墓地の隅にひっそりとジョージの墓はあった。

帰国して一カ月後に、しおりと憲二は離婚した。意外にも、離婚を切り出したのは憲二の方だった。

本社務めをするようになり、歓迎会をしてもらったり、仕事帰りに同じ部署の連中と飲みに行ったりしている内に、一人の女性と仲良くなってしまうたらしい。なんでもその女性は、ベトナム行きにとても前向きなのだそうだ。

しおりは離婚届に判を押した。

自分は駐在員の妻としても、憲二の妻としても失格なのだ。とやかくいう資格などありはしない。それにもし、憲二から先に言いだされなければ、自分から離婚を申し出るつもりだった。

優花は、しおりが引き取る事になった。

その後しおりは、古くからの友人と二人で始めた、アメリカからのペット商品の輸入販売が軌道に乗り、その仕入れを消費税の無いオレゴンを中心に行う事になったのだった。

これからはちよくちよく仕事で来る事になりそうだ。

ジョージ・・・あなたからは見えるのかしら、私達が・・・今はね、あなたに会える日が早く来たらなんて思わない。だって、あなたに逢えた時、沢山のお話を聞かせたあげたいもの。そして、沢山見てもらいたい事があるのよ・・・

「しおりさん、そろそろ空港に行く時間だよ。」

ケニーが後から声を掛けた。

「はい。」

しおりはケニーの方を振り向くと、また振り返って、

「あなたたちもそろそろ行くわよ。優花、じょうじ！」

そこには、七歳になる優花と、その優花の小さな手を必死に掴んでいる、二才になるうかという目のくりくりした男の子がいた。

「本当に良く似ているな。おい！ボーイ！来い、おじいちゃんが抱っこしてやる！」

ケニーの腕に抱かれた男の子の胸に、傷の付いた大きなードルコインがぶら下がっていた・・・

エンド

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1292g/>

---

Unforgettable ~ 忘れられないあなた ~

2010年10月8日15時59分発行